●国際連合大学 2011-2012 年国際教育交流事業●

中国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告

北京市・内蒙古自治区呼和浩特（フフホト）市

2012 年 5 月 27 日(日) ― 6 月 3 日(日)

国際連合大学 [UNU]
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]

●国際連合大学 2011-2012 年国際教育交流事業●
●国际联合大学 2011-2012 年国际教育交流事业●

中国政府日本教職員招へいプログラム
中国政府日本教职员邀请计划

実施報告
实施报告

北京市・内蒙古自治区呼和浩特（フフホト）市
北京市・内蒙古自治区呼和浩特(HUHEHAOTE)市

2012 年 5 月 27 日(日) ― 6 月 3 日(日)

2012 年 5 月 27 日(周日) ― 6 月 3 日(周日)

はじめに(日本語・中国語) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
前言(日文/中文)
1. 実施概要(日本語・中国語) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
实施概要(日文/中文)
2. 表敬訪問(日本語・中国語) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
礼节性访问(日文/中文)
3. 学校訪問(日本語・中国語) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
学校访问(日文/中文)
4. 歴史と文化訪問(日本語) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
历史及文化访问(日文)
5. 総合所見(日本語) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
综合见闻(日文)
6. 成果と今後への活用(日本語) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
成果及今后应用(日文)
資料(日本語) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
资料(日文)

国際連合大学 [UNU]
国际联合大学 [UNU]
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]
公益财团法人联合国教科文组织・亚洲文化中心[ACCU]

はじめに

国際連合大学(UNU:United Nations University)は、アジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的として、2002 年より日本政府の拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を実施してきました。国際連合大学はこの一環として、交流事業を公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU:Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO)へ委託し、広く展開しています。

2002 年からはじまった「国際教育交流事業」では、これまで 10 回にわたって中国教職員の招へいプログラムを実施しており、これまでに述べ 1,200 名を超える中国の教職員を日本に招へいしてきました。

翌 2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を中国へ派遣してきました。これらの交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは参加人数を倍増し、中国の教育部による招へいプログラムとして、日中教職員相互交流のさらなる発展を目指して実施されるようになりました。

このたび 2012 年5月 27 日から6月3日に実施された「中国政府日本教職員招へいプログラム」では、2011 年 10 月に中国教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、2012 年 10 月に受け入れていただく自治体や学校の教職員と、公募で選ばれた教職員が参加しました。中国教育部で中国の教育事情や制度について説明を受けたのち、北京市と、内蒙古自治区呼和浩特(フフ

ホト）市での学校および教育文化施設等の訪問を通して、中国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、中国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。

このたびの訪問が、中国の教育や文化に対する参加教員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日中の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、中国教育部、文部科学省、外務省、及び、内蒙古自治区教育庁、内蒙古呼和浩特市教育局、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2012 年9月

国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

前言

国际联合大学(UNU:United Nations University)为提高亚太地区的教职员和教育领域专家等的素质并促进其相互理解，于 2002 年起在日本政府的资助下开展“日本国际教育计划”。作为其中一环，国际联合大学委托公益财团法人联合国教科文组织·亚洲文化中心(ACCU:Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO)广泛开展交流事业。

“国际教育交流事业” 始于 2002 年，至今为止已实施中国教职员邀请计划 10 余次，正如所述，已邀请超过 1,200 名中国教职员至日本。

作为上述计划的对应举措，次年即 2003 年起，每年向中国派遣 10 名左右的日本教职员。这些交流事业的成果获得中国政府的好评，自中日邦交正常化 35 周年的 2007 年起参与人数倍增，为进一步加深中日教职员相互交流，由中国教育部带头实施。

本次“中国政府日本教职员邀请计划”的实施时间为 2012 年5月 27 日起至6月3日止，参与者包括 2011 年 10 月协助接待中国教职员的自治体与学校的教职员、2012 年 10 月负责接待的自治体与学校的教职员、以及公开征集选拔的教职员。在听取中国教育部对中国教育情况和制度的说明以后，对北京市及内蒙古自治区呼和浩特（HUHEHAOTE）市的学校及教育文化设施等进行访问，藉此对中国教育的现状和课题、访问城市的教育特征、两国教育课题的异同点进行学习，同时有机会与中国教职员、儿童学生展开交流。

本次访问的目的是加深教职员对中国的教育和文化的理解，同时也希望回国后通过各项活动进一步促进中日教职员之间、学校之间的交流。

最后，针对以中国教育部、文部科学省、外务省、及内蒙古自治区教育厅、内蒙古呼和浩特市教育局、各访问院校为首的，对本计划予以支持协助的相关人员表示衷心感谢。

2012 年9月

国际联合大学

公益财团法人联合国教科文组织·亚洲文化中心

1． 実施概要

今回の国際教育交流事業中国政府日本教職員招へいプログラムは 2012 年5月 27 日から6月3日の8日間にわたり開催された。中国では、中国教育部、内蒙古自治区教育庁、内蒙古呼和浩特（フフホト）市教育局の協力を得て、北京1校、呼和浩特市4校の学校訪問をしたほか、中国教育部と内蒙古自治区教育庁を表敬訪問した。また、意見交換や文化施設見学を通じ、多くを学び、交流を果たして帰国した。

訪問団の構成は、参加者として、1）2011 年 10 月に日本を訪問した中国教職員の受入れ地である山口県美祢市と岡山県総社市の教育委員会から推薦された教職員、2）同年訪問した東京近郊の学校の教職員、3）2012 年 10 月に中国教職員の受入れにご協力いただく教育委員会のうち、長崎県長崎市の教育委員会より推薦された教員、4）2011 年 10 月の中国教職員の受入れをしていただき、かつ 2012 年 10 月も受入れにご協力いただく熊本県荒尾市、東京都多摩市および徳島県教育委員会から推薦された教職員で構成される合計 20 名であった。このほか、国際連合大学、文部科学省およびユネスコ・アジア文化センターから計5名が同行した。訪問団の団長は熊本県立荒尾支援学校校長の和久田恭生氏、副団長は徳島県立ひのみね支援学校教頭の久保田勝己氏と岡山県総社市教育委員会学校教育課主幹の東長典氏の2人である。

出発前日の5月 26 日、羽田空港近くのホテルで訪問にむけてのオリエンテーションが実施された。オリエンテーションでは、国際連合大学大学院事務局長秋葉正嗣氏、ユネスコ・アジア文化センター事務局長島津正數、文部科学省初等中等教育局教職員課課長補佐井上賢一氏のあいさつにつづき、文部科学省生涯学習政策局調査企画課専門職の新井聡氏より、「中国の教育事情について」と題して中国の教育概要、初等中等教育概要、多様性から見る中国の教育についての講義があった。また、前年度プログラム参加者を代表して板橋区立第六小学校の鎌塚房夫主幹教諭と筑波大学附属坂戸高等学校の丹羽美由紀教諭から前年度の経験に基づいて見所や諸注意などがアドバイスされた。その後、2人への質問を中心に本年度参加者との意見共有会が行われ、訪中に際しての目的意識を高める有益な時間となった。

その後の懇談会では、オリエンテーションでは時間の関係上話しきれなかった詳細な経験談なども交え、初対面の参加者同士が歓談したり、中国での文化交流として披露する日本の歌を全員で練習するなど出発前の緊張をほぐす和やかな時間となった。

プログラム第1日の5月 27 日の昼過ぎ、訪問団 25 名は羽田空港を出発し、同日夕刻北京首都国際空港に到着した。空港では中国教育部国際協力交流司アジア・アフリカ課の王鉄輝（WANG Tiehui）氏の出迎えを受け、専用バスにて教育部近くのホテルに移動した。本プログラムでは、王鉄輝氏が担当者として期間中全行程に随行した。

第2日の 28 日午前は中国教育部への表敬訪問を行った。教育部では訪問団に対して国際協力交流司司長の劉宝利（LIU Baoli）氏と発展企画総合処の処長の向明灿（XIANG Mingcan）氏が中国の基礎教育と制度の説明を行った。学校訪問前に、中国教育部から中国の教育方針と教育概要の説明を受けることで、学校訪問時の理解を深めることができた。教育部主催の昼食会では劉宝利氏と向明灿氏の2名が主催側ホストとして出席し、訪問団と歓談した。

5月 26 日のオリエンテーションにて。。

午後は在中国日本大使館広報センター一等書記官柳澤好治氏に同行いただき、北京師範大学附属実験中学を訪問し、教育内容についての説明を受けた。

学校訪問後、宿泊ホテルの会議室で第一回情報共有会を行った。お互いに親しくなるためのアイスブレークを主とした自己紹介に続き、訪問団員がプログラムの目的を紙に書き出して発表した。ワールドカフェ形式の手法を使って参加者一人ひとりがなるべく多くの訪問団員から意見を貰い、それを全員で共有することができた。

第3日の29日は北京首都国際空港から空路で内蒙古自治区の省都である呼和浩特市に移動した。内蒙古自治区は中国の5つある少数民族自治区のうちの1つであり、省都の呼和浩特市は漢族がその人口の大部分をしめるが、蒙古族、回族ほかの少数民族も多く居住している。 呼和浩特市は4区(回民区、玉泉区、新城区、賽罕区)で構成されている。今回のプログラムでは6月1日までの呼和浩特市滞在期間中に、回民区の学校2校、新城区の学校2校を訪問した。

呼和浩特白塔国際空港にて内蒙古自治区教育庁基

◆中国の教育に関する基礎データ

中国の総人口 133,972 万人

	学校数	生徒数	教員数
小学校	262,751	10,478.3	561.7
中学校	59,159	5,721.4	352.5
普通高等学校	16,557	2,657.4	151.8
特別支援学校	1,706	42.6	3.97

＊2010 年度データ。
中国の初級中学が日本の中学校、高級中学が高等学校に相当。
出典：文部科学省「諸外国の教育動向 2011 年度版」
（小学校、中学校、普通高等学校の学校数、生徒数は国公立と私立の合計とした。）

◆訪問都市の人口と面積

北京市（2009 年統計）

面積	16,410.54 ㎢
人口	1,245.8 万人

フフホト市（2009 年統計）

面積	約 17,224 ㎢
人口	227.4 万人

出典：JETRO 中国エリア別情報

教処処長王利生(WANG Lisheng)氏ほか、内蒙古自治区の教職員らの出迎えをうけた訪問団一行は宿泊ホテルに向かうバスの中で、内蒙古自治区と呼和浩特市についての説明を受けた。ホテルで昼食をとったあと、漢民族と少数民族との友好の象徴とうたわれる昭君墓を見学した。

空の青さが印象的な呼和浩特市郊外

第4日の 30 日朝、訪問団一行はバスで内蒙古自治区教育庁の表敬訪問に向かった。内蒙古自治区教育庁の1階ロビーでは「日本基礎教育教員訪華団ご一行様、ようこそ内蒙古自治区教育庁へ！」と書かれた大きな電光掲示板が出迎えてくれた。ここでは、王利生氏のほか、内蒙古自治区教育庁副庁長の朱炳文(ZHU Bingwen)氏、呼和浩特市教育局呼和浩特市教育学会副調研員会長の王新(WANG Xin)氏、国際協力交流処処長の朱広元(ZHU Guangyuan)氏が出席した。王利生氏は2011-2012 年中国教職員招へいプログラムのBグループ(受入市:熊本県荒尾市)のグループ長、朱広元氏は2009-2010 年中国教職員招へいプログラムのEグループ(受入市:埼玉県さいたま市)のグループ長である。朱炳文氏が、あいさつと中国政府の政策説明とその方針にそった内蒙古自治区の教育方針を説明した。訪問団は内蒙古自治区の基礎教育、職業教育、高等教育、民族教育、教育交流などを詳しく知ることができた。続いて王利生氏が内蒙古自治区の教育制度、防災・環境教育、特殊教育、英語教育、学習能力向上指導について説明した。王利生氏は、前年の荒尾市訪問時に特に印象に残ったという熊本県荒尾支援学校との交流について熱く語った。

表敬訪問を終えた一行は、呼和浩特市の文化施設である内蒙古博物院を見学し、内蒙古自治区の歴史や民族文化、地理について学んだ。昼の交流会は内蒙古の礼式にのっとり、団長をはじめ団員全員は客人をもてなす哈达(Hada)と呼ばれる青い布を首に巻いてもらい、天の神、地の神、自分への祝福を願いながら乾杯をした。内蒙古の代表料理の羊の焼肉や内蒙古の代表的な農作物である蕎麦粉料理と蒙古の馬頭琴やホーミーなどの民族音楽や踊りが振舞われ、訪問団を歓迎した。

午後、一行は新城区勝利街小学を訪問した。同校では校庭にレッドカーペットが敷かれ、文字通りの「熱烈歓迎」で一行を迎えた。校内では、音楽の授業や美術教室と習字の教室を見学したのち、校長の王淑珍(WANG Shuzhen)氏から学校の特色についての説明を受けた。その後、1年生から6年生までの児童による踊り、合唱、ファッションショーなど、こどもの日の祭典のパフォーマンスが訪問団に披露された。披露された数曲の歌のうち、ひとつは日本の「あかとんぼ」であった。壇上に出た児童たち以外の児童たちは、訪問団の後部・横に置かれた椅子に座り、訪問団たちと一緒に演目を楽しんだ。その後、訪問団は、校庭にいる全児童に手を振られながら勝利街小学をあとにした。

第5日の 31 日は午前中に呼和浩特市回民区第十六中学と呼和浩特市回民区太平街小学の2校を訪問した。回民区の名前は中国の少数民族の一つである回族が多く居住する地域であったことに起因する。そのため、学校には回族をはじめとする少数民族の児童・生徒が多く在籍する。

呼和浩特市回民区第十六中学では、雨が降りしきるなか李義平(LI Yiping)校長と代表の生徒たちと先生に歓迎された。同校では生徒たちによる呼和浩特の民族舞踊と太極拳の舞踏が披露された。同校は外国語(特に英語)に力を入れており、司会兼進行役の3人の生徒がそれぞれ、中国語、英語、日本語で学校概要を説明した。また、同校では生徒たちが主となって校舎の中の様子や授業の様子を案内してくれた。民族文化の継承にも力を入れており、生徒たちからは蒙古の民族音楽である馬頭琴の演奏とホーミーが披露された。国際協力に力を入れており、生徒からは記念品や生徒たちの連絡先が訪問団に手渡された。

次に訪問した呼和浩特市回民区太平街小学は、特別

支援学校を併設する学校である。この特別支援学校は同じ敷地内の別棟にあり、普通小学校の棟で授業や教室の説明を受けたあとに見学した。普通小学校内の書道教室では、訪問団員が児童たちに書道でひらがなを披露した。特別支援学校の棟では、訪問団は教室で児童・生徒たちの手作り餃子を食べたり、児童・生徒たちの運動や笛・ピアニカの演奏などを見学し、直接、笑顔を交わしたり、身振り手振りで話しかけたりしていた。

この日の昼食会は呼和浩特市教育局の主催で行われた。内蒙古呼和浩特市教育局副局長の云恒（YUN Heng）氏をメインホストとし、内蒙古自治区教育庁国際協力交流処の李剛（LI Gang）氏、呼和浩特市教育局副調研員であり、呼和浩特市教育学会会長でもある王新（WANG Xin）氏や通訳を担当した内蒙古自治区の教職員らも同席した。 午後は玉泉区大召エリアでチベット仏教の大召寺とその周辺の歴史地区を見学した。

第6日の6月1日の午前、訪問団一行は呼和浩特市新城区山水小学を見学した。山水小学は創立2008年の新しい小学校である。児童は農村からの通学生が多く、農村の教育にも貢献している。校長の王雅萍（WANG Yaping）氏の学校概要説明のあと、訪問団は校庭で児童たちの運動の様子を見学した。全校児童は整列して体操を行ったのち班に分かれて縄跳びやローラースケート、バトミントンなどを行った。訪問団員は自由に参加して一緒に運動をした。

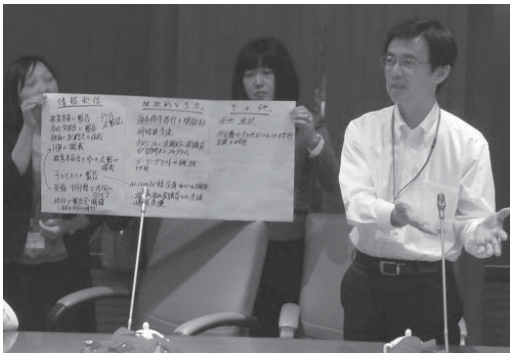
午後、訪問団は王利生氏、王広元氏と、内蒙古自治区の教職員らに見送られ、北京首都国際空港へ飛び立った。北京に戻り、夕食をとったあと、宿泊ホテルの会議室で第二回情報共有会を行った。ここでは「継続的な交流をするには」「情報発信」などについて、いくつかのグループに分かれて意見を出し合った。訪問団員は今後の国際交流について自分のすべき目標と方法を再確認しあう機会を得た。

第7日の6月2日の朝、訪問団は天安門広場と紫禁城を見学した。日本語の専門ガイドにより、訪問団は詳しく説明を受けることができた。訪問団のなかには歴史や社会の教職員もおり、興味深く説明を聞いていた。

最終日の6月3日、ホテルをチェックアウトした一行は北京首都国際空港にて解散し、帰国の途に着いた。

中国の基礎教育について講義を受ける。

前年度プログラム参加者からのアドバイス



第二回情報共有会では帰国後の活動予定を発表しあった

1．实施概要

本次国际教育交流事业中国政府日本教职员邀请计划为期 8 天，实施时间自 2012 年 5 月 27 日起至 6 月 3 日止。在中国，该计划得到中国教育部、内蒙古自治区教育厅、内蒙古呼和浩特（HUHEHAOTE）市教育局的协助，对北京 1 所、呼和浩特市 4 所学校分别进行学校访问，另对中国教育部和内蒙古自治区教育厅进行礼节性访问。此外，更通过意见交换和文化设施参观的方式、进行多样化的学习交流后回国。

组成访问团参加者共 20 人，包括 1）山口县美祢市及冈山县总社市的教育委员会（2011 年 10 月访日中国教职员接待单位）所推荐的教职员；2）同年访问的东京近郊学校的教职员；3）长崎县长崎市教育委员会（2012 年 10 月协助接待中国教职员的教育委员会之一）所推荐的教员；4）熊本县荒尾市、东京都多摩市及德岛县教育委员会（2011 年 10 月中国教职员接待单位、2012 年 10 月协助接待单位）所推荐的教职员。另有来自国际联合大学、文部科学省及联合国教科文组织·亚洲文化中心的 5 名人员同行。访问团的团长为熊本县立荒尾支援学校（注释：残障学校）校长久田恭生先生、副团长为德岛县立日之峰支援学校教导主任久保田胜己先生及冈山县总社市教育委员会学校教育科主管东长典先生两人。

出发前一天即 5 月 26 日，在羽田机场附近的酒店召开动员会。会议中，国际联合大学研究生院事务局长秋叶正嗣先生、联合国教科文组织·亚洲文化中心事务局长岛津正数先生、文部科学省初等中等教育局教职员科科长助理井上贤一先生分别致辞，接下来由文部科学省终生学习政策局调查企划科专员新井聪先生以《关于中国教育情况》为题，针对中国的教育概要、初等中等教育概要、中国教育的多样性等问题进行讲解。此外更由上年度本计划的参与者代表板桥区立第六小学校骨干教师镰塚房夫和筑波大学附属坂户高等学校（高中）的丹羽美由纪教谕（日本教师职称）根据上一年度的经验，针对见闻及各项注意事项等提出建议。其后，本年度参与者向 2 人进行提问，以此为中心展开意见交流，这个环节有助于提高访华期间的目的意识。

随后的座谈会中，针对动员会上因时间关系未能充分说明的详细经验心得等进行交流、初见面的参与者之间相互畅谈、并全员一起练习作为中国文化交流表演节目的歌唱表演等，这个环节缓解了大家出发前的紧张感。

本计划的第 1 日即 5 月 27 日的午后，访问团一行 25 人从羽田机场出发，于同日傍晚到达北京首都国际机场。来自中国教育部国际合作与交流司亚非处的王铁辉（WANG Tiehui）先生至机场迎接，搭乘专用大巴到达教育部附近的酒店。本计划期间，王铁辉先生作为负责人全程陪同。

第 2 日即 28 日上午，对中国教育部进行礼节性访问。教育部的国际合作与交流司司长刘宝利（LIU Baoli）先生及发展企划综合处处长向明灿（XIANG Mingcan）先生就中国的基础教育及制度，向访问团进行说明。由于在事前听取了中国教育部对于中国的教育方针和教育概要的说明，因此学校访问时的理解更为深入。由教育部主办的午餐会中，刘宝利先生和向明灿先生两人作为东道主代表出席，与访问团展开畅谈。

下午在中国日报大使馆宣传中心一等书记官柳泽好治先生的陪同下，一起访问了北京师范大学附属实验中学，同时听取了教育内容的相关说明。

学校访问后，在入住酒店的会议室内进行第一次信息共享会。设置了个人介绍环节，主要目的是增进相互认识打破僵局，然后由访问团员对本计划的目的进行书面发表。使用世界咖啡（world cafe）的会议模式，让每位参与者尽可能获得更多访问团员的意见并全员共享。

第 3 日即 29 日，访问团从北京首都国际机场乘飞机至内蒙古自治区首府呼和浩特市。内蒙古自治区是中国 5 大少数民族自治区之一。在省会呼和浩特市，人口的大部分为汉族，但也包含了为数众多的蒙古族、回族及其他多个少数民族的居民。

呼和浩特市由 4 个区（回民区、玉泉区、新城区、塞罕区）组成。本次计划中，至 6 月 1 日为止的呼和浩特市逗留期间。将访问回民区 2 所、新城区 2 所学校。

内蒙古自治区教育厅基教处处长王利生（WANG Lisheng）先生至呼和浩特白塔国际机场迎接访问团一行，在搭乘巴士前往入住酒店途中，他对内蒙古自治区和呼和浩特市进行了说明。在酒店吃完午餐后，参观了作为汉族和少数民族友好象征的昭君墓。

◆中国の教育に関する基礎データ

中国の総人口 133,972 万人

	学校数	生徒数	教員数
小学校	262,751	10,478.3	561.7
中学校	59,159	5,721.4	352.5
普通高等学校	16,557	2,657.4	151.8
特别支援学校	1,706	42.6	3.97

＊2010 年度データ。
中国の初級中学が日本の中学校、高級中学が高等学校に相当。
出典：文部科学省「諸外国の教育動向 2011 年度版」
（小学校、中学校、普通高等学校の学校数、生徒数は国公立と私立の合計とした。）

◆訪問都市の人口と面積

北京市（2009 年統計）

面積	16,410.54 ㎢
人口	1,245.8 万人

フフホト市（2009 年統計）

面積	約 17,224 ㎢
人口	227.4 万人

出典：JETRO 中国エリア別情報

第 4 日即 30 日早上，访问团一行乘坐巴士前往内蒙古自治区教育厅进行礼节性访问。内蒙古自治区教育厅 1 楼大堂的大型电子告示板上显示了“热烈欢迎日本基础教育教员访华团一行访问内蒙古自治区教育厅”的欢迎词。此时除了王利生先生以外，出席人员还包括内蒙古自治区教育厅副厅长朱炳文（ZHU Bingwen）先生、呼和浩特市教育局呼和浩特市教育学会副调研员兼会长王新（WANG Xin）先生、国际合作与交流处处长朱广元（ZHU Guangyuan）先生。王利生先生为 2011-2012 年中国教职员邀请计划的 B 组（接待市：熊本县荒尾市）组长、朱广元先生为 2009-2010 年中国教职员邀请计划 E组（接待市：埼玉县埼玉市）组长。

朱炳文先生发表致辞，并就中国政府的政策及内蒙古自治区基于该方针的教育方针进行说明。访问团得以详细了解了内蒙古自治区的基础教育、职业教育、高等教育、民族教育、教育交流等情况。接下来王利生先生对内蒙古自治区的教育制度、防灾和环保教育、特殊教育、英语教育、学习能力提高指导进行说明。此外王利生先生还发表了热情洋溢的讲话，指出上年度曾访问荒尾市、与熊本县荒尾支援学校之间的交流为他留下了深刻的印象。

礼节性访问结束后，一行人参观了呼和浩特市的文化设施——内蒙古博物院，学习了内蒙古自治区的历史和民族文化、地理。

中午的交流会通过内蒙古的传统仪式进行，当地人民把用于招待客人、被称为哈达（Hada）的蓝布戴在以团长为首的全体团员的脖子上，表达对天神、地神、自身的祝福并举杯畅饮。内蒙古的代表食物烤羊肉、内蒙古的代表农作物荞麦粉菜肴、内蒙古的马头琴和呼麦等的民族音乐和舞蹈等，无一不表达出热枕的待客热情。

下午，一行人访问了新城区胜利街小学。该学校的学院内铺上了红地毯、上边写着“热烈欢迎”的大字，以此欢迎访问团一行。在校内，参观完音乐课、美术教室和习字教室后，校长王淑珍（WANG Shuzhen）女士对学校的特色进行说明。随后，1 年级至 6 年纪的学生进行了舞蹈、合唱、时装表演等六一儿童节的表演节目。几首表演歌曲的其中之一是日本的《红蜻蜓》。除台上进行表演的学生，其他学生都坐在访问团后方和两边的椅子上，与访问团一起欣赏演出。最后，访问团向操场上的全体学生挥手告别，离开了胜利街小学。

第 5 日即 31 日上午，访问了呼和浩特市回民区第十六中学和呼和浩特市回民区太平街小学两个学校。

之所以被称为回民区，是由于这是中国少数民族之一的回族较多聚居的地区。为此，学校的就读学生主要是以回族为主的少数民族学生。

在呼和浩特市回民区第十六中学，访问团受到了李义平（LI Yiping）校长和代表师生们冒雨的热烈欢迎。该校的学生们表演了呼和浩特的民族舞蹈和太极拳的舞蹈。该校注重外语（特别是英语）教育，节目司仪兼活动主持人等3位学生分别用中日英三语对学校概要进行说明。此外，主要在该校学生的带领下参观了校舍和教学的情况。该校致力于民族文化的传承，师生们表演了蒙古的民族音乐——马头琴演奏及呼麦。同时为促进国际合作交流，该校师生们把纪念品及自身的联系方法亲手交给访问团。

接下来访问的是呼和浩特市回民区太平街小学，该小学附设了特殊支援学校。这所特殊支援学校位于同一用地内的另一栋教学楼内，在普通小学教学楼内听取了对上课和教室的说明后对其进行参观。访问团向学生们表演了用书法书写平假名。特殊支援学校教学楼内，访问团在教室内品尝由学生们亲手制作的饺子，观赏学生们的运动、笛子和口风琴的演奏等，直接通过笑容、手势等身体语言进行交流。

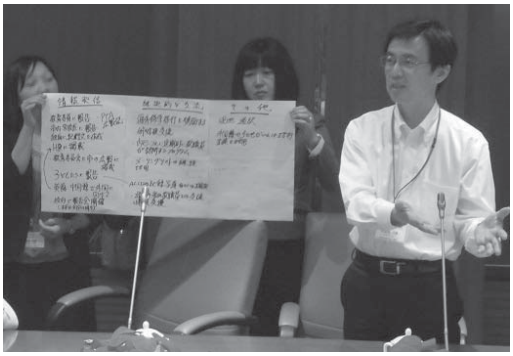
本日的午餐会由呼和浩特市教育局主持。以内蒙古呼和浩特市教育局副局长云恒（YUN Heng）先生为首，另有内蒙古自治区教育厅国际合作与交流处的李刚（LI Gang）先生、和浩特市教育局副调研员兼呼和浩特市教育学会会长王新（WANG Xin）先生及负责口译的内蒙古自治区教职员同席。下午在玉泉区大召区域参观了西藏佛教的大召寺和其周边历史地区。

第6日即6月1日的上午，访问团一行参观了呼和浩特市新城区山水小学。山水小学是2008年新创立的小学。学生多为来自农村的走读生，为农村的教育普及作出贡献。校长王亚萍（WANG Yaping）女士对学校的概要进行说明，然后访问团在操场参观了学生们运动的情况。全校学生列队做操，然后分班进行跳绳、滑旱冰、羽毛球等运动。访问团员通过自由参与的方式和学生一起运动。

同日午餐也是由王利生先生、王新先生、朱广元先生同席。访问团与作为主办方的内蒙古自治区教育厅和内蒙古呼和浩特市教育局的各教职员及全体人员一一握手致谢，并发表了访问期间的感想。

下午，访问团在王利生先生、王广元先生及内蒙古自治区教职员们的欢送下，搭乘了飞往北京首都国际机场的航班。返回北京进食晚餐后，在入住酒店的会议室进行了第二次信息共享会。会议中针对“如何进行可持续的信息交流”“信息发送”等议题，分成多个小组进行意见交换。藉此机会，访问团员得以对今后开展国际交流的目标和方法进行再次确认。

第7日即6月2日的早上，访问团参观了天安门广场和紫禁城。在中国教育部安排的日语导游的陪同下，访问团得以详细听取相关讲解。访问团的部分团员对历史及社会有着浓厚兴趣，兴致勃勃地听取了说明。



最后一日即6月3日，从酒店退房后，访问团一行在北京首都国际机场解散，踏上回国的旅程。虽然当天发生了航班改期等突发情况，但在中国教育部的帮助下，访问团全体人员最终得以平安归国。

2. 表敬訪問

中国教育部　[北京市]　5 月 28 日
内蒙古自治区教育庁　　5 月 30 日
[内蒙古自治区呼和浩特（フフホト）市]

訪問団は首都の北京市にある中国教育部と内蒙古自治区の首府である呼和浩特市にある内蒙古自治区教育庁を表敬訪問した。それぞれ 2010 年7月に発表された「国家中長期教育改革発展計画綱要」に沿った教育方針と課題が説明され、内蒙古自治区教育庁では、それに加えて地方の優秀な文化を次世代に継承する地方カリキュラムが説明された。

中国教育部

[北京市]　5 月 28 日

中国教育部は 1998 年3月に旧国家教育委員会が改称されて置かれた中央政府の組織である。教育全般を総括し、日本の文部科学省にあたる。教育の基本方針・政策、諸基準を制定し、中央各部委員会および地方を指導する。

北京到着の翌日の午前、訪問団一行は中国教育部を表敬訪問した。中国教育部では、国際協力交流司司長の劉宝利（LIU Baoli）氏から最初に訪問団に対する歓迎あいさつがあった。北京市では、日本語通訳は、今年のプログラムを担当する王鉄輝（WANG Tiehui）氏が行った。劉宝利氏のあいさつのあと、日本教職員の訪問団を代表して団長の熊本県立荒尾支援学校の校長の和久田恭生氏があいさつをした。和久田氏は今回の歓迎に対する謝辞と東日本大震災時の支援に対する謝辞を述べたあと、荒尾市の出身の仏教詩人である坂村真民の詩「生きることとは」を紹介した。和久田氏は、中国の資質教育と日本の「生きる力」の教育共通性について紹介し、中国の国家中長期教育改革発展計画を高く評価していると語った。それに対応し、劉宝利氏からも、2008 年の四川大震災時の日本からの支援などへの謝意に続き、日本の東日本大震災からの復興を祈念していることが伝えられた。

また、劉宝利氏から日中両国の教育について、次のように説明があった。

中国教育部部長の哀貴仁（AI Guiren）氏は日本との交流を重視している。また、日中両国は今年、国交正常化 40 周年を迎え、特に留学生の支援などの教育交流が効果的に発展してきており、21 世紀東アジア青少年交流プログラムの開始から5年が経過し、両国の交流の一層の発展を願い、今後も交流プログラムを実施したいとのことであった。

続いて中国教育部発展企画総合所所長の向明灿（XIANG Mingcan）氏より教育政策について説明があった。向明灿氏は 2004～2006 年の期間、政策研究員として訪日をしていたため、日本の事情にも詳しく、日本の制度・政策等の良い所を学ぶ必要があると語った。

2010 年に中国政府より発表された教育計画綱要「国家中長期教育改革・発展計画綱要（2010～2020 年）」に沿った教育方針と戦略的目標が説明され、戦略的目標として、1）より高いレベルの教育の実施、2）公平な教育の普及、3）教育内容の充実、4）生涯学習体制の堅持、5）特色ある体制の構築についての説明があった。さらに、徳育の重視、能力育成の強調、知識と実践力など全面的発展の指導など具体的な指針が報告された。義務教育改革については、9年間の義務教育の普及（農村部の学校設置、技能系教科の重視など）や、平均的な発展（基準・設備・教材の平均化、農村部、民族地区、辺境地区などへの支援、子供の負担感の軽減、家庭教育の重視など）について、取り組みと目標について説明があった。そのほか、防災教育や生涯教育についても日本同様に力を入れているということであった。**（西嶋徹）**

中国教育部にて：中国教育部国際協力交流司長の劉宝利氏（前列左から４番目）を囲んで

《参加者の感想》

井川裕之・・・・・・・・中国の教育の目標や計画を聞くことができました。目標に基づき、知識だけではない全人的な教育を目指していることも強調されていました。

中国の教育に対して受験勉強に偏った先入観を持っていたので、この話は大変意外なものでした。また、目標を掲げるだけでなく、農村部への予算配分をすることで農村部の学校の充実を図っていたり、中央の権限を自治体へ、そして各学校へと移していくことで特色を生む施策も行っていることが分かりました。

熊谷久恵・・・・・・・・日本の文部科学省にあたる組織において、中国の教育基本方針を聞くことが出来たことは、事前のオリエンテーション「中国の教育事情について」と並び、有意義なことであった。なぜなら、中国教育の全体像を捉えることができ、その後の学校訪問時に中国の学校から学ぶべき視点を与えられたような気がするからである。

佐々木雅一・・・・・・・・教育部の教育改革・発展計画の担当者との交流を通じて、中国の教育戦略がEFAだけではなく、ESDも視野に入れていることが直接確認できた。また、中国の教育改革が大学入試改革と地方への権限委譲と伺えたことは、何よりの収穫であった。

佐藤尚美・・・・・・・・中国の教育に対する方針などについての説明があった。現在の中国の教育に不足している点について、今後どのように解決していくかについて聞くことができた。

特に都市部と農村部との格差が大きいことについて、それに対していかに差を縮めていくかについて、現在の中国の最も大きな課題と思われる。日本の教育の方針について、普段意識したことがなかったので、それについて考えるきっかけを与えてくれた訪問であった。

西嶋徹・・・・・・・・中国の義務教育改革については、教育部で政策が決定されると、予算が投入され、スピーディーに実行に移すことが可能な体制であるため、急速な改革が進んでいるという印象であった。

馬場晴美・・・・・・・・人を主として格差のない教育を普及する、という目標に非常に共感した。日本で感じていた以上に農村と都市の格差は大きいようだったが、それを教育部が認め、是正していこうとする姿勢に好感が持てた。また受験戦争の弊害（体力低下、睡眠不足、道徳教育の少なさ）などを改善しようと具体的な提案をしていることに驚いた。詰め込み教育だけでない、知徳体の習得は日本と

同様の課題であると実感した。

平松高志・・・・・・・・2002 年からの教育改革で教育の近代化を推し進め、義務教育の普及や施設の近代化、教育格差の是正などに取り組んできたことや、2010 年からの新たな教育改革では、農村と都市の教育の平均化を行い、そのための優秀な教師の確保などの具体的な方策を聞いた。中でも、一部の児童・生徒の学習時間が過度になっている現実があり、それを和らげ睡眠時間を確保しようとしていること、知・徳・体をバランスよく育成しようとしていることなど、日本でめざす「生きる力の育成」と同じ面があることが印象に残った。また、教師の資格についてもより高等教育機関の卒業が要件になるなど、日本と同様の方向性をもっていると感じた。

三田暢夫・・・・・・・・中国教育部への表敬訪問で、国としての教育方針を知ることができた。中国が今後世界の中で、どのような方向に向かっていくのかを知ることができるとともに、都市部と農村部との格差や保護者の進学に対する熱の入れようとそれに対する国の姿勢を知ることで、目に見える学力だけではなく「生きる力」を育むことの大切さを再確認することができた。

中国教育部より中国教育事情が詳しく説明された

中国教育部

中国教育部との記念品交換

内蒙古自治区教育庁

[内蒙古自治区呼和浩特市]　　5 月 30 日

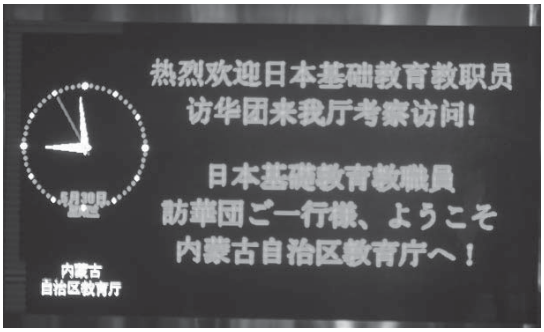
本事業における内蒙古自治区教育庁の日本教職員の訪問は 2009 年6月に続き2回目である。2011 年 10 月に実施した中国教職員招へいプログラムでは内蒙古自治区の各教育機関から 10 人の教職員が参加した。同プログラムで荒尾市を訪問したグループの長を務めたのは、本教育庁基礎教育処処長の王利生（WANG Lisheng）氏である。中国訪問団の団長の和久田氏をはじめとする荒尾市からの参加者とは半年ぶりの再会となった。

呼和浩特市に到着した翌日の第4日の午前、訪問団は内蒙古自治区教育庁を表敬訪問した。内蒙古教育庁では王利生氏のほか、副教育庁長の朱炳文（ZHU Bingwen）氏、対外協力交流所所長の朱広元（ZHU Guangyuan）氏、呼和浩特市教育局からも副調研員の王新（WANG XIn）氏がホストとして訪問団を迎えた。ホストのうち朱広元氏も 2009 年 10 月の中国教職員招へいプログラムでグループの長として埼玉県さいたま市を訪問している。

はじめに日本教職員訪問団長の和久田氏が訪問団の構成メンバーについて紹介し、つづいて内蒙古教育庁から出席者の紹介があった。

朱炳文氏からの歓迎の言葉ののち、内蒙古自治区の人口や民族や風俗、風習の説明を受けた。内蒙古自治区は中国北部の辺境地にあり、モンゴル族、華人、少数民族の 2400 万人で構成される。12 の市と 101 の県があり府都は呼和浩特（フフホト）、美しい自然と独特の風俗や習慣を有し、馬頭琴はユネスコの文化遺産にも指定されている。中国国内で最も早い 1947 年に成立した自治区であり、既に 65 年が経過、経済開放政策による経済発展に伴って教育分野も発展したことなどが説明された。教育については、日本から事前に渡した教職員の興味・関心にあわせた説明があり、それによると、2011 年の「自治区教育改革・発展計画綱要」による就学前から高校までの基礎教育の整備、経済発展に伴っての職業教育の充実では、現在 283 の中等職業学校で 80 万人以上が学び、高等教育の分野では自治区内に 50 近い大学・短大が整備され、博士、修士を受け入れている研究所も充実、そのため現在では大学入学ではなく、卒業後の就職が難しくなっていることなどが説明された。また民族教育は自治区の重点課題であり、民族小中学校や民族言語による教育についても言及があった。教育交流については積極的に行っており、留学生の派遣、受入れや海外での中国語普及など多様な交流をしている。2003 年からは毎年小中学校の教師が訪日し、日本の教育技術、管理理念を学んでいることなどが報告された。

ついで王利生氏による基礎教育の説明があった。氏は、まず荒尾市と今回の訪問団長の和久田氏が校長を務める熊本県立荒尾支援学校が印象に残っていることを、同校生徒手作りの記念品を手元に置いて紹介した。引き続き同氏より教育制度について以下の説明があった。中国では国家の指導のもと地方が責任をもって政策を実地しており、19 世紀から基礎教育（義務教育）の普及に取り組んできた。特に重点は教育の標準化である。また、カリキュラム改革も進み、内蒙古自治区では、国家カリキュラムで中国語、外国語、物理、化学等について学び、地方カリキュラムで歴史・文化教育



上：宿泊先に掲げられた電光掲示板
下：内蒙古自治区教育庁のロビーに掲げられた電光掲示板

内蒙古自治区教育庁、呼和浩特市教育局の職員たちと一緒に記念撮影

を学んでいる。特に地方プログラムについては、民族文化の保持と双語教育（2言語教育）を大切にしていることなども説明された。防災・環境教育に関しては、経済発展に伴い環境問題を重要な課題として取り組んでいるとのことであった。特殊教育、英語教育、学習能力向上についても日本の教育との比較も交えながら詳しく説明があった。英語教育については、小学校3年生から取り入れており、現在は高い水準にあるが、引き続き今後の検討課題であると述べた。**（西嶋徹）**

《参加者の感想》

紺野知子・・・・・・・・内蒙古自治区の教育制度等について、非常に分かりやすい説明をしていただきよく理解することができた。特に印象に残っているのは、王利生基礎教育所所長の説明である。私たち参加者の抱負や目標と具体的な興味・関心事項について話してくださり、私の関心事項にあたる「防災教育」「学習能力向上」にもふれていただいた。「防災教育」については、「この地域に地震はないが嵐・洪水等の災害があるので 19 世紀から地方の状況に応じた防災教育が行われており、内蒙古でも一つの大切なプログラムとして実施している。日本のプログラムも学びたい。」とのことであった。また「学習能力向上」については、「知識を体系的に身に付ける能力が高い。『教育研究室』という組織で教材や教授法を研究している。」ということだった。

これらのことについてもっと具体的に多くのことを知りたいと一層興味が湧いた。今後も何らかの形でつながりをもち、情報交換や交流を深められると感じた。

清水由美子・・・・・・・内蒙古自治区の教育の現状の細かな説明を受け、様子を知ることができた。その中で特に感じたことは、内蒙古自治区では国の政策指導のもと、地方のカリキュラムとして歴史・文化教育を大切にし、伝統・文化の継承を意識して教育が実践されていることである。

内蒙古自治区の人びとの伝統を重んじ、民族としての誇りを大切にする心が教育にも表れているということを感じることができた。

馬場晴美・・・・・・・・教育では漢民族は蒙古語を学ばないことが多いそうだが、空港から街を歩けば必ず漢字表記と蒙古語表記が併用されていることから、少数民族の文化を尊重しようとする姿勢がうかがえた。

平松高志・・・・・・・・内蒙古自治区の現状についての説明を聞き、内蒙古自治区は農村から都市への移行が進み、教育の近代化や改革を推し進め、現在進行形で成長と改革が行われている地域であることを感じた。また、蒙古民族などの少数民族に加え、漢民族等の流入を受けての社会の変化にも対応していると聞いた。経済発展に伴った社会の要請を受け、大学や短大などの整備だけでなく、中等職業教育の充実がなされたと聞き、大変興味をもった。

和久田恭生・・・・・・・・王利生氏の説明で私たちが知りたい内容について事前の資料に基づいて的確に説明をしていただけた。教育制度、防災環境教育、特殊教育、英語教育、学習能力向上の概要が分かった。また、説明の冒頭で昨年度の本校訪問時の感想や本校の作業学習で中学部の生徒製品を大切にしていただいていることの紹介があり、感激した。

内蒙古自治区の教育制度について方針や課題が説明された

内蒙古自治区教育庁との記念品交換。朱炳文氏（左）と団長の和久田氏（右）

2011 年 11 月の荒尾市訪問時の様子を語る王利生氏。訪問時に荒尾支援学校から貰ったという記念品（写真手前）を紹介してくれた

2.礼节性访问

中国教育部　[北京市]　　5 月 28 日
内蒙古自治区教育厅　　5 月 30 日
[内蒙古自治区呼和浩特（HUHEHAOTE）市]

访问团对位于首都北京市的中国教育部和位于内蒙古自治区首府呼和浩特市的内蒙古自治区教育厅进行礼节性访问。并分别听取了在 2010 年 7 月发表的《国家中长期教育改革和发展计划纲要》基础上制定的教育方针和课题，内蒙古教育厅更进一步对于传承本地优秀文化的本地课程进行了说明。

中国教育部

[北京市]　5 月 28 日

中国教育部是中央政府组织，于 1998 年 3 月由原国家教育委员会改名而来。对全体教育事业进行统一管理，相当于日本的文部科学省。制定教育的基本方针和政策、各项标准，对中央各部、委员会及地方实施指导。

到达北京次日的上午，访问团一行对中国教育部进行了礼节性访问。中国教育部的国际合作与交流司司长刘宝利（LIU Baoli）先生首先对访问团进行欢迎致辞。北京市方面的日语口译由今年的计划负责人王铁辉（WANG Tiehui）先生担任。刘宝利先生的致辞结束后，作为日本教职员访问团代表的团长熊本县立荒尾支援学校的校长和久田恭生先生发表致辞。和久田先生在致辞中表达了对本次欢迎仪式的致谢、以及对东日本大地震赈灾援助的致谢。并介绍了出身于荒尾市的佛教诗人坂村真民的诗歌《何谓生存》。和久田先生对中国的素质教育及日本的“生存能力”教育在教育方面的共通点进行介绍，高度评价了中国的国家中长期教育改革发展计划。与此相应的，刘宝利先生也对 2008 年四川地震时日本给予的支援等表示感谢，并表达了对日本东日本大地震的灾后重建工作的殷切祝愿。

此外，刘宝利先生针对中日两国的教育进行以下说明。

中国教育部部长哀贵仁（AI Guiren）先生重视与日本之间的交流。此外，更表明中日两国今年将迎来邦交正常化 40 周年，特别是在留学生支援工作等教育交流的发展卓有成效，21 世纪东亚青年交流计划从开始至今已超过 5 年，希望两国间的交流得到进一步发展，并希望今后继续实施交流计划。

接下来是由中国教育部发展企划综合所所长向明灿（XIANG Mingcan）先生对教育政策进行说明。向明灿先生曾于 2004～2006 年期间作为政策研究员访日，因此对日本的情况知之甚详，他指出必须学习日本的制度和政策等的优点。对基于 2010 年中国政府发表的教育计划纲要《国家中长期教育改革和发展计划纲要（2010～2020 年）》而制定的教育方针和战略性目标进行说明，并就战略目标加以说明：1）实施更高水平的教育；2）普及公平教育；3)充实完善教育内容；4）坚持终生学习体制；5）构筑有特色的体制。更进一步汇报了重视德育、强调能力培养、知识与实践能力等全面发展的具体指导方针。在义务教育改革方面，针对普及 9 年义务教育（在农村地区建校、重视技能类科目等）及平均发展（标准、设备、教材的平均化，对农村、民族地区、边境地区等的支援，为学生减负，重视家庭教育等），对相关举措和目标进行说明。此外，据说也和日本一样致力于防灾教育和终生教育。**(西岛彻)**

《参加者的感想》

井川裕之·····听取了中国教育的目标和计划的相关介绍。介绍中强调将以这一目标为基础，不会仅偏重知识，将致力于全面发展人才的教育。因为先入为主的觉得中国教育侧重应试教学，所以听到这番话觉得十分意外。此外，除了目标以外，更进一步了解到向农村地区投入预算完善农村地区的学校建设、把权限由中央向自治体然后

向各学校转移等因地制宜的政策措施。

熊谷久惠·····通过相当于日本文部科学省的组织的介绍，我们对中国的教育基本方针有所了解，这与事前介绍会中的“关于中国的教育情况”相对应，十分有意义。因为可以由此捕捉到中国教育的整体情况，让我认识到在其后的学校访问中，必须从哪些方面向中国的学校学习。

佐佐木雅一·····通过与教育部的教育改革及发展计划的负责人展开交流，得以直接确认到，中国的教育战略并不仅仅是 EFA，还涉及 ESD 范畴。此外，得知中国教育改革将进行大学入学改革并将权限下放地方，感觉获益良多。

佐藤尚美·····听取了中国的教育相关方针等说明。可以了解到针对现时中国教育的不足之处，今后将采取怎样的解决措施。

特别针对城市和农村的差距较大，如何缩小差距将是当前中国所面临的最大课题。平常并未对日本的教育方针有所意识，这次访问让我有机会对此进行思考。

西岛彻·····中国的义务教育改革由教育部进行决策并投入预算，是可以有效实施的体制，因此感觉到改革步伐十分迅猛。

马场晴美·····对于普及以人为本的平等教育这一目标很有共鸣。农村和城市的差距似乎比日本更严重，但是教育部认识到这一情况并表明改善的决心，我觉得非常好。此外更提出了如何改善应试教育的弊害（体力降低、睡眠不足、道德教育减少）等的具体建议，让我大吃一惊。真实感受到并非仅仅是填鸭式教育，而是和日本一样将德智体全面发展作为教育课题。

平松高志·····从介绍中了解到，中国自 2002 年起开始推行教育改革推进教育的近代化，致力进行义务教育的普及、教育设施的近代化、教育差距的改善等，同时 2010 年起实施的新教育改革中，推行农村及城市教育的平均化，并为实现这一目标而采取确保优秀教师人才等具体措施。其中也得知部分学生学习时间过长这一现实，且教育部也致力缓和这一情况确保学生睡眠时间，让学生得到德智体全面发展等情况，感觉和日本一直努力的“生存能力的培养”在某些方面不谋合。此外，高等教育机构毕业是获得教师资格的必要条件等方面也和日本有着同样的发展方向。

三田畅夫·····在对中国教育部的礼节性访问中，了解到国家层面的教育方针。不仅知道中国在未来的世界舞台中、将朝着怎样的方向发展，同时也了解到中国致力缩小于城市和农村的差距、提高监护人的升学意欲等方面的态度，由此可以再次确认到，不能只偏重肉眼可见的学力，“生存能力”的培养尤为重要。

内蒙古自治区教育厅

[内蒙古自治区呼和浩特市]　5 月 30 日

自 2009 年 6 实施本计划以来，连续第二次在内蒙古自治区教育厅实施日本教职员访问。2011 年 10 月实施的中国教职员邀请计划中，来自内蒙古自治区各教育机构的 10 名教职员参加了活动。同计划中出任荒尾市访问组组长一职的是本教育厅基础教育处处长王利生（WANG　Lisheng）先生。时隔半年，他与以中国访问团团长和久田先生为首的荒尾市参与者得以再次相会。

到达呼和浩特市的次日、即第 4 日的上午，访问团对内蒙古自治区教育厅进行礼节性访问。内蒙古教育厅方面的出席者除王利生先生以外，还有对外合作与交流所所长朱广元（ZHU Guangyuan）先生、呼和浩特教育局副调研员王新（WANG XIn）先生。出席者中的朱广元先生曾于 2009 年 10 月作为中国教职员邀请计划的组长访问埼玉县埼玉市。

首先由日本教职员访问团团长和久田先生对访问团的组成成员进行介绍，然后由内蒙古教育厅对出席者进行介绍。

朱炳文先生进行欢迎致辞后，对内蒙古自治区的人口、民族和风俗习惯进行说明。指出内蒙古自治区位于中国北部的边境地带，人口 2400 万人分别由蒙古族、汉族、少数民族组成。内蒙古下辖 12 个城市及 101 个县，其首为府呼和浩特（HUHEHAOTE），拥有美丽的自然和独特的风俗习惯，马头琴被指定为联合国教科文组织的文化遗产。同时内蒙古还是 1947 年成立的中国最早的自治区，至今已成立 65 年，经济开放政策拉动经济发展后，教育领域也随之发展。在教育方面，针对日本方面所提交的、教职员感兴趣及关注的问题点进行说明，并由此得知，基于 2011 年的《自治区教育改革和发展计划纲要》对学前至高中的基础教育进行建设、并因应经济发展的需求不断完善职业教育，现有的 283 家中等职业学校的在读人数达到 80 万人以上，而在高等教育领域，自治区内设有近 50 所本科大专院校，对博士、硕士的定向研究所进行完善，更就由此导致大学入学容易、毕业后就业难的现状进行说明。此外也提及民族教育是自治区的重点课题，以及通过民族中小学和民族语言实施教育的情况。同时也阐述了对教育交流的积极态度，如派遣及接收留学生、在海外普及中文等多元化交流，自 2003 年起每年派遣中小学教师访日，学习日本的教育技术、管理理念等。

接下来由王利生先生对基础教育进行说明。王先生首先阐述自身对荒尾市以及由本次访问团长和久田先生担任校长的熊本县立荒尾支援学校的深刻印象，并拿出该校学生手工制作纪念品进行介绍。然后王先生对教育制度进行下述说明。中国将在国家指导的基础上，由地方负责进行政策落实，自 19 世纪起致力于基础教育（义务教育）的普及。特别把教育标准化视为重点。此外也推进科目改革，内蒙古自治区学习国家科目中的语文、外语、物理、化学等科目，同时也学习本地科目中的历史和文化教育。同时也特别指出本地科目重视民族文化的传承及双语教育（两种语言的教育）。在防灾和环保教育方面，随着经济发展，将把环保视为重要课题致力解决。并在对特殊教育、英语教育、学习能力提高等进行详细说明时，穿插了和日本教育之间的比较。从小学 3 年级开始引入英语教育，虽然现在处于高水平状态，但仍将继续作为今后的探讨课题。　**（西岛彻）**

《参与者的感想》

绀野知子·····关于内蒙古自治区的教育制度等的说明非常简单明了。印象最深的是王利生基础教育所所长的说明。针对我们这些参与者的抱负和目标、及具体的兴趣和关注问题进行了发言，其中也提及了我所关注的“防灾教育”和“提高学习能力”等问题。“防灾教育”方面，他指出“本地区没有地震，但是存在暴风雨和洪水等灾害，自 19 世纪起就根据各地情况开展防灾教育，将其作为内蒙古的一个重大教育项目。希望能学习日本在这方面的经验。”此外在“提高学习能力”方面，他指出“对知识进行体系掌握的能力高。通过名为‘教育研究室’的组织研究教材和教授方法”。

这些说明进一步激发了我的好奇心，希望进一步具体了解。希望今后可以通过某种方式保持联系，进一步加深信息交换和交流。

清水由美子·····听取了关于内蒙古自治区教育现状的细致说明，从而对总体情况有所认识。其中印象最深的，是内蒙古自治区在国家政策指导下，加入了本地科目，重视历史文化教育，在

进行教育实践的同时谨记传统文化的传承。

深深感受到内蒙古自治区人们是何等重视传统、并把他们这份心情融入了教育之中。

马场晴美·····在教育方面，汉族人似乎大多不学习蒙古语，无论是在机场还是走在街上，周边的标示文字都是汉语和蒙古语并用，表现了对少数民族文化的尊重态度。

平松高志·····听取了内蒙古自治区的现状说明后，我觉得内蒙古自治区正在实现由农村向城市的转化、教育的近代化和改革步伐得到推进、正处于改革发展阶段。此外，据说也根据蒙古民族等少数民族和汉族混居所引致的社会变化，采取了相应的政策措施。还了解到内蒙古自治区为满足经济发展所引致的社会需求变化，不仅对大学和大专等院校进行整备，更不断完善中等职业教育，我对这方面的情况很感兴趣。

和久田恭生·····在王利生先生的说明中，针对我们希望了解的内容的事前调查资料进行了确切的说明。我们了解了教育制度、防灾环保教育、特殊教育、英语教育、提高学习能力等方面的概要。此外在进行说明时，他首先发表了上一年度访问本校时的感想并认真介绍了本校初中学生的劳作学习作品，对此深表感激。

3. 学校訪問

北京師範大学附属実験中学　5 月 28 日
新城区勝利街小学　5 月 30 日
呼和浩特市回民区第十六中学 5 月 31 日
呼和浩特市太平街小学　5 月 31 日
呼和浩特市新城区山水小学　6 月 1 日

北京師範大学附属実験中学

[北京市]　5 月 28 日

学校長：葵暁東（CAI Xiaodong）
設立年：1927 年創立
児童数：約 3,000 名　/　教員数：約 300 名

公立の中学・高校。世界でも高い評価を受けている学校である。学校名にある「実験」とは、義務教育の改革の実践を行う学校であるという意味である。他の公立学校の模範とされており、体育にも力を入れている。水泳は国際大会に何人もの選手を送っている。

北京師範大学附属実験中学は訪問団がはじめて訪問する中国の学校であった。訪問団は、まず初めに校長の葵暁東（CAI Xiaodong）氏から学校の特色の説明を受けた。「実験」中学であるため、さまざまな授業改革を実践している。必修科目の他に、児童の実践・素質を伸ばすために、専修・専門・活動の授業を行っている。具体的には体育の授業など、児童の将来における持続的な能力・発展を目的としたものである。学科の教育では、数学や物理学などでは社会人や大学教授による授業もある。また、国際的視野を持った人材の育成のため、海外大学への進学も推し進めているとの説明を受けた。

その後、校内の見学を行った。体育館は地下1階にプールがあり、温水プールとなっている。これはオリンピックの開催時に造られたものである。生徒はさまざまな水泳の大会に出場している。体育館2階では丁度バレーボールの試験が行われていた。教室の小窓から中学の数学、心理学の授業などを見学した。心理学の授業では教室でビデオを視聴していた。理科室と同階にあったコンピュータ室も見学した。アップル社のパソコンが 40 台程設置されており、芸術室には壺などの実際に触れられる資料があり、またその奥には生徒の休憩室があった。実際に教室の中に入って見学したのは、篆刻を彫る授業であった。手本の参考書を見ながら生徒は作品を制作していた。校内見学が終わったあと、中国教職員との間で質疑応答が行われ、通学方法はどのようなものか、先生の評価はどのようにして決めているのか、入試において重視する要素は何かなどの質問が日本側から出た。それらの質問に答え、補足して説明する形で、中国教職員から、同校は「規律ある教育」を重要視し、教育のレベルが高い北京市のなかでもこの学校は特別な存在で、他の学校の模範となることを求められていると説明が加えられた。また国際的視野を育むために、語学以外の授業を通じて言語能力を育むことに力を入れており、海外への修学旅行や外国の学者・リーダーを招いて交流するなどしている。語学は道具なので、国際舞台で活躍するよう模擬国連やボランティア活動も行っていることが説明された。**（佐藤尚美）**

《参加者の感想》

井川裕之・・・・・・・・「北京でトップクラスの学校」ということで、それを見学できたことで、教育部での話がどのように具現化されているのかを感じることができました。力を入れている施設が、体育施設においては「競泳用プール」「体育館」「舞踊室」であり、施設の面からは学習効果に影響を与えるほどの機能の差はなく、日本の一般的な学校とも、規模を除いては大きな差はないと思いました。しかし、学校の中に博物館のような部屋を設けていることは、歴史を学ばせる上で有用であり、日本でも取り入れることができたら意味のあることだと考えます。

熊谷久恵・・・・・・・・「教育の質」を高めるために、様々な工夫がなされた学校であった。生徒の資質を伸ばすために必修科目の他にも専門的な授業を行っていた。国際的な視野を育むために外国語のスキルを詰め込むだけでなく、外国の著名人による授業やボランティア活動、模擬国連、生徒の派遣事業等を行っ

ていることが心に残った。外国語を使う機会が増え、目的が明確になれば、生徒の外国語学習への意欲は自然に高まる。実験中学の訪問で、私の勤務する小学校においても「使う目的を明確にした外国語活動」を推進していきたいと考えるに至った。

佐々木雅一・・・・・・・・北京のエリート学生が、模擬国連や国際ボランティアを授業として積極的に取り組んでいることが確認できた。また、日本との交流も望んでいることを知り、帰国後 ESD 関係者とともに、日本と中国との ESD をテーマにした交流プログラムなどの可能性を探りたい。

佐藤尚美・・・・・・・・義務教育の改革の実践を行う学校であるため、非常に高レベルの内容を目指していると感じられた。数学・物理学は大学教授などの外部講師による授業を行う、体育の授業の充実・体育施設の充実などが印象的だった。語学の授業にも力を入れており、海外との交流も盛んである。ただしあくまでも語学は道具であり、国際的な場面でいかに活躍するかに重点をおいているという説明は、内向きといわれる日本とは対照的である。

達見かおる・・・・・・・・北京市最初のモデル高級中学ということもあり、一言で言えば超エリート校という雰囲気であった。施設・設備も充実し、生徒も勉強だけでなく、舞踊等も舞台経験があり、プロ予備軍のようであった。今の中国が目指す教育が形になっているかのような学校であった。大学卒業後に何を目指すのか聞いてみたかった。

平松高志・・・・・・・・500 人の生徒が2年前に日本を訪問していたり、国際クラスを設置して毎年 70～80 人が海外の大学に留学することを目的にしたりするなど、国際交流を重視した学校であるという第一印象をもった。日本の早稲田大学などとも提携、中国・北京を代表するトップ校である様子が伺われた。しかし、その活動は日本の一部の進学校のように単に「大学合格率」を競う狭い目標ではなく、本当に国際社会にはばたく人材の育成をしているように感じた。それは、スポーツ施設や芸術・文化施設の整備や授業に力を入れ、実際に優秀な選手や芸術家を輩出していることにも表れていた。日本でもこういった学校に進学実績だけにとらわれずに幅広い力の育成に学校が取り組める雰囲気がやはり重要だと感じた。

三田暢夫・・・・・・・・中国内でも実験的な意味合いをもつ学校であるため、オリンピック候補者が存籍したり施設が非常に充実していたりと、これぞ中国の最先端であるということをまざまざと見せつけられる訪問であった。芸術分野に於いても非常に優れた取組が行われており、学力をどのようにとらえ、どのような力を付けることが中国として望んでいることなのかを知ることができた。

渡邊荘太郎・・・・・・・・もっとも感動した場面は、突然の来訪者に対して物怖じせず、行動に移せることである。授業中に日本人が複数教室に入ってくる環境で学習を続けることができる集中力。人前でダンスによって表現できる行動力。ダンスを芸術の域まで高めることができる能力。個々人の潜在的な能力を充分に引き出す指導があってこそできるものと考える。いずれにしても国際人として、活躍することができる素養があると感じた。中国は、国土の広さ、たくさんの民族、言語を兼ね添える多様な国である。今後の発展を視野に入れていくと今後、益々融和が必要になってくるであろうし、教育の指針が大切なものになってくると感じた。教育システムの再構築について興味深かった。

友好の握手を交わす。左が校長の葵暁東氏

呼和浩特市新城区勝利街小学

［呼和浩特市］　5 月 30 日

学校長：王淑珍（WANG Shuzhen）
設立年：2007 年
児童数：約 1,510 名
教員数：約 97 名

文化をモチーフにキャンパスづくりをしてきた学校で、「体育・芸術」の授業に重点を置き、発展させていくことを教育理念としている。36 個の標準教室の他に、音楽室や舞踏室、美術教室などの専門特別室や特別活動室及び球技練習設備などがあり、児童に良質な教育、全面的な発展と育成を特徴とした特色ある教育基盤と空間を提供している。

訪問団が到着すると両側に女子児童の立つレッドカーペットで出迎えを受けた。次のゾーンでは、児童が[京劇のお面づくり]、[書道]、[絵画]、[切り紙]などの作品制作を行っていた。その児童の様子を見ながら進んでいくと、児童からお面や絵画、造花などを手渡され、温かく迎えていただいた。

校舎に入り、音楽室で行われていた音楽の授業を見学した。30 数名の児童が箱形の椅子に腰かけ、ひとりの先生の指導の下、ピアニカの練習をしていた。訪問団が入ると、「幸せなら手を叩こう」の歌を歌い、訪問団メンバーと手を合わせながら歌ってくれた。児童は、姿勢がよく、教師の指示に合わせ、てきぱきと行動していた。音楽教室には机はなく、児童用に箱形の椅子が用意されていた。

見学の途中で校長の王淑珍（WANG Shuzhen）氏から、「本校では、先生たちが、自分でできるものをできる限りにやってあげたいという気持ちで教育をしている。」と説明され、先生方の教育に対する熱意が訪問団に伝わった。また校舎には児童の絵や作品が展示されており、芸術に力を入れている様子がうかがえた。校舎の見学では、舞踏室や美術教室、自然の様子を学ぶ部屋や卓球台が置かれた部屋などを見学することができた。自然の様子を学ぶ部屋では本物の鳥のはく製などが展示されており、本物に触れさせようという意識が感じられた。

校長の王淑珍氏から学校の特色についての説明を受けたあと、訪問団はそれぞれに子どもたちから蒙古族のパオの模型のプレゼントを贈呈された。

校庭では歓迎のレセプションが準備されており、児童たちに手を引かれ、一緒にステージで赤とんぼを合唱した。また児童たちと教員によるダンス、ファッションショー、武術などが披露された。**（清水由美子）**

《参加者の感想》

河辺哲也・・・・・・・・学級の前に、「衛生」「マナー」「体育」等の項目があり、星（★）印で評価されたシートが掲示されていた。成果主義の一端が見えた。音楽の授業で「幸せなら手をたたこう」という歌を歌い、訪問団と一緒に手をたたいたり、ピアニカを演奏したり、訪問する私たちの心を和ませる先生方の「きめ細かな指導」に感心した。子どもたちは、教師の話を良く聞き、一生懸命に取り組んでいた。まじめである。また、「話を聞く」等の規律が徹底している。1,500 人もの児童数の中で、どのような生活指導をされているのか、直接話を聞いてみたいと感じるほどだった。最後に、ダンス等の発表があった。演技もさることながら、3 人の児童の「司会」をみて、「日本の子どもたちは、このような力があるだろうか」と考えてしまうぐらい、見事であった。

久保田勝己・・・・・・・・学校の方針として、体育・芸術に力を入れており、その意気込みがよく分かりました。我々訪問団の歓迎セレモニーは特別に練習をしたものではなく、他に予定されていた出し物を披露したそうですが、すばらしいものでした。特色ある学校づくりからの観点から、体育・芸術に力を入れた学校経営を行った結果を見たようで、参考となりました。

熊谷久恵・・・・・・・・全校の視察を通して、中国の学校は、独自性をもった校風を大切にしていると感じた。この学校については、恵まれた環境を生かし、体育・芸術面にも力を入れている点に惹き付けられた。環境的には、勤務校に一番近い学校であるが、施設設備は、とうてい及ばないと思った。広い敷地を生かし、緑化が計画的に進められ、子どもたちが自由にのびのびと活動するスペースが十分に確保されている点に感心した。

紺野知子・・・・・・・・「文化」を主題に教育理念をつくったとのことであったが、校舎内の掲示物や教室の環境、子どもたちのステージ発表（歌・ダンス・武術等）から、それがよく伝わってきた。「京劇の面」「武術」等は伝統芸能であるが、授業でどのように扱い継

承活動につなげているのか、興味深かった。また、子どもたちの生き生きとしたステージ発表は大変すばらしく、発表の際の姿勢を我が校の子どもたちにも真似させたいと思った。

東城徳幸・・・・・・・・「資質教育」の理念にもとづき、芸術・体育に力を入れている小学校とのことである。見せていただいた児童の技能や作品の完成度からは、高いレベルでの目標設定と普段の指導の充実ぶりが窺われた。また、切り絵や京劇などの内容からは、民族的なアイデンティティの確立が芸術教育の柱の一つであることも窺われた。これらは保護者の理解・協力のもとに行われているとの校長先生の説明であった。羨ましく思うとともに、受験熱の高い中国社会で、そのような保護者との関係をどのように形成しているのかを知りたく思った。

平松高志・・・・・・・・校長先生のお話では、この学校は体育と芸術を中心にして特色ある学校づくりを行っていると聞いた。見せていただいた授業も京劇のお面づくりや書道、踊りや合唱のステージ発表だった。ステージ発表はどの学年においてもとても高い完成度で、学校が目標としていることが実現しつつあると感じた。

あまり質問の時間がなく、学校にどの程度特色ある教育をするための裁量権があるのかと、地域はこの学校の特色をどの程度歓迎しているのか聞けなかったことが残念だった。

益崎慎司・・・・・・・・呼和浩特で最初の訪問校でしたが、まずはその歓迎に圧倒されました。バスを降りてレッドカーペットの上を校舎まで移動しましたが、その際子ども達が自分の作品を差し出してプレゼントしてくれました。このようなプレゼントに最初は戸惑いましたが、その後いたるところでプレゼントをいただくこととなりました。中国の人たちが歓迎の意を表す場合の手段としてプレゼントをするのだということが次第に理解できました。校長先生から、この数年「文化」をキーワードとして学校づくりを行ってきたという話がありました。校長の強いリーダーシップが感じられました。その場にいた児童の代表に「将来何になりたいか？」という質問をしてみました。女の子は教師、男の子は国会議員と即答してくれました。一部の児童ではあったものの、子どもたちが目的意識を持っているという印象を持ちました。

レッドカーペットで迎え入れられた

校長の王淑珍氏と記念品交換をする副団長の久保田勝己氏

音楽の授業見学

呼和浩特市回民区第十六中学

[呼和浩特市]　5 月 31 日

学校長：李義平（LI Yiping）
設立年：1975 年
児童数：約 2,400 名

規範的・科学的・効果的な学校管理体系を持ち、2002 年には内蒙古自治区普通高級中学管理先進学校に選ばれている。生徒の関心や会話力を高めるための英語学習に力を入れ外国との交流も行なっている。先進的な教育理念をもつ優秀な教員が多く、学校の急速な発展に寄与している。

訪問団が学校に到着すると、すぐに玄関前で代表生徒による武術実演、ダンスなどが披露された。雨中の熱演であった。その後、記念写真を撮影した。この写真は帰校時に額装され訪問団一人ひとりに贈られた。

校舎の中では3人の代表生徒がそれぞれ中国語、日本語、英語で学校の説明を行った。3人は訪問団に同行して校内施設を案内してまわり、団員と日本語や英語でコミュニケーションをとったりなどしていた。

第十六中学は、国際交流に非常に熱心な学校であり、壁面には海外との交流事例を表したパネルが飾られていた。

歓迎交流会では、歓迎の気持を表す白い布のハダがそれぞれの生徒から団員一人ひとりの首に掛けられた。校長の李義平（LI Yiping）氏から歓迎のあいさつの後、記念品の交換が行われた。加えて、生徒達が自分たちで用意した贈り物の品々も代表団一人ひとりに贈られた。歓迎のパフォーマンスでは代表生徒が蒙古伝統文化の馬頭琴の演奏とホーミーを披露した。全校生徒からは中国語で校歌が歌われ、合唱部による「星」（日本名「昂」）が日本語で歌われた。

それから、これまでの日本との交流の様子をまとめた日本語字幕入りのビデオを観た。その後、訪問団を代表して副団長の総社市教育委員会学校教育課主幹の東長典氏から返礼のあいさつがなされ、会は終了した。

授業参観では、美術活動室において書道、篆刻、切り紙の学習を見学した。生徒が訪問団員と一緒に切り紙をしたり、書道を一緒に行うなどして積極的な交流が図られていた。 この学校ではこの交流の様子を学校のホームページに即日公開するなど国際交流に非常に熱心な様子であった。**（熊谷久恵）**

呼和浩特市回民区第十六中学の HP
http://www.hs16zhong.cn/

《参加者の感想》

井川裕之・・・・・・・・生徒が武術や舞踊を演じて、迎えてくれました。さらに伝統的な歌唱法の「ホーミー」の歌唱、馬頭琴の演奏なども見せてくれました。いずれも、生徒の表現力の素晴らしさに感銘を受けました。美術作品のレベルも高く、週に3時限は芸術の時間を確保していることからも、芸術への力の入れ方を感じました。

日本だけでなく、アメリカ、シンガポール、スウェーデン、マレーシアとも交流を持っている学校であることが分かり、これだけ多くの交流を持っていることに、日本の学校のグローバル化の必要性と危機感を認識しました。授業を教室内にて見学できたことで、教育実践と生徒の状態を知ることができました。英語や日本語のできる生徒が付き添ってくれたことで、他の生徒ともコミュニケーションを図ることができました。

表向きではない、生徒の生の声をきくことができたことが一番の収穫でした。子どもらしい表情、子どもらしい素直な声がそこにはあり、それを見て安心や共感を覚えるとともに、日本の生徒との交流の可能性も感じることができました。

河辺哲也・・・・・・・・歓迎交流会で先ず驚いたことは、司会である。「中国語」「英語」「日本語」を話す3人の司会者が、台本も見ずに、会を進行していく。特に、英語の発音がすばらしい。

校長の李義平氏のあいさつ

学校のスケールの大きさと生徒たちの規律の正しさが訪問団に強い印象を与えた。

授業参観では、美術や書道等の授業を見た。授業の説明を、子どもたちが「英語」でやってくれた。発音はきれいであり、流暢に話すコミュニケーション能力に、自分自身の英語力のなさを痛感した。また、同じ年代の美祢市の中学生が、この学校の子どもたちと、英語でコミュニケーションできるか、と考えさせられた。

佐々木雅一・・・・・・・・生徒たち自らが訪問プログラムをオーガナイズし、自分たちのスキルを積極的にアピールする姿に日中の生徒の違いを実感した。また、生徒たちは自分たちを知ってほしい、日本のことを教えてほしいという姿勢が強く、本校の生徒とコミュニケーション力の違いも感じた。

清水由美子・・・・・・・・中1の英語の授業を少し見学できたが、プロジェクターを使い、スクリーンに絵を映し出して行われていた。64 人が一つの教室に学んでおり、中国の規模の大きさを感じた。それと同時に、教師がこれだけの人数の生徒を一度に教え、一人ひとりの学習状況や習得状況をどのように把握されているのか興味をもった。

昼食会の際、十六中学の書記である梁吉星氏と同席になったため、いろいろと質問することができた。今回の歓迎セレモニーは生徒が考えたもので、学校は武術と舞踊のみ準備し、それ以外を生徒が考え、準備したとのことであった。

東城徳幸・・・・・・・・英語教育に力を入れていることは事前に説明を受けていたが、生徒が積極的に英語で話しかけてくる様子を目の当たりにして大変感銘を受けた。学校によれば、帰国子女や長期の留学経験者などは皆無だとのことである。授業と普段の勉強だけでこれまでのレベルに達するという事実に驚いた。また、歓迎のダンスや音楽などのパフォーマンスからは、民族的なアイデンティティが国際交流の核になるとの考えがあるのだろうと思われ、具体的な国際交流の準備を考える上で参考になった。

西嶋徹・・・・・・・・歓迎交流会では、蒙古で客をもてなすときに用いる哈达（Hada:マフラーのようなもの）を贈られ、その後、学生による馬頭琴の演奏やホーミーの披露などがあった。生で聴く馬頭琴の音色には勢いがあり、ホーミーの歌声には驚愕させられるばかりであった。同中は愛知県岡崎市と交流を実施しており、そのときの様子もビデオで紹介された。子どもたちの自信に満ちた瞳、真剣に物事に取り組む姿に心を打たれた。

馬場晴美・・・・・・・・第十六中学では、生徒の言語能力の高さが印象的であった。生徒自らが考案した、という歓迎会では中国語・英語・日本語でテンポよく進行し、感心した。英語を勉強して4年、という生徒がとても流暢な英語を話していたり、日本語は自分で勉強した、

という生徒が通訳をしていたり、学習意欲の高さが伺えた。また、記念撮影を額に入れてプレゼントしたり、訪問の様子が即日 HP にアップされたり、と学校側の対応の早さも勉強になり、大変参考になった。

平松高志・・・・・・・・案内をしてくれた中学生の英語が大変堪能であることや、別の中学生の日本語も上手であることに驚いた。特に英語については、小学校への英語導入が進む日本に先行して小学校3年生から学んでいるところが日本との大きな違いであり、中国での英語教育の成果が大いに気になった。また、日本の姉妹都市を結んでいる学校との交流の様子もビデオで上映され、国際交流への意欲を大変感じ、私たちの学校が希望すれば交流をしてくれる学校が中国にはたくさんあることがわかった。

三田暢夫・・・・・・・・内蒙古自治区にある中学で外国語教育がこれほどしっかりと位置づけられ、定着していることに非常に驚きを感じた。私たちに臆せず話しかけてくる態度やそのコミュニケーションスキルとしての英語の活用がどの生徒も行うことができることなど、非常に素晴らしい教育の成果を見受けることができたのは印象に残っている。

渡邊荘太郎・・・・・・・生徒が中心となって活動する場面を多く見ることができた。歓迎のセレモニーでの武芸、舞いなど中国や蒙古の文化継承がされていたと感じた。本学校から、国際理解教育に必要なものが三つあると思った。

第一に、自国や地域についてしっかりとした知識を持つこと。第二に、それを伝える外国語教育の大切さ。第三番は、おもてなしの心。この三つが必要であると感じた。この三要素は、自分の学校に持ち帰り、職員間で共通理解を図り、教師一丸となって取り組みたいと感じた。

呼和浩特市回民区 太平街小学

[呼和浩特市]　5 月 31 日

学校長：張秉煥（ZHANG Binghuan）
児童数：児童数は約 1,500 名。このほか、付属特殊教育学校（特別支援学校）が 2 クラスある。
教員数：約 70 名

南側に呼和浩特市第八中学、附属特殊教育学校がある。校内のいたるところに、書や絵がある。「教員と児童と学校はともに発展し、総合的に特色を創出する」が教育理念。

太平街小学は特別支援学校を併設している。訪問団一行は赤い旗を振る児童たちに迎え入れられた。

校門を入ってすぐの場所にある開いた本の形の碑は、毎朝、学校に入った時に中国5000年の文化を思い出させるためにあるという。校舎の壁にある「読」「写」の文字は、それぞれ、「読」は幼い時によく本を読むことを表し、「写」は未来を勉強しながらかいていくことを表していて、これからの児童をどう育てるかを表現しているという。校内には、本を自由に読めるスペースがあるほか、天井や柱、壁に唐詩が書かれていたり、巨大な本の形をした本入れが置かれていたりと、校内の空間を有効活用している。図書室には5万冊の本のデータと繋がれていたパソコンが 56 台設置されており、児童が積極的に本を読むことを目的としている。この台数は1クラス全員で授業に使用することも構想に入れられている。踊り場には中国の教育家の顔とことば、壁には教師の偉人の写真などが掲げてある。

授業見学では、書道教室で訪問団のひとりである筑波大学附属駒場高等学校教諭の東城徳幸氏が児童に書道を披露し、字の説明を行った。また、3年生の授業では、両手振り付きで元気に歌っている音楽の授業を教室に入って見学したり、3年生の英語も見学したりした。授業は教科書の絵が前方に映し出されており、どの児童も集中して取り組み、積極的に挙手する姿も間近で見られた。

太平街小学に併設される附属特殊学校では、訪問団は、マシンやトランポリンなどを使用した体育の授

業を見学した。生活面では、児童・生徒たちは週1回、自分たちで食事を作ってみんなで食べる授業がある。数人の訪問員が実際に手作り餃子を食べさせてもらった。芸術面では折り紙をのり付する作業を行っていた。棒を使用して細部まで貼り付けていた。キーボード演奏に歌、LEGO、刺しゅう(クロスステッチ)、パズル、ぬり絵など様々な活動の様子が見られた。

附属特殊教育学校を見学したのち、校長の張秉煥(ZHANG Binghuan) 氏より特殊教育についての説明があった。この特殊教育学校には7～20 歳までの児童が在学しており、通学は家族の送迎によるという。障害をもった生徒たちの育成と卒業後の安定した進路と生活の保持が課題であると述べられた。

その後、訪問団は歓迎に対する謝辞に続き、今後も日中の持続的な交流を図っていきたいと述べ、記念品の交換をした。**(紺野知子)**

《参加者の感想》

井戸しのぶ・・・・・・・・きれいな校舎外観だった。パソコンの電子データを使って読書をするという専用の閲覧室があるのに驚いた。壁に貼られた偉人のパネルや学習のポイントをまとめた手書きの黒板など、児童が普段目にしやすい所にさりげなく掲示することで、自然な形で児童の興味や関心、知識・理解を促そうとしていた。

河辺哲也・・・・・・・・印象に残ったことの一つは、2階の写真展示のコーナーであった。そこには、中国だけでなく、ベートーベンやモーツアルトなど世界の著名人の写真と功績が書かれていた。特に、「魯迅」の写真があったので、「この作家の『故郷』という作品を、日本の中学生全員が読んでいます。すばらしい作品です。」と伝えると、関係者全員が驚き、またとても喜んだ顔がわすれられない。

他の学校の視察と大きく異なった点は、「特別支援教育」を見ることができたことである。「特別支援教育」をどのように考えるか、ということは、「国の教育の考え方の原点」が表れると思う。

「特別支援教育が遅れている」と教育庁関係者が話されていたが、その部分を公開し、授業を見ることができたということは、とても大きな出来事である。

久保田勝己・・・・・・・・中国の特別支援教育の一端を垣間見ることができ参考となりました。現時点では、日本の特別支援教育が進んでいると感じましたが、中国の経済等に関する急成長ぶりを見ると、今後の特別支援教育の取組については注目をし、また他方では、日本の特別支援教育の取組も中国へ紹介していきたいと思いました。

達見かおる・・・・・・・・今回訪問した中で直接「就職」という単語を聞いたのは、実はこの学校だけであった。週に1回昼食を作ってみんなで食べる、という時間が訪問した日にあたり、羊肉の餃子を作っており、試食させてもらった。料理人になった卒業生もいるらしく、大事な学習のひとつであるようだ。

東長典・・・・・・・特別支援学校では、知的障がいのある子どもが学んでおり、体育や労働技能(調理実習)、音楽、美術(図工)の授業の様子を参観できた。日本語訳された時間割表もいただいたが、労働技能の時間を重視している様子がうかがえる。読書を中心に据えて、学問により中国 5,000 年の文化を継承し未来を切り開くという教育理念が至る所に可視化されており、このようにすれば、教師や子ども、学校を訪れる保護者・地域の人々との間でベクトル合わせをしやすいと感じた。

益﨑慎司・・・・・・・・学校づくりにコンセプトが感じられました。校舎前のモニュメント、校舎の外を取り巻くように造られた回廊、また校舎内にある吹き抜けを囲む廊下の壁に掛けられた掲示物、それらは中国の歴史を子どもたちに伝えるものであり、国内外の偉人の業績をたたえるものでした。これらを通して、子どもたちに対して、自国の歴史と誇り、さらには国際社会にも目を向けさせたいという意図が感じられました。

特殊教育の面においては、身の回りのことができる児童だけが学んでいるということでした。家の中に閉じこもったままの障がいのある子どももいることや、重度の障がいのある子どもたちの受け皿が未整備であることなど、この分野での今後の制度や施設の充実が待たれるとともに、家庭や地域社会の意識変革も必要となってくると感じました。

校長の張秉煥氏からのあいさつ

呼和浩特市新城区山水小学

[呼和浩特市]　6 月 1 日

学校長：王雅萍（WANG Yaping）
設立年：2008 年
児童数：約 1,000 名

全日制の小学校で、敷地は 26,680 ㎡、校内は広く、全天候型のグラウンド、バスケットボール場などの設備が整っている。「教員と児童がともに成長する」ことを教育方針とし、児童と教員の健康を重視している。

新城区山水小学校は、校長の王雅萍（WANG Yaping）氏が訪問団を案内し、校内を回ってくれた。同校の日本語ができる教員も同伴し、校長の説明を詳しく訪問団に説明してくれた。

まずは学校の施設の見学を行った。この学校はもともと農村で何もなかったところへ建設された。児童は農村からの通学生が多く、農村の教育向上に大いに貢献している。りんごや杏、桃などの果樹も植えてある植物園は先生たちが自ら草木を植えて作り上げた自慢の場所であるという。全天候型の設備も整っているが、児童数が多いため、外にも卓球台が設置されている。また毎日決まった時間に目の体操、耳の体操の時間があり、放送で一斉に行う。

この日、訪問団は全校一斉の体育を見学した。校長から全校が一斉で集まって体を動かすようにしていると説明される。体を動かすことは精神的にも体力的にも重要なことであると考えられており、グランドの中心部で体育教師が指揮をして一斉に体操をした後、クラスごとに分かれて好きな種目をおこなった。種目は縄跳び、長縄、凧揚げ、インラインスケート、サッカーなどであった。校長の許可を得て、訪問団員たちも一緒に児童といくつかの種目に参加した。

校内では１年生から６年生までの児童の宿題が展示されていた。宿題は児童が自分でテーマを決めて新聞や日記、詩集などを作っていた。訪問団は新聞やノートなどを実際に手にとってじっくり見ることができた。

校長との懇談会では、学校の説明と歓迎の言葉があった。以前日本に行って、近代的な街づくりが印象に残ったことや、木の植え方を学んだこと、教育の公平に努力しているが、まだ足りない面があることなどを話された。副団長の久保田氏から、休日の授業公開に対するお礼を述べた。次に質疑応答が行われ、最後に記念写真撮影し、学校を出発した。**（平松高志）**

《参加者の感想》

佐藤尚美・・・・・・・・今回訪問した学校の中で、日本の学校に一番近いと感じられた学校である。しかし、全校児童による体操には驚かされた。だらしない児童はおらず、みな一生懸命取り組んでいた。児童たちは我々に対し物おじせず接してくれ、また初めて見る日本人に興味津々な様子であった。

学校施設の向上にも積極的に取り組んでおり、校長先生の人脈や保護者の協力によりさまざまな援助を得ているとのことであった。

清水由美子・・・・・・・・他の学校のように、山水小学では特別な出迎えなどはなかったが、子どもたちの日頃の様子を見ることができる良い機会となった。中国政府の指導の下、地方でも義務教育の普及に向けた努力がなされていることをしっかりと感じることができた。

東長典・・・・・・・・元々農村で、何もなかった場所に設置された小学校であり、外国人訪問団の受入れも初めてという小学校。子どもたちの私たちに対する興味津々のまなざしや素朴な表情・反応が可愛らしい。

施設の広さ、植物園に対する思い入れの強さ、教室・グランド間の移動時の児童の規律正しさが特に印象的だった。

授業では、やはり天井吊り下げ式プロジェクタによるスクリーン映像を使用。体育活動を中心に子どもの知徳体を伸ばそうとする先生方の意気込み、農村部の子どもに対する教育向上の使命を果たすという自負や気概が感じられ、参考になった。

平松高志・・・・・・・・かなり新しい学校で、設備面も充実しているように感じた。比較的授業や児童の活動を長く見学でき、一番心に残った学校だった。農村部の児童が多い小学校だと紹介を受けた。みんな私たちにあいさつしたり、話しかけてきて、写真を一緒に撮ったりするなど、とても人懐っこかった。この学校でも全校で一斉に体育をする時間があり、中国教育部の説明にあった「体づくり」の具体化が図られているように感じた。

今回の学校訪問では私の担当教科「技術」の授業見学はなかったが、ここでは情報教育を担当する先生がちょうど記録映像撮影のために同行していたため、情報教育の授業の様子や使用する機器やソフトについての情報交換ができ、大変有意義だった。

益﨑慎司・・・・・・・・この日、中国では子どもの日で、本来であれば学校は休みであるにもかかわらず、我々のためにたちや先生方が訪問を歓迎していただいたことを大変ありがたく思いました。全校体育の時間のいきいきとした児童たちの姿と、各階段の踊り場ごとに設置してあった防災教育のパネルがとても印象に残りました。また会議室では、児童たちが夏休みなどの長期休業期間中に取り組んだ宿題を公開していただきました。1人の先生に宿題の提出状況をたずねてみたところ、休業明けに提出できない児童はほとんどいないということでした。

私の学校では宿題を提出できない児童が多く、休業明けは居残りをさせて終わらせるのに苦労しているという旨の話をしたら、次のような答えが返ってきました。山水小学校でも以前はそういう児童が多かったが、宿題の出し方を、全員必ず取り組ませる課題を減らして、いくつかの中からやりたいことを選択させるようにしたり、児童がより興味を持つようなやり方に変えたりしたことで状況が変わったということでした。この国では大きな変革を、足並みをそろえてやってのけることができるのだと感じました。ほんの数年間で、校内に植物園を造ったという校長のリーダーシップには大変敬服しました。

和久田恭生・・・・・・・・2008 年に開校ということで、僅か4年しか経っていない。休み時間に教室での目の体操と、校庭での全校体操が特に印象に残った。全校体操の後にクラス毎に好きな種目で体を動かしている。多くのクラスが長縄跳びをしていたが、児童同志の団結力や協調性を育むことができていると感じた。さらに、心と体を鍛えることにも繋がっていると思う。

教職員が自ら植林してつくり上げた校庭

訪問団員の質問に答える校長の王雅萍氏（左）

1～6 年の生徒の宿題（自由課題）の見学

児童と一緒に習字の体験授業をする

3 .学校访问

北京师范大学附属实验中学	5 月 28 日
新城区胜利街小学	5 月 30 日
呼和浩特市回民区第十六中学	5 月 31 日
呼和浩特市太平街小学	5 月 31 日
呼和浩特市新城区山水小学	6 月 1 日

北京师范大学附属实验中学

[北京市] 5 月 28 日

校长：蔡晓东（CAI Xiaodong）
设立年份：1927 年创立
学生人数：约 3,000 人 / 教员人数：约 300 人

公立中学（初高中）。在世界上也享有很高的评价。校名中的“实验”意指实践义务教育改革的学校。对其他公立学校起到模范先锋作用，也致力于体育教育。向国际比赛输送多位游泳选手。

北京师范大学附属实验中学是访问团首个访问的中国学校，首先听取了校长蔡晓东（CAI Xiaodong）先生对学校的特色的说明。他指出，由于是“实验”中学，所以必须进行各种教育方法改革实践。为了提高儿童的实践能力和素质，除必修科目以外，更进行各种专攻、专业、活动的课程。具体来说，如进行体育课程等的目的是，为了让学生将来拥有可持续的能力和发展。进行学科的教育时，数学和物理学等科目有的可能由社会人士和大学教授负责讲课。此外为培养具有国际视野的人才，也会安排学生升读海外学校。

其后进行校内参观。体育馆负一层设有温水泳池。这是召开奥运会时建造的。学生们参加各项游泳比赛。体育馆 2 楼刚好在进行排球考试。从教室的小窗口参观初中的数学、心理学的上课情况。心理学的课程在教室内使用视听器材。参观了和理科室同一层的计算机室。设有 40 台左右的苹果电脑，艺术室摆放了罐壶等可以实际接触到的道具，此外里头还有学生休息室。实际进入教室内进行参观的是篆刻的雕刻课程。学生们看着手上的参考书制作作品。校内参观结束后，进入向中国教职员进行提问的环节，日本方面提出的问题包括：学生上学的方式、老师对学生进行评估的标准、入学考试重视什么因素等。中国教职员对上述问题进行回答，并以补充说明的方式，指出该校重视“有规律的教育”，在教育水平居高的北京市，该校作为一个特殊存在，必须对其他学校起到模范先锋作用。此外，为了培养国际视野，致力通过语言以外的课程培养语言能力，如进行海外修学旅行或邀请海外学者及领导人展开交流。为了使用语言这一道具活跃于国际舞台，开展模拟联合国和志愿者等活动。（佐藤尚美）

《参加者的感想》

井川裕之·····由于是“北京顶级水平的学校”，对其进行参观后，可以感受到教育部的说明内容是如何付诸实现的。设施很给力，体育设施方面有“赛级泳池”、“体育馆”、“舞蹈室”，从设施性能来看，不会对学习效果造成差异影响，和日本的普通学校相比，除规模以外并无太大区别。但是在校内设置类似博物馆的建筑，将对学习历史有所裨益，我觉得日本可以借鉴这个做法。

熊谷久惠·····这是一个努力提高“教育质量”的学校。为了提高学生的素质，除必修科目以外还提供各种专业课程。为了培养国际视野，并不只侧重于学习外语技能，如外国著名人物担任讲师、进行志愿者活动、模拟联合国、学生派遣等活动都留下了很深的印象。增加了使用外语的机会，一旦目的明确，学生们学习外语的积极性自然得到提高。通过对实验中学的访问，让我产生了在自身工作的小学推行“目的明确的外语活动”这一想法。

佐佐木雅一·····可以确定的是，北京的精英学生正在积极开展模拟联合国和国际志愿者活动、将此作为课程的一部分。此外，了解到他们希望与日本进行交流的意愿，希望回国后可以与 ESD 相关人士一起，探讨中日两国以 ESD 为主题的交流计划等的可能性。

佐藤尚美·····由于是义务教育改革的实践学校，因此以教学内容的目标水平非常高。印象最深的是数学和物理学是由大学教授等外部讲师任课、以及体育课程和体育设施的完善等。也致力于外语课程，与海外的交流频繁。但同时该校也指出，语言只是道具，

将教学的重点放在如何活跃于国际舞台，而日本在这方面较为保守，形成鲜明对比。

达见熏·····是北京首批模范高级中学，用一句话来说就是有一种超级英才学校的氛围。设施和设备完善，学生除了学习以外，还有舞蹈等舞台经验，俨然是拥有专业水平的生力军。这个学校简直具备是中国所追求的教育形态的集大成者。希望能了解学生们大学毕业后的志愿。

平松高志·····据说该校两年前有 500 名学生访日，并设有国际班级、每年有 70～80 名学生赴海外留学等等，这个学校给予我的第一印象是一所重视国际交流的学校。也和日本早稻田大学等展开合作，在此可以领略到代表中国北京的顶级学校的姿态。但是，那些活动并非像日本一部分只关心升学率的学校一样，只追求“大学升学率”这一狭隘目标，而是努力培养能在国际社会发光发热的人才。此外该校致力于体育设施和艺术文化设施的整备和教学，并实际培养了很多优秀的选手和艺术家，也成为这一目标的有力佐证。我认为日本也应该向这样的学校学习，不能光注重升学率，更应致力于培养学生各方面的能力，这种氛围很重要。

三田畅夫·····这是中国国内具有实验性质的学校，所以在籍学生包括奥运会候选选手，且设施非常完善，访问期间，能感受到中国最先进水平的见闻历历在目。在艺术领域方面的工作也非常出色，由此可以了解到中国如何看待学力（学习成绩和水平）、以及希望让学生掌握怎样的能力。

渡邊荘太郎·····最让人感动的场面，是学生们面对突如其来的来访者并不感到胆怯意外，仍然按部就班地学习。上课期间多位日本人进入教室，在此环境中仍然可以继续学习的集中力。在众人面前自如地进行舞蹈表演的行动力。将舞蹈提升到艺术领域的能力。我认为这归功于学校的指导充分引发了每位学生的潜在能力。总而言之，已经具备了作为国际人才活跃发展的素养能力。中国国土辽阔、兼有多个民族和多种语言。为实现今后的发展，民族团结变得越发重要，教育方针也起到举足轻重的作用。我对教育体系的重新构筑颇感兴趣。

呼和浩特市新城区胜利街小学

［呼和浩特市］ 5 月 30 日

校长：王淑珍（WANG Shuzhen）
设立年份：2007 年
学生人数：约 1,510 人
教员人数：约 97 人

该校的校园建设以文化为主题，其教育理念是把“体育和艺术”作为教学重点并发扬光大。除 36 个标准教室以外，更设有音乐室和舞蹈室、美术室等专门的特殊教室和特别活动室及球类练习设备等，为学生提供良好的教育使其获得全面的发展和成长，并以此为特征打造具有特色的教育平台和空间。

访问团到达后，受到由女学生列队的红地毯欢迎。接下来则看到学生进行“京剧面具”、“书法”、“绘画”、“剪纸”等创作的场景。我们在前进中参观学生的创作情况，而学生们也把自己做好的面具和绘画、纸花等交到我们手上，让人倍感温馨。

进入校舍后，参观了在音乐室进行的音乐教学情况。30 多名儿童坐在箱型的椅子上，在一名老师的指导下进行口风琴练习。访问团进入教室后，即唱起《如果幸福的话你就拍拍手》，和访问团成员一起边拍手边唱歌。学生姿势端正、按照老师的指示灵巧利落地演奏。音乐教室里边没有桌子，为学生们准备了箱型的椅子。

参观期间，校长王淑珍（WANG Shuzhen）女士介绍道：“在教育学生的时候，本校的老师们都克尽所能把全副精力灌注到学生身上，向访问团表达了老师们的教育热忱。此外，校舍内也展示了学生的绘画及作品，表现出该校对艺术教育的重视。在参观校舍时，我们看到了舞蹈室和美术教室、学习体验自然的教室、以及设有乒乓球桌的教室等。学习体验自然的教室内，展示了真实的鸟类标本等，让人犹如身临其境。

校长王淑珍女士对学校特色进行说明，然后访问团分别收到了学生们赠送的蒙古包模型礼物。

操场上也准备了欢迎仪式，学生们拉着手一起在舞台上合唱红蜻蜓。此外学生们和教员一起展示了舞蹈、时装表演、武术等。**（清水由美子）**

《参加者的感想》

河边哲也·····班级教室的前方设有“卫生”、“礼仪”、“体育”等项目的评分表，通过星（★）号打分。对于成果主义的应用从中可见一斑。音乐课唱起了《如果幸福的话你就拍拍手》这首歌，和访问团一起拍着手、演奏口风琴，使我们倍感温馨，老师们的“细致周到的指导”让我们很感动。学生们专心听讲，努力学习。十分认真。此外，“听话守纪”等规条也得以贯彻。让人不禁想直接和学生交流，了解校方如何对 1,500 多名学生进行生活指导。最后观看了舞蹈等的表演。虽然表演结束了，但是看着 3 位学生“司仪”的出色表现，让我不禁思考“日本的孩子们是否具备这种能力呢?”

久保田勝己·····学校方针致力于体育和艺术。据说访问团的欢迎仪式并非经过特别排练，原本是预定作为其他用途的表演节目，真的很精彩。从打造有特色的学校这一角度出发，让我们了解到注重体育和艺术的学校经营模式的成果，很有参考价值。

熊谷久惠·····通过对全校进行视察，感受到中国的学校很重视培养自身独有的校风。这个学校充分利用了得天独厚的环境，注重体育和艺术，让人留下深刻印象。从环境来看，虽然是最接近工作学校的学校，但感觉设施设备还是有所不足。该校充分利用宽阔的用地，有计划推进绿化措施，充分确保学生们自由茁壮成长的活动空间，这个做法让人钦佩。

绀野知子·····教育理念以“文化”为主题，从校舍内张贴的宣传画报、教室环境、学生们在舞台上的演出等方面，都可以深深体会到这一点。“京剧面具”、“武术”等都是传统艺术，我对于如何将传统艺术融入教学中实现文化传承很感兴趣。此外，学生们充满生机的舞台演出也非常精彩，希望我校学生可以学习他们的表演态度。

东城德幸·····这所学校基于“素质教育”这一理念、注重艺术和体育。从展示的学生技能和作品的完成度来看，可以了解该校目标水平之高及日常指导之完善。此外，从剪纸和京剧等内容可以了解到确立民族特色是艺术教育的支柱之一。从校长的说明中了解到，这些活动是在监护人的理解及协助下进行的。在无比羡慕的同时，不禁想了解在应试热潮高涨的中国社会中，如何可以与监护人形成这种良性关系。

平松高志·····从校长的话中得知，这个学校是以艺术和教育为中心的特色学校。教学参观中也包括了京剧面具和书法、舞蹈和合唱的舞台表演。不管是哪个年级的舞台表演完成度都很高，让人觉得学校实现了自身的目标。

提问的时间不是很多，未能针对学校对于特色教育的自由裁量权、以及当地对于该校特色的欢迎程度进行提问，觉得很遗憾。

益崎慎司·····这是在呼和浩特首个访问的学校，首先被欢迎仪式所折服。下了巴士到校舍为止的路程都铺着红地毯，期间学生们把自己的作品作为礼物送到我们手上。最初我对于这些礼物感到很困惑，后来无论去到什么地方都收到礼物。这才逐渐理解中国的人们是通过送礼物的方式表达欢迎之情的。校长介绍到，近年来一直以“文化”为关键词进行学校建设。由此感受到校长强悍的领导能力。当时询问在场的学生代表：“将来想做什么？”。他们立即回答了问题，女学生表示希望成为老师、男学生表示希望成为国会议员。虽然只是其中的部分学生，也让人觉得学生们的目的意识明确。

呼和浩特市回民区第十六中学

[呼和浩特市] 5 月 31 日

校长：李义平（LI Yiping）
设立年份：1975 年
学生人数：约 2,400 名

维持规范、科学、有效的学校管理体系， 2002 年被评选为内蒙古自治区普通高级中学管理先进学校。为提高学生的兴趣和会话能力，重视英语学习并与外国展开交流。拥有诸多具备先进教学理念的教员，推动学校的迅速发展。

访问团刚到达学校后，就在校门前欣赏了代表学生所进行的武术表演和舞蹈等节目。演出冒雨进行，热情洋溢。其后拍摄了纪念照。离校时，该照片被装裱好赠送给每位访问团团员。

校舍内有 3 名学生代表分别用中日英三国语言进行学校说明。3 人陪同访问团参观校内设施，和团员通过日语和英语进行交流。

第十六中学热衷于国际交流，墙壁上挂着介绍海外交流情况的资料。

欢迎交流会期间，为表达欢迎之意，学生们将白色的哈达戴到每位团员的脖子上。校长李义平（LI Yiping）先生发表欢迎致辞后，进行纪念品交换。学生们还将自己准备的礼物赠送给每位代表团团员。在欢迎表演中，学生代表表演了蒙古传统文化的马头琴演奏和呼麦表演。全校师生使用中文齐唱校歌，合唱部使用日语演唱了《星》（日文名《昂》）。

接着观看至今为止与日本交流情况的总结录像（附带日语字幕）。其后，身为副团长的总社市教育委员会学校教育科主管东长典先生代表访问团进行感谢致辞后会议结束。

教学参观时，我们在美术活动室参观了书法、篆刻、剪纸的学习。学生们和访问团员一起进行剪纸、写书法，相互积极交流。该学校当天即把当时进行交流的情况发布到学校的主页上，显示出对国际交流的热忱。**（熊谷久惠）**

呼和浩特市回民区第十六中学主页
http://www.hs16zhong.cn/

《参加者的感想》

井川裕之·····学生进行武术和舞蹈表演欢迎我们。此外还观赏到传统歌唱方法“呼麦”表演、马头琴演奏等。每个演出都让我深深感受到学生们出色的表现力。美术作品的水准很高，且每周确保 3 个课时的艺术练习时间，这一做法也让人感受到该校对艺术的注重。

我们了解到，该校除日本以外，和美国、新加坡、瑞典、马来西亚等众多国家保持了交流，这一现状让我认识到日本学校进行全球化发展的必要性，同时也产生了危机感。可以在教室内参观教学情况，了解教育实践和学生的状态。在可以使用日语和英语交流的学生的陪同下，我们也可以与其他学生进行交流。

并非只有流于表面的交流方式，能切实听到学生们发自内心的声音，这是最大的收获。可以感受到学生们天真的表情和率真的语言，让人产生发自内心的共鸣，同时也想到与日本学生进行交流的可能性。

河边哲也·····在欢迎交流会中，首先让我感到吃惊的是司仪。可以分别使用“中日英”的 3 位司仪，在没有底稿的情况下主持欢迎会。特别是英文的发音非常棒。

在教学参观期间，我们参观了美术和书法等的课程，学生们使用“英语”进行教学说明。面对学生们标准的发音、流畅的沟通能力，我对自身英语能力不足感到惭愧。此外，我认为可以考虑让年龄相仿的美祢市初中生和这个学校的学生们使用英语进行沟通。

佐佐木雅一·····看到学生们自行组织访问计划、积极展示自身特长的精神面貌，我切实感觉到中日学生之间的区别。此外，学生们希望让别人了解自己、希望了解日本的欲望很强，从中感受到与本校学生在沟通能力方面的区别。

清水由美子·····短暂参观了初一英语的教学情况，课堂上使用投影仪、在屏幕上投放影像进行教学。一个教室的学生人数有 64 人，感受到中国受教育人数的规模之大。与此同时，对于教师一次性教导 64 名学生如何掌握每个人的学习情况和掌握情况感到好奇。

午餐会时，十六中学的书记梁吉星先生陪同出席，因此有机会问各种问题。本次的欢迎仪式是由学生编排的，学校仅准备了武术和舞蹈表演，其他都是由学生负责筹划并准备。

东城德幸·····虽然事先已经从介绍中了解该校重视英语教育的相关情况，但当亲眼看到学生积极使用英语进行对话的精神状态，让人感触良多。据校方介绍，其中没有华侨子女或长期留学经验的学生。仅靠日常学习即可达到这样的水平，这个事实让人惊讶。此外，从欢迎的舞蹈和音乐等表演可以了解到，该校将民族特色作为国际交流的核心，我们在进行具体的国际交流准备时可以进行借鉴。

西岛彻·····欢迎交流会期间，我们收到了蒙古族招待客人用的哈达（Hada:像围巾一样的东西），然后学生开始进行马头琴的演奏和呼麦表演。现场欣赏马头琴的音色感觉气势非凡、呼麦的歌声让人惊为天人。该中学也和爱知县冈崎市进行了交流，从录像中观看了当时的交流情况。学生们充满自信的眼神、认真进取的态度让我们感动。

馬場晴美·····来到第十六中学，学生们高水平的语言能力给我留下了深刻的印象。学生们自行编排的欢迎会使用中日英三国语言有条不紊地进行，实在让人佩服。英语学习时间仅有 4 年的学生可以使用非常流畅的英语进行对话，还有自学日语的学生充当翻译，可以了解到他们学习欲望之高。此外，更把纪念照装裱后作为礼物赠送、即日把访问情况发布到 HP 上，校方的迅速的处理手法很值得我们学习。

平松高志·····作为向导的中学生的英语水平很高，另外的中学生的日语也很棒，对此感觉很吃惊。特别在英语方面，与开始普及小学英语的日本相比先行一步，从小学 3 年纪开始学习英语，这和日本有着很大的差异，中国英语教育的成果令人不容忽视。此外，也通过录像观看了与日本姐妹城市的学校之间的交流情况，从中感受到该校对国际交流的重视，也了解到，如果我们的学校有这方面的意愿，很多中国学校将乐意展开相互交流。

三田畅夫·····位于内蒙古自治区的中学对于外语教育的定位如此清晰、并得以落实，实在让人非常吃惊。全部学生面对我们毫不怯场并熟练使用英语进行沟通，向我们展示了非常出色的教育成果，留下了深刻印象。

渡边庄太郎·····经常能看到以学生为中心的活动场面。欢迎仪式上的武术、舞蹈等继承了中国和蒙古的传统文化。我觉得对于本校而言，国际理解教育必须做到以下三点。

第一、踏实掌握本国和本地的知识。第二、重视作为传播工具的外语的教育。第三、待客之心。感觉这三点是必备的。我将把这 3 个要素带回自己的学校，致力在职员中进行共享并达成共识，教师团结一心共同努力。

呼和浩特市回民区太平街小学

[呼和浩特市] 5 月 31 日

校长：张秉焕（ZHANG Binghuan）
学生人数：学生人数约 1,500 名。此外附属特殊教育学校（特别支援学校）有 2 个班级。
教员人数：约 70 名

南侧为呼和浩特市第八中学的附属特殊教育学校。校内随处可见书画。教育理念是“让教员、学生、学校一起共同发展，打造综合性的特色学校”。

太平街小学附设特殊教育学校。访问团一行受到挥舞红旗的学生们的欢迎。

进入校门后，马上看到一个制成翻开的书本摸样的石碑，据说是为了让学生每天早上进入学校可以联想到中国 5000 年的文化。校舍的墙壁上张贴的“读”“写”两个字各有含义，“读”表示在幼年时期好好读书，“写”是指通过学习书写未来，这可以反映出如何培养下一代态度。校内不但设有可以自由阅读的空间，还在天花板、柱子或墙壁上写有唐诗，同时放有书形状的巨大书架，有效利用了校内的空间。在图书室，设置了 56 台连接有 50000 本书类数据的电脑，目的在于推动儿童积极阅读。这一台数也考虑到可以供一个班的学生在上课时是使用。在走廊还布置有中国教育学家的像和名言，墙壁上还刊载了伟人教师的照片等。

在参观教学时，在书法教室，访问团中的一员、筑波大学附属驹场高等学校教谕（日本教师职称）东城德幸先生向学生们展示了书法，并对所写的内容进行说明。另外，在 3 年级教学参观方面，我们参观了学生们手舞足蹈、充满生机地歌唱的音乐教室，也参观了 3 年级学生的英语教学。教学时把教科书的图画投放到前方的屏幕上，我们近距离观察了全部学生集中听讲、积极举手发言的精神面貌。

关于与太平街小学共同设立的附属特殊学校，访问团参观了使用器械和蹦床等道具的体育教学情况。生活方面，每周安排一次课程，让学生们自己动手制作食物然后一起吃。几位访问员品尝了学生亲手做的饺子。艺术方面，学生们在进行折纸作品的粘贴工作，

正用小棒子粘贴精细部位。可以欣赏到键盘电子乐器的演奏和歌唱、LEGO、刺绣（十字绣）、拼图、图画上色等各种活动。

附属特殊教育学校参观完毕后，校长张秉焕（ZHANG Binghuan）先生针对特殊教育进行说明。指出这个特殊教育学校的在籍学生年龄范围为7～20岁，由家属接送上学。而该校所面临的课题是如何培养残障学生们的自立能力、如何保证其毕业后的稳定发展和生活。

之后，访问团针对热情的接待致谢辞， 阐述了今后希望能保持日中间的持续交流，最后交换了纪念品。**（绀野知子）**

《参加者的感想》

井户忍·····校舍外观很漂亮。且拥有可以通过电脑阅读电子书籍的阅览室，让我很吃惊。墙壁上粘贴的伟人像、以及对学习分数进行总结的手写黑板等，都展示在学生日常易于看见的地方一览无余，通过潜移默化的方式促进学生们的兴趣、关注、认识与理解。

河边哲也·····给我留下深刻印象的一个场景是2楼的照片展示角。那里不仅展示了中国的伟人，还有贝多芬和莫扎特等世界著名人物的照片和功绩。特别还张贴了“鲁迅”的照片，当提及日本的全部中学生都读过“这位作家的作品《故乡》，那是一部优秀的作品”。全体相关人员听后异常震惊、随即露出非常欣喜的表情，这个情景特别难忘。

这次访问和其他学校视察的一大区别，是可以了解到“特殊教育”的情况。我认为对于“特殊教育”的态度，将反映出“国家教育理念的出发点”。

虽然教育厅相关人员指出“特殊教育步伐较为落后”，但是对于这部分的情况进行公开，并得以参观教学情况，已经迈出了关键的一步。

久保田胜己·····得以窥见中国的特殊教育的一个缩影，可以作为参考。当前日本的特殊教育处于领先地位，但随着中国经济等的继续成长，今后其在特殊教育方面的举措将备受瞩目，此外从另一方面来看，希望把日本在特殊教育方面的经验介绍到中国。

达见熏·····实际上在本次访问期间，仅在这个学校直接听到“就业”这个单词。访问的时候，刚好是该校学生每周1次自己做午饭大家一起吃的日子，学生们做了羊肉饺子让我们试吃。据说部分毕业生成为了厨师，这似乎也成为一项很重要的学习。

东长典·····特殊教育学校里，智力障碍儿童正在进行学习，参观了他们进行体育和劳动技能（烹饪学习）、音乐、美术（图画手工）的教学情况。并拿到了翻译成日语的时间分配表，从中可以了解到该校很重视劳动技能的时间。以书本学习为中心，通过学问继承中国5,000年的文化开创未来，这一教育理念体现在校园各处，这个举措将使老师和学生、访问学校的监护人和地区的人们更为同心协力。

益崎慎司·····能从校园建设中感受到学校的理念。校舍前方的纪念碑、校舍外围的回廊、还有校舍架空层墙壁上挂着的宣传画报，不仅可以向学生们进行历史熏陶，也是对国内外伟业的业绩的称颂。通过这些举措可以感受到校方希望学生们对本国的历史引以为傲、并在此基础上将学生们的注意力转向国际社会的良苦用心。

在特殊教育方面，仅接收有自理能力的学生入读。尚未具备接收自闭症以及重度残障儿童的条件，我觉得今后该领域的相关制度和设施有待完善，同时家庭和地区社会也必须进行意识变革。

呼和浩特市新城区山水小学

[呼和浩特市] 6 月 1 日

校长：王雅萍（WANG Yaping）
设立年份：2008 年
学生人数：约 1,000 名

占地 26,680 ㎡的全日制小学，校内面积宽广，并配置了全天候操场、篮球场等设施。以“教员和学生共同成长”为教育方针，重视学生和教员的健康。

对新城区山水小学校的访问中，由校长王雅萍（WANG Yaping）女士作为访问团的向导进行校内参观。该校可以使用日语交流的教员一同随行，将校长的介绍向访问团进行详细说明。

首先对学校设施进行参观。这个学校原本建于偏僻山村。学生大多为来自农村的走读生，为提高农村教育水平做出巨大贡献。长满苹果、杏子、桃子等果树的植物园由老师们亲手种植草木打造而成的，成为他们引以为傲的场所。虽然配置了全天候型体育设施，但由于学生人数众多，所以在外边设置了乒乓球桌。此外每天的规定时间里，将在广播音乐的伴奏下一起进行眼睛体操、耳朵体操。

当天，访问团参观了全校规模的体育活动场景。由校长的话得知，目的是让全体学生一起活动筋骨。该校认为运动对于精神和体力来说都很重要，在操场的中心区域，大家在体育老师的指挥下一起表演了体操，然后分班演示了喜欢的运动项目。项目包括跳绳、长绳、放风筝、轮滑、足球等。获得校长的批准后，访问团员也一起参加了几个运动项目和学生们同乐。

校内展示了从 1 到 6 年级学生的作业。作业内容是学生自命题的报纸和日记诗集等。访问团拿起报纸和笔记本等仔细阅读。

在与校长一起进行的座谈会中，我们听取了学校的说明和欢迎致辞。据校长介绍，之前访日期间对于日本近代化的街区留下深刻印象、对树木的种植方法进行学习，现正致力于推行公平教育、但仍有所不足。副团长久保田先生对于校方在假日为访问团进行教学演示表示感谢。然后进入问答环节。最后在拍摄纪念照后离开了学校。**（平松高志）**

《参加者的感想》

佐藤尚美·····在本次访问的学校中，感觉这所学校与日本最为接近。但是，对于全体学生一起表演体操感觉很惊讶。没有不守纪律的学生，大家都专心致志地做操。学生们和我们接触时没有丝毫畏怯，而且对于初次见面的日本人表现出浓厚的兴趣。

积极致力提高学校设施，通过校长的人脉和监护人的协助，获得了各种援助。

清水由美子·····山水小学并未像其他学校一样进行特殊的欢迎仪式，却是可以看到学生们日常情况的好机会。在中国政府的指导下，地方政府也致力普及义务教育，给我留下非常深刻的印象。

东长典·····这个小学原本建于建偏僻山区，且首次接待外国访问团。孩子们对我们充满好奇的眼神、率真的表情和反应非常可爱。

设施的面积宽广、对植物园的悉心管理、从教室至操场的行进期间学生们端正守纪的表现，都给我留下了很深的印象。

上课时也使用吊顶式投影仪的屏幕影像。我感受到老师们希望以体育活动为中心培养学生德智体全面发展的良苦用心、以及背负提高农村地区学生们教育水平这一使命的自豪感和气概，获益良多。

平松高志·····挺新的一个学校，感觉设备方面也很完善。参观教学和学生活动的时间比较长，是让我印象最深的学校。据校长介绍，学校学生大多来自农村。大家都和我们打招呼并主动搭话、一起拍照等，让人十分和蔼亲切。这个学校也设有全校一起进行体育运动的时间，无异于中国教育部 “锻炼身体”这一号召的具体体现。

本次学校访问中，虽然没参观我所任课的“技术”科目的教学情况，但随行摄影的负责人恰好是信息教育的任课老师，得以对信息教育的教学情况和所使用机器及软件等进行交流，十分有意义。

益崎慎司·····当天刚好是中国的儿童节，学校本应放假，但是为了我们的到来，师生都回校欢迎，实在十分感激。在全校进行体育锻炼的时间里，我们看到学生们生机勃勃的身姿，此外各楼层的楼梯间都张贴了防灾教育的宣传画报，这些都给我留下很深印象。而在会议室公开展览了学生们暑假期间的暑假作业。向其中 1 名老师咨询作业的提交情况，得知长假过后几乎全部学生都提交了作业。

而本校不交作业的学生较多、学生在假期即将结束之前通宵赶作业十分辛苦，当我向该校老师说明这一情况，他们做出如下的回答。指出山水小学以前也有很多无法按时交作业的学生，但是通过改变作业的出

题方法，减少全部学生都必须完成的一刀切作业、让他们从一定范围中自由选择作业类型、使用学生们更感兴趣的做法等措施，这一情况得到改变。感觉这个国家正以稳健踏实的步伐完成一个重大的变革。同时对于仅用数年时间建成校内植物园的校长的领导魄力感到十分敬佩。

和久田恭生……自 2008 年建校以来，仅过了 4 年时间。休息时间在教室进行的眼睛体操、以及在操场进行的全校体操，给我留下了特别深的印象。在进行全校体操后，分班自由选择喜欢的体育活动。很多班级都在进行长绳运动，感觉这个活动培养了学生们的团队精神和协调性。此外，也有助于锻炼身心。

4. 歴史と文化訪問

昭君墓	**5 月 29 日**
内蒙古博物院	**5 月 30 日**
玉泉区大召エリア	**5 月 31 日**
故宮博物院	**6 月 2 日**

昭君墓

[呼和浩特市]　5 月 29 日

《特色》昭君墓は呼和浩特市郊外南部に位置している。王昭君は前漢時代に生きた中国四大美女の1人である。漢民族から少数民族に嫁ぎ一生を終えた王昭君は、現在では民族友好の使者とされている。

プログラム第3日、訪問団は呼和浩特市の歴史に大きな関わりのある「昭君墓」を訪問した。専門ガイドがついて説明をした。まず、入り口を入る「昭君墓に謁す」の詩碑が建っている。これは、王昭君が匈奴に嫁いできて、漢と匈奴が友好的に付き合うことができたことをうたった詩である。

匈奴博物院の中には王昭君の在りし日の姿を想像した人形がある。昭君の肖像画等は残っていないため、想像で作られたものである。

王昭君は竟寧元年に匈奴と漢の友好のために嫁入りをした。そのとき、次のようなエピソードが言い伝えられている。

「昭君はもともと皇帝の大奥にいた。皇帝は大奥の似顔絵を見て、一番美人でないものを匈奴への嫁に選んだ。似顔絵を書く絵師にほかの女たちは賄賂を贈り美しく書いてもらうよう取り計らっていたが、清廉潔白な昭君は賄賂を贈ることをせず、実際より醜く描かれ、嫁ぐことになった。決まった後、初めて王昭君に会った皇帝は、実物が美しいことに驚き後悔したが、決まったことを変更はできなかった。王昭君が嫁いだおかげで漢と匈奴は友好的に付き合うことができたといわれている。」

訪問団一行は、高さ約 33mの陵墓に登り、頂上で陵墓全体を見渡したり、写真を撮ったり、周囲を自由に見学したりした。

《参加者の感想》

木屋村浩章・・・・・・・・呼和浩特市の歴史に大きな影響を及ぼした王昭君のお墓である。博物院内で漢と匈奴が友好的に付き合ってきた経緯を学ぶとともに、昭君墓の頂上にも登ることができた。 街全体の景観を眺められた唯一の機会でもあり、田畑や家屋の様子などを見渡しながら、中国の広大さを堪能することができた。

清水由美子・・・・・・・・公安のパトカーに先導され、スムーズに博物院に到着した。そこまでしていただいていることに感謝と申し訳なさを感じずにはいられなかった。昭君の墓は立派に整備され、広い平原を見渡しているようであった。

匈奴に嫁いだことが、漢と匈奴の友好に大きく貢献したということを記した石碑の説明を受け、王昭君の果たした功績の大きさを感じることができた。昭君墓の頂上に登り、そこから 360 度見渡してみた。呼和浩特市の中心部とは違うのどかな景色が印象的であった。その反面、急速に近代化が進む呼和浩特市の現状を強く感じることができた。

東長典・・・・・・・・匈奴博物院の展示とガイドの説明から、農耕民族と遊牧民族がせめぎ合ったり融和したりを繰り返しながら悠久の歴史を積み上げてきた中国にとって、この地はその交流の営みを象徴する場所であると感じた。加えて、日本人のルーツは、ユーラシア大陸の遊牧騎馬民族にあると唱える説もあり、日本の歴史・文化にもつながっていく起点とも言える。昭君墓からの景観を眺めていると、自分がそのような場所に立っているということに思い当たり、なおのこと感慨深いものがあった。

異民族の友好を詠った詩碑の説明を受ける

内蒙古博物院

[呼和浩特市]　5 月 30 日

《特色》中国の少数民族地区で最も早い時期に創設された。建物全体は 15,000 ㎡を超え、展示場だけでも 7,000 ㎡を超える。収蔵物は 10 万点を超え、各時期の古生物化石の標本、中国北部の遊牧民族の文物が収蔵され、世界から注目されている。

内蒙古博物院は草原をモチーフにしたモダンな外観の博物院である。2007 年に建てられた新館の 15 ある展示室のうち3つの展示室の見学を通し、内蒙古の歴史や生活文化、自然史の一端を学んだ。

一番目の展示場 Pride of Grassland（草原の天の寵児）では、古代蒙古族の通史が陳列してあり、蒙古族の起源や蒙元から明・清の時代の様子を知ることができた。特に蒙古帝国建国の父、テムジン・チンギスハンの展示は充実しており、当時の文化や宗教、蒙古族の繁栄の様子を垣間見ることができた。明・清代の装束や椅子等の実物展示もあり、多くの団員が興味をもって見学していた。

二番目の展示場である Amorous Feelings of Grassland（草原風情）では、蒙古の生活様式に関する展示物を見学した。古代蒙古民族の生活や各少数民族の風習、遊牧生活の様子を知ることができた。

三番目の展示場である Remote World（大昔世界）では、学術的価値の高い恐竜やマンモスの化石が多数陳列してあった。30 億年前から1万前までの内蒙古の生態環境の変遷を見ることができた。恐竜の動きや鳴き声を再現した展示物の前では「日本の技術が使われている」という説明がされ、両国のつながりが説明されるなどの中国側の気配りが団員らに感銘を与えた。**（熊谷久恵）**

《参加者の感想》

清水由美子・・・・・・・・草原をイメージしてつくられたこの博物院は、近代的な建物と展示物の豊富さがとても印象的であった。

展示物を通して古代蒙古民族の生活の様子や少数民族の風習などを知ることができた。

時間の関係もあって全ての展示ブースを見学することはできなかったが、見応えのある素晴らしい施設であると感じた。

和久田恭生・・・・・・・・2007 年に建てられた新館の 15 ある展示室のうち3つの展示室を見学した。10 万点を超える収蔵物があり、何度も足を運びたくなる施設であると思った。自国の歴史や文化を知っておくことはとても大切なことである。

小学生は入館無料ということで、子どもの頃から自国の歴史や文化を知ることに繋がっていると思う。それに対して、自分自身が日本の歴史をどれくらい把握しているかと恥ずかしくなった。

内蒙古博物院の外観

入口でチンギス・ハーンの銅像が訪問団を迎える

ガイドから内蒙古の歴史や民族・文化等の説明を聞く

玉泉区大召エリア

[呼和浩特市]　5 月 31 日

《特色》大召寺は呼和浩特市内の玉泉区大召前街にあるチベット仏教の寺院である。大召寺は中国語で「無量寺」、蒙古語では「伊克召」といい、大きな寺院という意味である。呼和浩特初の寺院として 1580 年に蒙古族の曾長アルタン・ハンによって建設された。

大召寺に入る手前の広場には、大きな鳥居のようなものや阿留拉埋汗（アルタン・ハン）像が設置されている。寺院は日本のものと違い、色鮮やかなのが特色である。屋根の上に飾られている太陽のようなものの両側に鹿をかたどったものが飾られており、この3つを組み合わせてチベット仏教となったという説明をうける。最初の建物を入ると右側に牛と象と獅子の像が飾られており、その前には蒙古の儀式に使われるハダと呼ばれる青と白の布がたくさん結ばれていた。信徒は自分のハダを結んで健康などを祈るという。金色の大きな円柱形をしたマニ車は、回しながら健康などを祈るものである。金剛像は牛の顔をしており、魔除けの意味をもつ。中央の顔は牛であるが、それ以外は人の顔をしている。一番奥には釈迦像が飾られており、この像は大量の銀でできていると説明を受ける。前に建てられている柱には、龍が柱を巻きながら登っていくように描かれていた。門からまっすぐ中央に続く複数の殿の左側に玉佛殿と菩薩殿がある。玉佛殿には数多くの宝石が使われていた。その石仏の前の両側には、中は銅で金箔が貼られた西方浄土が設置されていた。玉佛殿の前方に菩薩殿があり、21体の観音様や木造の千手観音が飾られていた。その菩薩殿は僧侶が経をとなえる場所があり、毎年旧暦の8月 14 日に法会が行われる。4日間念仏を唱えるということであった。**（清水由美子）**

《参加者の感想》

清水由美子・・・・・・・・大召寺参拝・見学はチベット仏教に触れるよい機会となった。訪問団は寺を参拝・見学した後、自由に南側の商店街を散策した。カシミヤの商品を扱うお店や、民芸品・お茶などのお土産を扱うお店がたくさんあった。1時間 45 分の散策時間は、内蒙古の文化に触れる時間となった

チベット仏教のカラフルな仏像

哈达が結ばれた彫像

故宮博物院

［北京市］　６月２日

《特色》明・清時代の北京に置かれた宮城。中華民国以後は故宮と呼ばれる。南北1㎞、東西 760mで、約 72 万㎡。ほぼ左右対称につくられている。外濠と城壁に囲まれ、南に皇帝の公式行事の場である外朝、北に私生活の場である内廷がある。1925 年からは故宮博物院として公開されている。

故宮博物院は溥儀らを紫禁城宮殿から退去させ、清朝が持っていた宮殿内の美術品などを一般公開したのが始まりである。

訪問団は天安門広場を見学した後、専門ガイドに付き添われて故宮博物院を見学し、日本語でその歴史や建造物についての説明を受けた。

天安門広場は、世界一の広さの広場であり、東西500m、南北 800mある。その西側には人民大会堂があり、全国人民代表大会などが開かれる。人民大会堂には1万人を収容できる大会議場がある。天安門広場の東側には、中国国家博物院があり、かつての歴史博物院と革命博物院とを統合したものである。天安門広場の真ん中には毛主席紀念堂があり、1976年に亡くなった毛沢東の遺体が安置されている。

その北に位置する故宮（紫禁城）は皇帝の宮殿であり、1925 年以前は一般の人は近づくこともできなかった。城壁は高さ 10m、幅8mある。明の時代は最初南京に都があったが、3代永楽帝の時、1406 年から1420 年にかけて 10 万人の人びとを動員して造った。1421 年に北京へ遷都し、永楽帝から明代は 14 人の皇帝が、清代は 14 人の皇帝の宮殿となった。 紫禁城は、大きく2つ（外朝・内廷）にわけられる。前（外朝）は政治、奥（内廷）は皇帝と3,600 人の女性たちの部屋がある。紫禁城には 9999.5 の部屋があるが、1万の部屋を持つのは天帝、皇帝はそれを超えてはいけないという。４本の柱に囲まれた区域を1部屋と数える。現在は 8,704 の部屋が残っている。火事で焼けたため、部屋の数が減っている。**（佐藤尚美）**

《参加者の感想》

河辺哲也・・・・・・・・「広すぎる！大きすぎる！」

中国の建物を見たとき、まず私が感じたことである。ここには、1万人を収容できる大会議場、500 人が一度に食事ができる食堂がある。

この天安門で 1980 年代から 90 年代にかけて、民主化をめぐる大きな動きがあったことを想像した。故宮（紫禁城）を取り囲む壁の高さ、長さ、大きさに圧倒される。

映画「ラストエンペラー」の一シーンとも重なり、もう一度映画を観たくなった。

木屋村浩章・・・・・・・・南京から北京へ都を移されたときの様子や皇帝の宮殿である紫禁城の作りについて日本語通訳から説明を受け、貴重な学習ができた。

平松高志・・・・・・・・歴史的舞台となった場所に自分が立ったことの感動と、スケールの大きさを感じた。場所の広さや人の多さに圧倒された。

天安門広場にて

熱心にメモする訪問団員たち

5. 総合所見

顔の見える関係に

井川裕之

入試や教員採用の方法を含め、生徒や教師という学校を形成する「人」の選び方と育て方について知りたいという関心を持って、今回のプログラムに参加しました。

中国での教員の採用の仕方に様々な幅があること、そして入試では学力の点数だけではなく幅広く生徒を見ていくという方針を掲げていることが分かりました。それ以外にも様々な気付きを本プログラムは与えてくれました。その中でも、特に大きな発見を三点、以下に挙げます。

まず一点目は、中国という国に対しての見方が大きく変わったことです。近代化、都市化していく街の様子を見て、また歴史的な場所を訪れて、中国の発展と歴史の両方を肌で感じることができました。特に学校の施設・設備も発展を遂げていて、先進的な部分も十分に持っていることが分かりました。

次に二点目は、生徒に直接関われたことです。呼和浩特市回民区第十六中学では、英語の得意な生徒が付き添って英語で説明をしてくれて、生徒とも交流することができました。他の多くの生徒も集まってきて、英語の得意な生徒が通訳をしてくれたり、日本語の得意な生徒が通訳をしてくれたりして、多くの生徒から質問を受けたり、こちらも興味のあることを聞くことができました。その中で「数学は難しいから嫌い」であるとか「宿題がたくさんあって、夜の 12 時まで眠れない」とか、「日本のアニメを見ることがある」等、子どもらしい素直な声もきくことができました。

そして、三点目は、顔の見える関係ができたことです。本プログラムの間、全行程を共にしながら様々な調整をしてくださった中国教育部には格別の恩を感じています。また、呼和浩特市に滞在中、熱心に通訳を務め、また教育事情についても多くの疑問に答えてくれた教職員のみなさまと各教育機関関係者のみなさまと訪問校のみなさまについても同様です。

各訪問地では、現地の教育行政関係者と昼食会にて歓待していただき、親睦を深められました。各学校で、多くの先生方と出会い、会話し、また多くの教育行政関係者にも温かく歓迎していただいたことで生まれた関係によって、再会したときにはさらに交流が加速すると確信しています。

このような発見を国内で発信し、両国の教育現場の交流につなげていきたいと考えています。

語学の堪能な生徒に質問する　（第十六中学）

生徒の「まなざしの強さ」

井戸しのぶ

中国の教育施設を訪問し、じかに児童生徒、教職員の姿を見たり、交流したりするという貴重な経験ができたことに、まずは感謝の気持ちを表したいと思います。国境を越え、さまざまな機関の多くの方々の協力・支援により成し得たプログラムでした。

中国で一番印象に残っているのは、児童生徒の「まなざしの強さ」です。1つでも多く学ぼうとする意欲、自分の考えに自信をもち行動する姿を目の当たりにしたからです。また、集団としての規律を守ることを重んじ、国家の思想を具現化した教育を行っていることも強烈に感じ取ることができました。「子どもは国の宝である」という言葉の通り、児童生徒の個性を生かし

つつ、協調性と自主性を育てる場としての学校（集団）というスタイルが確立されていました。子どもたちの学習意欲の高さは、その姿勢の良さや人の目を見て話を聞く態度、積極的に授業に参加する姿勢などからもうかがうことができました。

日本から飛び出し、他国の学校の教育現場を見たことで、日本の子どもたちの現状や問題点を再認識することができました。

些細なことであっても教師が意識して指導すれば改善できることがあります。日本の義務教育でも、意図的に積み上げるべき課題や改善点がたくさんあることに気づきました。

中国の小学校では1クラスに 50 人以上、中学校では1クラスに60 人以上、在籍していました。それでも、きちんと授業が成立していたのは、子どもたちの学ぼうとする意欲の高さはもちろん、集団の規律が徹底して守られていることが大きく関係していると思いました。体育や芸術に力を入れている学校が多いのは、まず学ぶ上で必要となる集中力や忍耐力、持久力などをつけることにも効果があるからだと思いました。

日本と大きく違う点の1つに「給食」があります。中国では給食のない学校が多いそうです。午前中の授業が終わったら、一度家に帰り、昼食を済ませ、午後に再び登校します。そのため、子どものいる家庭の多くは、送迎を1日に4回行ったり、昼食の支度をしたりする必要があります。そうなると、共働きの家庭では夫婦だけで子どもを育てることは困難です。仕事をしながら子育てをしようとすると、どうしても祖父母や親戚の協力が必要となります。学校以外に安心して子どもを預けられる場所やサービスを作っていく動きが、今後中国でおこってくるのではないかと思いました。

両国の違いを知り、認め、良さを共有し、どちらの国にとってもプラスとなるような交流が今後も続けられるよう、教育の現場から発信していきたいと思います。

真剣に篆刻を彫る生徒 （北京師範大学附属実験中学）

教育による人材育成

河辺哲也

今回のプログラムでは、個人として三つのテーマを設定して日本を出発した。

1.中国の教育施策の現状と課題についての研修や学校・文化施設の訪問を通し、中国の文化や教育全般に対する理解を深める。

2.教育現場での交流や意見交換を通して、中国での教育実践について学ぶ。

3.参加した日本の教職員の先生方と語り合う。

設定したテーマについて

1.について

出発前、東京の研修の中で最も印象に残ったのは、1990 年代の中国農村部の教育事情を考えるため、「あの子をさがして」という映画の一部を観たことである。文化大革命により教育が立ち後れた中国農村部の現状が生々しく映像を通して伝わってきた。

文部科学省の新井聡氏の講義で以下のような説明があった。

・都市と農村の格差

・都市への出稼ぎによる流動化

農村が過疎化していき、子どもの数が少なくなり、また予算の削減等から「学校の統合化」が進まざるを得ないということであった。このような過疎による統合化という問題は、わたしが勤務している美祢市でも同様なことであり、他人事とは思えないものであった。学校がなくなるということは、学校を介して、教師や保護者、地域の人との関わりがなくなるということである。

農村の文化的交流や地域の教育資源が崩壊し、一つのコミュニティが失われていくということでは、同じ問題を抱えていることを改めて認識する場面であった。しかし、実際、北京という都市に着き、その街並みを見ると、そびえ立つビルやマンション、行き交う外車や人々等、日本の都市以上の繁栄と豊かさであった。中国の映画から見た農村部と北京の豊かさ。そのあまりの落差が、とても印象に残っている。

2.学校を視察して（全体的な印象）

現在の中国は、教育により、政治・経済や科学・工業技術などに有為な人物を数多く育て、国力を高めていくことが第一に考えられていると感じた。義務教育を行うことで、子どもたちの能力を育て、可能性を

伸ばしていくことが、個人のためだけではなく、ひいては国家のためになるという考え方が根幹にあるように思う。日本以上に「競争社会」であり、「テストの順位」「資格試験の上位者」「スポーツ大会の優勝者」など、校内に個人名と写真が数多く掲示されていたことが印象的であった。

中国教育部関係者の話では、農村部と都市部との格差が課題であるということであった。農村部では、子どもは重要な労働力であろうし、十分に教育が浸透しているとは言い難いという話であった。

「都市部と農村部の教師間の人事交流」があるということであった。今回のプログラムを終えて、次は都市部だけではなく、農村部の教育事情も、この目で確かめてみたいものであると思った。

飛躍する中国と若者たち

木屋村浩章

教育視察の受入れを推進する自治体の担当者として、中国の教育事情について直接見聞きすることで理解を深め、今後の交流に活かすことを第一の目的と考えていた。また、日本全体でグローバル人材の育成に向けて取り組んでいることから、中国の外国語教育、特に英語教育の現状についても可能な限り知りたいと考えていた。

まず中国に到着して感じたことは、高層ビル等の建設ラッシュである。北京空港から市街地に向かう幹線道路沿いの至るところで、高層アパート、オフィスビルの建設が行われていた。

北京市の人口は現在約 2,000 万人(2011 年発表)で、地方からの流入者はますます増加しており、正確な人数を加えるとその数字を大幅に上回っているとのことである。2008 年の北京オリンピックを契機にかなり整備が進んでいるとはいえ、増え続ける人口に対応するため、今もなお道路や建物などのインフラ整備に取り組んでいるという印象を持った。

市街地に入ると、車、オートバイ(ほとんどが電動自転車)、歩く人、すべてが道路に溢れていた。日本では、自動車が中央、オートバイが側道、歩行者が歩道といった具合に、明確に区分されている。ところが、自動車や電気自動車などが急激に増加したためか、すべてが道路に混在しているように感じた。

北京での宿泊場所は、地元の人によると日本の渋谷のような場所ということであった。確かに連日夜 12 時頃まで大学生のような若者で溢れており、活気があった。

翌朝午前中に中国教育部を表敬訪問したのち、午後に最初の訪問校である北京師範大学附属実験中学を訪れた。北京市で初のモデル高級中学というだけあって、施設・設備、展示物、教育内容、生徒の様子など、どの部分から見ても、トップ校だと感じられた。大学への進学率は 100%ということである。また、「国際型人材育成特別カリキュラム」モデルの実施研究を行っており、卒業生の約 20%が海外の有名大学に進学しているということであった。「英語はあくまでも道具に過ぎず、(それを使って)国際舞台で活躍できるように、模擬国連やボランティア活動を行っている」という説明が印象に残った。

翌日 29 日(火)に、北京空港から1時間程度で、空路内蒙古自治区呼和浩特市へ移動した。最高気温が 35～36℃だった北京と異なり、呼和浩特白塔空港に降り立った時(正午)の気温は 15℃と肌寒かった。空港でまず目に飛び込んできたのは、中国語、英語、蒙古語の三種類の言語による表示であった。日本との違いとして、単に国土が広いというだけでなく、多民族国家なのだと実感できた瞬間だった。

呼和浩特市街を目にするまでは、かなり田舎の静かな街をイメージしていた。なぜなら、発展しているのは上海市など南部の海沿いの都市を中心としたものであり、一番北にある自治区の呼和浩特市はそれほど開発されていないと考えていたのである。ところが、実際の呼和浩特市中心街は、北京と同様に、高層アパートやオフィスビルがあちらこちらで建設されており、都市開発の真っ最中という状況にあった。

「国家中長期教育改革・発展計画綱要(2010～2020 年)」の中で、政策目標が掲げられている。教育

の現代化（施設の近代化）、学習社会の形成、人的資源強国の仲間入りの三つである。呼和浩特市で訪問したどの学校においても、その政策が推進されていると実感させられた。特に、第十六中学では、施設・設備や各授業での生徒の主体的取り組み、先生方の熱意などあらゆる面において、かなり高い教育水準にあると感じた。

英語の教科書は、国が指定する教科書とこの中学校で独自に採択した教科書の二種類が使用されており、内容的には、中学校1年生使用のものが、日本の中学3年生くらいのレベルに思えた。

今回の中国訪問では、呼和浩特市で4日間滞在したこともあるが、内蒙古自治区教育庁、呼和浩特市教育局など自治体が一丸となって計画・準備し、熱い歓迎をしていると実感した。これは、第二回情報共有会において日本から訪問団全員が口を揃えて言った感想である。

徳島県では、次の 10 月の「中国政府日本教職員招へいプログラム」で昨年に続いて受入れをする予定であるが、今回得た中国の教育事情を参考に受入れプログラムの充実を図っていきたい。

学校訪問で気づいた日本との違い

久保田勝己

海外の教育現場を見るのは初めての経験であり、中国の教育制度や教育行政について理解を深めるとともに、実際の教育現場での様子や生徒の交流をとおして中国の教育を直接肌で感じたいと考えていました。今回の交流事業で具体的に知りたいと考えていた課題は以下のとおりでした。

・中国における特別支援教育の教育制度、及び教育課題

・視覚、聴覚、知的、肢体不自由、病弱などの障がい種に応じた教育の現状

・通常の学級に在籍する発達障がい等の児童生徒へ支援

・特別支援教育に係る教員養成や教員に対する専門性向上の施策

・一般市民に対する特別支援教育に関する理解・啓発の仕方

などであり、この機会にいろいろと勉強したいと考えていました。

私は、特別支援学校に勤務している関係上、特に中国の特別支援教育の現状を知りたいと考えていました。太平街小学を訪問した際に、学校に附属する特別支援学校（特殊教育学校）における体育や家庭科の授業を見学することができました。

中国の特別支援学校で見た授業は体育で、トレーニング機器を用いた体力づくり、家庭科では、餃子の調理実習の時間を見学できました。日本の特別支援学校と比べ、児童生徒数が少なく、また障がいの程度も軽度で指導に関して少人数で授業を実施していること以外は、特別なことをしていないと思われました。児童生徒の様子からは、知的障がい、ダウン症、脳性マヒ等のようで、担当教員の話では、自分の身の回りのことができないと入学できないとのことであり、障がいの重い生徒や自閉症の生徒はどうなっているのかと思いました。

しかし、この特別支援学校では、教員どうしの意見交換の時間が少なく、細かいところまで質問することができず残念でした。

特別支援学校以外で、プログラム全体で印象に残った交流事例や意見交換等は次の通りです。

1.北京師範大学附属実験中学

訪問時は体育の授業で、体育館で1人ずつバレーボールの実技テストを行っていました。日本では、生徒たちは整列して座りテストの様子を見学するが、ここではテストの生徒以外は体育館の外で好きなことをしていました。

北京師範大学附属実験中学はエリート校と聞いていたことから、スパルタ教育かと思っていましたが、生徒がのびのびしており、自由さが感じられました。また、卒業生の内かなりの人数が海外の大学へ留学すると聞いて、これからの中国を背負ってたつ「エリート」を育てていることに驚きました。

2.呼和浩特市での学校訪問や交流会

呼和浩特市では、どの場所を訪問しても、「熱烈歓迎」を受けました。特に、新城区勝利街小学では、校門前にバスが着くと、そこからはレッドカーペットが敷かれており、VIP 待遇には驚きました。

校門から校舎までの両側には、児童が「書道」、「お面」、「切り絵」などの作品制作を行っており、その場で作品を手渡されました。また、交流会では内蒙古の伝統芸能でおもてなしをされ、訪問団も「北国の春」を歌うことで、その場のお返しをすることができましたが、海外に出て初めて日本の伝統芸能や文化について、理解し身につけておく必要があると強く感じました。

3.「規律」ある行動

呼和浩特市新城区山水小学を訪問した時、児童たちから右手を上にあげて「こんにちは」と挨拶をされ、また、児童全員による体操では「きびきび」した動きに感心しました。学年が1年から6年へと進むに従って体操の動きが整っていたことは、教育の効果が確認できるものでした。

このような状況は、他の学校を訪問した時も見受けられました。日本の子どもたちが以前に持っていた、メリハリのある行動が見られ、「規律」ということの大切さを改めて考えさせられました。

訪問校での体験授業 （山水小学）

目的意識と学習意欲

熊谷久恵

気仙沼市では、江戸時代に廻船が遭難し、漂着した中国の人々から手厚い保護を受け、無事に気仙沼に帰ってきたという史実をもとに、市民同士での交流が続けられた後、浙江省舟山市と友好都市協定を締結した。

震災前は、水産加工場で働く中国人も多かったことから、中国人に対する親近感をもっている市民も多い。

一昨年度には、舟山市の教員団が本校を訪れ、教員間で情報交換会を行った。その際、教員の登用制度や免許制度、研修、学校の時間割等の情報交換を行っている。

今回は、実際に教育現場を視察することで中国に対する理解をさらに深めていきたいと思い、このプログラムに参加した。参加に際しては「気仙沼と中国の ESD の取り組みの違い」「中国における防災教育の現状」「中国との交流学習の推進」「高い学力を支える中国の教育の現状」「中国における外国語（英語）教育」の5項目について具体的な課題を設定した。

これら5つの課題すべて解決することはできなかったが、それ以上に得られたことが多く、充実感をもって帰国することができた。

中国教育部の説明を聞いて、教育の多様化や質の向上、教育機会の格差是正の方針が打ち出され、中国の教育改革が進んでいることを実感した。視察に行った学校の施設設備のスケールの大きさ、充実ぶりは、目を見張るばかりであった。

最も印象に残った事柄は、児童生徒の学習意欲の高さである。どの学校でも児童生徒は背筋を伸ばし、まっすぐに教師を見つめ、意欲的に学習に取り組んでいた。個々や学級集団のやる気を引き出すための様々な工夫（顕彰者の写真入りパネル、学級入口の星マーク等）によるものもあると思うが「社会の役に立つために」「国際社会で活躍するために」といった目的意識の高さが学習意欲に直結していると考える。

災害に対する備え（防災教育の看板）（山水小学の廊下にて）

積極的な交流の重要性

紺野知子

参加にあたり、私は次の三点について研修を深めたいと考えていた。

1.「中国における防災教育の実践について」
2.「地域遺産をとおしての中国との交流」
3.「高い学力を誇る中国の教育実践について」

実際にプログラムに参加をしてみて、これら1～3の課題については、これからどうしていくかという部分が重要となるが、中国の教育現場を実際に訪れたことで、方向性や可能性が見えてきたように感じている。見え始めた方向にしっかりと歩みを進めていくために、今後も出会った方々との継続したつながりを大事にしていきたい。できればそのつながりが、私の異動後も現在の勤務校で続けられるようなものにできれば…と考えている。また課題意識をもって参加したからこそ、多くのことを発見し吸収することができた。例えば、いたるところで「消火栓」が目についたし、宿泊ホテルに設置してあった「防煙マスク」を見つけ、観察することもできた。

中国語は分からなかったがテレビ放送されていた「京劇」を見たり、数学の教員室で授業準備をされていた先生に声をかけ（通訳さんの力を借りて）「中国で使用している教科書」の写真を撮らせてもらったりもした。意識しなければ気付かなかっただろうと思うと、改めて意識の重要さを実感するのである。

中国の生徒たちの英語力は見事であった。コミュニケーションを図るのに笑顔だけではどうにもならないことを痛感した。思いを伝えるためには、やはり言葉が必要である。臆せず私に英語で話しかけてきた中国の生徒たちは魅力的であった。自分自身やクラスの子どもたちを考えてみると、まだまだ積極的にならなければいけないと感じる部分が多々ある。実際に私も訪問先で聞きたかったことを聞けずじまいに終わってしまったことがあり心残りになっている。日々の生活の中で自分自身と子どもたちを少しずつでも積極的に自己表現できるよう改善していければよいと思っている。

勤務校に戻ってから、早速訪問先でいただいた物や撮影した写真を見せながらクラスの子どもたちに話を聞かせると興味津々といった様子だったので、これを機に生徒同士英語でメールや手紙の交換をさせたいなと考えている。それが言語力や表現力を高めながら、積極性をも身に付けることにつながるのではないかと思う。

現場を離れることへの不安（中3の担任で中総体前であったこと）もあったが、中国の子どもたちの活動を見学する中で「今頃クラスの子は何をしているかな…」と考える自分がいて、やっぱり私は子どもが好きでこの仕事をしていると再認識することができたことがとてもうれしかった。そして様々な方々とのすばらしい出会いがあったことにも大きな喜びを感じている。中でもプログラムに参加した教職員方と同じ物を見て語り、移動中等に日々の自分の実践について交流したことは、大変よい刺激となった。学校に戻ったらもっともっと頑張らなければという力をもらったように思う。この出会いを大切にし、これからも連絡を取り合いながら教育活動に何かしら還元していきたいと思う。得るものが多く本当に充実した貴重な研修であった。

ローラースケートの授業 （山水小学）

自分の目と耳で実際を知る大切さ

佐々木雅一

中国の教育の戦略を知り、現場の実践を実感する、また環境教育や ESD に関して現状を知る、それがプログラム開始前の課題意識だった。

終了後のプログラムの率直な印象は、ありきたりであるが、自分の目で見て感じることの大切さである。特にその印象を強くしたのは以下の二点である。

中国の教育の特徴は管理教育であると思い込んでいた。PISA の学力が向上したことも特定のエリート学生をスパルタ式に伸ばしているのではないかと勝手に予想していた。

中国教育部を訪問し伺った「国家中長期教育改

革・発展計画綱要（2010～2020 年）」は日本が目指す方向性に似ていた。特に、知識だけではなく生かす力、課題を解決する力を重視する点は酷似していた。

トップダウンで現場へどのような管理体制をとっているのだろうと思い、その戦略を質問してみると、意外な回答だった。戦略の一つは大学の入試試験改革。知識偏重から活用する力を重視する内容へ変革を図るそうであった。もう一つは、行政権限を中央から地方へ移譲し、さらに学校ごとの独自のプログラムを進めるということだった。ゴールを改革し、手法を現場にゆだねる、非常にシンプルかつ効果的な戦略であると感じた。目指す方向性は同様でも、日本の教育行政は中国に比べ具体的な実施戦略が欠けていると感じた。

もう一点は、行政機関、教員、子どもたち、街の人などすべての方々に非常に温かく迎えていただいたことである。数年前の報道を見ていると、反日思想を持つ国民もそれなりにいるだろうと感じていた。しかし、我々を待っていたのは熱烈歓迎と、子どもたちのはじける笑顔だった。

帰国後、生徒たちに中国の印象をすべてのクラスで聞いてみたが、テレビ・新聞・インターネットなどの各種メディアの報道の影響が強いと感じた。メディアに洗脳されているのは、中国よりも日本であった。中国より開かれた国という意識があっただけにとてもショックだった。

現場の教員との交流は限定的であったため、環境教育や ESD に関する意見交換は期待していたほどには達成できなかったが、ここで得た交流、経験、刺激をどのように今後生かしていくか真剣に考えたい。

太平街小学の授業風景

教育は国家の実力

佐藤尚美

中国では、小学校では歴史の授業は行われていないという。また、中学校以降の歴史の授業は、中国史上著名な人物や事件・戦争などについて教えるだけであり、日本のように通史的な授業は行われない。歴史を通して過去について反省し、今後に生かしていくということは中国ではあまり重要視されていないのだろうか。

中国の教育制度および中国人の上昇志向については、基本的な教育制度は日本とはあまり大差ないと感じられた。ただしその運用については、大きく異なると感じられる点があった。

まず、教育に対する熱意である。社会主義国家ではあるが、社会全体は非常な競争社会であり、教育が将来のよりよい生活をもたらすと考えているように感じられた。また生徒も教員もさまざまな表彰の場があり、それが個人および全体の評価につながっており、教育の底上げにも貢献しているのではないだろうか。

また、設備も日本の学校とは比べものにならないほど充実していた。例えば特別教室の映像・音響設備などは少なくとも本校と比べ非常に充実している。それらを購入するための予算もかなりなものと思われるが、まだまだ不足している点が多いと中国の学校では感じているようだ。

今回の訪問でもっとも印象に残った言葉は内蒙古自治区教育庁の王利生氏の「教育は国家の実力」という言葉である。これが、現在の中国の教育に対する考えを示していると感じられた。

そのために国や地方は教育にお金を注ぎ、次世代を担う子どもたちを育てていこうと考えているのであろう。「教育は国家の実力、経済の発展に伴って行き届いてくる。教育は人に影響を与えるものであり、経済・社会・文明に深い影響を与えた。これは勉強する熱意を促していく。」と王氏は述べられたが、まさにその通りである。教育がその後の人生を決め、国家の行く先を左右するという印象を受けた。今の日本では、高校さらには大学進学も当たり前であり、勉強することの意味を見いだせないまま学校に通い授業を受けている生徒たちも多いが、もう一度、教育を受けることができるありがたみを考えさせていきたいと思った。

太平街小学の校舎の壁に書かれた字。生徒をどう育てるかの意識を表している

「積極性」と「心の温かさ」

清水由美子

開始前に自分で設定した課題は、「中国の文化や教育全般に対する理解を深める 」、「教育現場での交流や意見交換を通して、中国での教育実践について学び、学んだことを今後の教育活動に生かす」「中国の先生方や児童生徒の皆さんと積極的に交流し、友好を深める」という3点であった。

「エネルギッシュ」。これは昨年 10 月に本校を訪問された 24 名の中国の先生方から私が受けた印象である。1時間の道徳の授業を全て参観していただき、その後の意見交換会ではたくさんの感想や意見、アドバイスをいただいた。言葉の壁はあるものの、中国の先生方の積極的に学ぼうとされる姿に大きな刺激を受けたことは、自分自身の教職生活の中で貴重な経験となった。

この度、昨年のこの経験がきっかけとなり、直接中国の教育現場を訪問する機会をいただけたことは、夢にも思っていなかったこととは言え、かけがえのない、さらなる貴重な経験となった。

中国の首都北京は、近代的な高層ビルが建ち並ぶ大都市であった。4日間を過ごさせていただいた内蒙古自治区呼和浩特市もまた、計画的に開発が進む近代的な都市というイメージを抱いた。この近代的な景色と、昨年出会った中国の先生方の活力あふれる姿が重なって見えたような気がした。この目覚ましい発展を背景にしながら、中国の子どもたちがどのように学んでいるのか、北京においても呼和浩特市においても、空港からホテルに向かうバスの中で、学校訪問への期待が膨らんだ。

実際に自分の目で見た中国の学校は、学校の理念を全面に打ち出した校舎の建設と特色ある学校づくりが進められ、そのもとで積極的に子どもたちが学んでいるという印象を受けた。どの学校でも共通していたことは、私たち訪問団が案内される授業が美術や音楽・体育などの科目が中心であったことだ。このことは、「音楽・体育・美術においてもよりよい授業を実施し、全面的な発展をめざす」ことや「子どもの体力を高める」といった中国教育部での説明を裏付けるものであると感じることができた。中国の学校現場における、知識だけでなく、技能系教科にも力を入れて取り組まれている様子を直接感じ取ることができた。その反面、都市部と農村部の教育格差の是正の為にいろいろな取り組みがなされていることや、農村部における音楽や美術科教員が足りないといった教育部での説明から、自分自身が全校生徒 31 人という自然に囲まれた地域の学校に勤務しているため、都市部から遠く離れた中国の農村部における学校教育の実際の様子もぜひ見てみたかったという思いが募った。

8日間の訪中を振り返り、自分の心の中に大きく残ったのは「積極性」と「心の温かさ」である。8日間で5校の学校を訪問することができたが、その中でも、第十六中学で接した生徒の積極的な姿に、多くの示唆を得ることができた。国際交流に力を入れられていることは学校の説明や様子からしっかりと把握できたが、参観する私たちに流暢な英語で自分から進んで説明をしてくれる生徒の姿に、前向きな気持ちがありながらも、なかなか自分から話しかけることができない自分自身の課題を見つけることができた。また、中国において、私たち 25 名の訪問団が受けた心のこもったおもてなしは、お世話になった中国の人々の心の温かさとして、胸に深く刻み込まれている。

教育の質の向上をめざして

達見かおる

今回の中国訪問では次の疑問について見聞を広げることを課題とした。

1.勤務校の実態から、中国における職業教育の現状、小学校、中学校、高等学校へと進学する中で、どのように職業観を育んでいるのか。

2.美術の授業はどのように行われているのか。その中で基礎教育の段階からどのように力をつけさせようとしているのか。また、鑑賞教育やその中でも伝統的な作品と現代の作品、中国の作品と海外の作品等に触れる機会をどのように作っているのか。また、鑑賞教育の中で、言語活動をどのように採り入れているのか。

1.の中国における職業教育に関しては、直接そのような学校を見ることはできなかったが、あらためて「職業」について考えさせられた。

中国教育部国際協力交流司司長の劉宝利氏から、よりよい教育の提供が全国民に公平に行われることによって、学習的社会を形成するというお話があった。今回のどの訪問先でも、その意欲が強く感じられた。教育は社会、そして国を支えていく人材の育成のためにある…という信念のもとに教育がなされている。

今現在勤務校の3年生は夏休みを控え、就職先・進学先の決定に苦慮している。生徒も、私たち指導者も、保護者も、かなり狭い視野で進路先を捉えているのが現状である。国家レベルで自分の職業を捉えてはいない。訪問した学校がモデル校や優良校であったせいもあるかもしれないが、日本の教育の職業観の捉え方とはスケール感が違うと感じさせられた。日本でも企業が求める人材には、いずれは指導的立場に立って、若い人材を育てていくことを求められるが、それはあくまで「一企業」としての姿勢である。

本校は開校4年目の新しい学校で、キャッチフレーズが「世界を目指す技術者へ」ではあるが、「世界を目指す」ためには、高い技術力を身につけるための設備や、指導者の研鑽は言うまでもなく必要だが、一番必要なのは「気構え」かもしれない、と感じさせられた。

2.については徳育を重要視するなかで音楽・体育・美術のよりよい発展のために力を入れているのが、訪問したどの学校の中でも際だって感じられた。初等教育の段階では、各学校で比較的授業の内容に差がなく、書道、切り紙などは同時間に同時展開で行っているのが新鮮であった。

鑑賞教育については、北京師範大学附属実験中学の美術の授業で、中国の伝統的な絵画と17 世紀頃の西洋絵画を比較していると思われる授業を最初に見学した。中国の伝統的な絵画の技法について先生が熱心に解説し、それを生徒が静かに聴く、といった授業だった。この後どのような生徒の活動につなげていくのか興味深かった。

今、日本の高校の教育課程においてはすべての教科において言語活動が促されており、中国ではどのようにしているのかを見てみたかった。しかし、この学校には素晴らしいギャラリーがあり、何千年も前の芸術作品が美術館さながらに置かれていていつでも鑑賞することができるのは、羨ましさを通り越して驚きであった。

12 年ぶりに訪れた中国は、オリンピックを契機に大きく様変わりし、成長を続けているのが街並みの変貌ぶりでもわかる。同様に教育もよりレベルアップするために高い理想に向けて国家を挙げて取り組んでいる。

今回の訪問でどこへ行っても温かく熱烈な歓迎を受け、また日々の活動の成果を目の当たりにして、あらためて自分の指導者としての姿勢や、視野の拡大、多様な価値観等について思うことの多い8日間であった。

学習意欲の源

東城徳幸

今回プログラムに参加するにあたり設定した課題は、改革解放後に社会が激変した中国において、各種学校の教育現場がその変化をどう受け止め、学校経営・教育実践・国際交流等がどのように行われてい

るかを知ることであった。

参加開始前は上述のように漠然とした課題であったが、事前学習や出発前のレクチャーの受講、また中国教育部での説明を伺い、2000 年代以降、中国の教育政策が国土の広域性や人間の多様性によって生じる教育格差や競争の過熱といった問題に正面から取り組み、教育の平準化や全人的な資質教育の推進などを将来に向けて計画設定していることを恥ずかしながら初めて知った。そこで、そういった計画設定の理念を、教育現場がどのようなかたちで受け止め、どのようなかたちで現実化しようとしているのかを自分なりに観察してみたいと考え、各種学校視察に臨んだ。

特に印象に残ったのは内蒙古自治区呼和浩特市の各種学校の取り組みである。呼和浩特市は内蒙古の政治上の中心地であり、漢民族・蒙古民族・そのほかの多くの少数民族からなる歴史や、急速に都市化し多くの人口が流入していることなど、一度の訪問でははかり知ることのできない複雑な背景を持っているが、それを吹き飛ばすような教育現場の教員と生徒の意欲の高さには心底感心させられた。

それぞれの学校では、日程の都合などもあり通常の授業よりも歓迎のパフォーマンスを中心に拝見したが、それぞれ芸術・体育教育の資質教育の普及モデルを担っている学校らしく、普段の教員による指導の充実ぶり、施設の充実ぶりや、それに答える児童生徒の意欲的な姿勢が窺えるものであった。勝利街小学や第十六中学では、民族的なアイデンティティを核とした音楽や踊りなどのパフォーマンス、高いレベルの芸術作品展示を拝見した。我々を歓迎してくれた中心となる児童生徒のプレゼンテーション能力の高さ、中学生の英会話能力の高さも含めて普段の取り組みの熱心さが窺えるものであった。太平街小学では、漢字の成り立ちや字体を記したプレートや教養書のスペースが普段の学校生活に溶け込むかたちで設計された教育施設を拝見し、特別支援学校での体育や芸術の授業も拝見した。郊外の山水小学では整備された庭園や中国では珍しいサッカーグラウンドを備えた運動場を拝見し、児童が実際に運動する姿も拝見した。ハード面での整備や、支援教育の普及も着実にすすんでいると感じた。

全体に、まだ従前の中国のエリート教育を体育・芸術の分野に移してみたような固さがあり、汎用的な内容になるかはこれからの課題と見えたが、全体への普及を担うという使命感の強さが実によく現れていた。充実した体育・芸術教育が中国全土に普通の光景として現れる未来を期待させる内容であった。

各地で「まだまだ日本の教育に良いところを学びたい」との謙虚な発言があったが、我々こそ呼和浩特市の学校が持つような使命感や教員・児童生徒の意欲の源を学ばねばならないと思った。

今回の視察では、パフォーマンスの結果を中心に拝見したが、それらをつくりあげる過程をもっと知りたいと思っている。そのような考えのもと、今後の交流の持続を目指したい。

国境を越えた相手を思いやる心

西嶋徹

テーマは「中国の国家施策に基づく基礎教育システムについて」である。

実を言うと、出発するときは、教育行政の一端に籍をおいて2年目ということもあり、学校現場との業務の違いにもようやく慣れ始めたこの時期に、丸々一週間職場を離れることへの不安や申し訳なさを感じながら東京へと向かった。

しかし、東京でのオリエンテーションや参加メンバーとの対面を果たした後は、緊張の中にも、今後待ち受けているであろう事に対する期待の芽も膨らんできた。それは、オリエンテーション講義により、中国の教育事情の概要を把握することができ、現在の中国の教育事情を直接確かめることが出来る事への期待であり、全国各地から集まったメンバーとのネットワークづくりへの期待でもある。この際、「荒尾市教育振興課学務係の諸君、すまぬ。あとは任せましたぞ。」と気持ちを切り替え、中国を体験しようと決心した。

北京は、道路も建物もスケールが大きく、熊本の片

隅から出てきた自分は、ただポカンと口を開けているばかりであった。2008 年のオリンピックを契機とした近代的な街づくりは、現在もいたる所で進められていた。

呆然としたまま、北京到着2日目に中国教育部を表敬訪問した。その席で、教育部より、教育政策についての説明を受けた。オリエンテーション講義での話のとおり、2010 年に策定された「国家中長期教育改革・発展計画綱要(2010～2020 年)」に基づいた改革を断行中ということであった。

その後見学した北京師範大学附属実験中学の設備や子どもたちの様子を見ると、その改革の最先端をいっている学校であるという印象を受けた。

3日目から訪れた内蒙古自治区の呼和浩特市では、北京にもまさる熱烈な歓迎を受けた。

内蒙古自治区教育庁でも、訪問した小、中学校でも、心からのもてなしを受け、訪問団一同感激すると同時に、10 月の訪日団受入れ時を考えたときの大きな不安ともなった。本市への受入れに関しては、中国と同じような対応は到底不可能である。それでも、何とか訪日団の面々に「荒尾に来て良かった。」と感じていただけるような受入れを考えていかなければならないと強く思った。

「知」「徳」「体」の育成

馬場晴美

中国がどのように国際教育を推進しているのか、どのように自分の意見を持つ積極的な生徒を育成しているのかを学ぶことが課題であった。また受験戦争が厳しい中、いかにして学力向上と道徳心の向上を両立させているのか(いこうとしているのか)、という点にも興味があった。これらの課題がすべて解決したわけではないが、いくつか見出すことも出来、とても有意義であった。

北京師範大学附属実験中学や呼和浩特市の第十六中学では、いずれも英語教育を徹底していたが、それ以上に自国の文化を大切にしていることが印象的であった。北京師範大学附属実験中学では「古代美術室」が設けられていたり、第十六中学でも書道室の壁画が「清明上河園」であったり、と雰囲気つくりから徹底していた。その一方で、内蒙古自治区教育庁での「幼児への英語教育を普及しているが全ての人が英語を学ぶべきであるのかは疑問である」という発言は印象的であった。英語のみに時間を費やしていいのか、という考えからであるが、日本の教育にも当てはまるような気もした。

もう一点印象的であったのは、思っていた以上に教育部が知徳体の育成に力を注いでいた点である。具体的な睡眠時間を提示したり、毎日体育の時間があったりと、私が考えていた以上に受験戦争の熾烈化に苦慮し、対処しようとしていたのが印象的であった。これは日本の多くの高校が抱えている問題と共通している。

中国は 13 億人という人口から、日本よりもより競争が厳しいことが予測されるが、学校の教員が休日に塾を開いて教えている、という話をあったので、ここは緩和されていないと感じた。ただ実際に訪問した学校では、生徒たちにあまり閉塞感が感じられず、のびのびと学習活動をしていた姿も見受けられたので、ここも地域や学校によってその格差があるのかも知れないと感じた。

知徳体の育成に力が注がれている（第十六中学）

高水準の学校教育

東長典

開始前の自分の課題としては、現地の人々との交流を通して、広大な中国では地域による経済格差や学校間格差が深刻であり、それにどのように対処しているのかを知ること、経済発展の影で中国の学校では学校適応に関する問題（不登校や生徒指導上の問題）がどの程度あり、どのような対策を講じているのかを知ることなどが挙げられる。

中国を訪問し人々と交流してみて、それまでに抱いていたイメージが大きく変わった。

内蒙古自治区において、経済の高度成長を背景に予想以上の高水準の学校教育が展開されていることである。近年の経済発展は中国東部の臨海部に偏り、内陸部、特に農村部は取り残されているイメージだったが、レアメタルの資源開発等の波に乗る内蒙古自治区の区都呼和浩特市については、民族多様性の溢れる街並み、高層ビルの建築ラッシュ等、その熱気や繁栄ぶりには目を見張るものがあった。その波に押され、訪問した4校とも全天候型の広大なグラウンド、教育理念を反映した様々なオブジェや施設設備、各教室に天井吊り下げ式プロジェクタとスクリーン等々が整備されていた。それにも増して、子どもたちの学習意欲の高さと規律正しさ、音楽・身体表現や英会話等パフォーマンスの完成度の高さには舌を巻いた。それを下支えしているのは、子どもも保護者も地域もみな学校に期待しており、勉学に励めばよりよい未来を築くことが必ずできるといった明るい展望ではないかと考えられる。

見学した範囲では、欠席で机が空いているような教室もなかったので、学習意欲のみならず「学校適応意欲」が相当高く、学校側のお話のとおり不登校や生徒指導上の問題は少なそうに思えた。ただし、私たち教育関係者が最も見習うべきは、各学校の特色のある確固たる教育理念の存在である。

ある学校は芸術・文化、ある学校は読書、ある学校は体育に重点を置くなど、横並び意識ではなく自立的に物事を発想し研究を重ねることによって自分の学校らしい成果を挙げている。他と同じ姿を求め同じことをして格差を埋めるのではなく、自校の特色をとことん伸ばすことによって社会発展に有為な多ジャンルの人材を育てることも、その学校の存在意義だと気付かされた。教育者としての気概と向上心溢れるこれらの学校や教育行政関係者と交流を続けることは、本当に有意義だと考える。

野外卓球台の説明を受ける（山水小学）

つながっていく人と人

平松高志

今回初めて中国を訪問した。国外の教育を視察する貴重な機会を与えていただき、すべてが自分にとって新鮮で、驚きにあふれていた。

まず、印象に残ったことは、各地の歓迎である。このプログラムと対をなす中国政府日本教職員招へいプログラムにおいて、現任校では昨年度の受入れ校として、前任校の岡山県立岡山操山中学校では 10 年前の初回実施時の受入れ校として中国からの皆様を受入れる機会があった。今回自分が逆に中国を訪問させていただき、各地で大変な歓迎を受けた。私たちも受入れの際にはできるだけのおもてなしをしたが、今回の訪問では、すべての学校・教育機関等でそれ以上の歓迎を受けた。今までこのような大歓迎を受けた経験はなく、訪問する立場で歓迎を受けてうれしかったことや、私が視察や交流で成果を感じたことを今度はお迎えする立場で役立て、学校間交流や国際交流事業の受入れ校として今後役立てていきたいと思っている。

二点目に、中国の教育を視察して多くのことを知り、多くのことを感じた。一番心に残っているのはどの学校でも児童・生徒が大変明るく活気に満ちた学校生活を送っており、授業や学習に大変意欲的に取り組んでいる姿が見られたことである。私たちの訪問があ

ったという点を除いても、その姿は印象的だった。学習内容に対する興味・関心や、内容そのものの面白さもあるのだろうが、「教育は自分たちの将来につながる大切なものである」という考え方が社会全体で共有されつつあることを感じた。また、中国の教育についても多くを学んだ。

中国教育部や内蒙古自治区教育局の説明では日本と中国の教育課程の違いや先生の採用の違いなどを学習したが、実際の訪問で基礎教育学校の教職員は女性が多いことや、多くの学校の校庭に全天候型のバスケットコート等があること、掲示物やスローガンで教育効果を高めている様子など、実際に学校を訪問して初めて気づくことも多かった。

三点目に、人との交流である。特に山水小学の先生といろいろお話する機会に恵まれ情報教育や山水小学の教育について直接お話を伺えた。設備は大変充実した小学校だったが、それでも現場には私たちと同じように日々悩みがあるのだとわかり、現場の教師同士の親近感を感じた。

また、我々訪問団のメンバー同士の交流も日を追うごとに深まり、将来中国との交流を担う全国の先生方と親しくなれたことは、貴重な財産になった。

中国の学校との交流を進めるに当たり、今回のメンバーと今後も継続的な情報交換を行っていきたいと考えている。

日本と中国の教職員同士の交流 （山水小学）

国民レベルでの交流の大切さ

益﨑慎司

今回の交流プログラムでは、私は次のことに関心を持ちつつ参加させていただきました。

・都市部と農村部では、教育を取り巻く状況についてどのような違いがあるのか。

・限られた空間の中で、多数の児童生徒に教育を行うために、どのような工夫がなされているのか。

内蒙古自治区呼和浩特市では中国農村部の学校を見ることができると考えていましたが、現地を訪れてみると私が思い描いていた農村部というイメージとは、随分とかけ離れていました。ビルが建ち並び、近代的な施設が随所に見られました。またそこにはたくさんの人々が集まり、活気のある街並みを呈していました。過疎化の進んだ農村部の学校の状況を実際にこの目で見ることはできませんでしたが、教育部での説明により、都市部と農村部の教育格差解消を目的として、学校建設その他の資金面で農村の学校を支援したり、農村部での教師の質を向上させるなどの取り組みを行っているということを知りました。また中国の学校では、それぞれ多くの児童生徒が学んでいるものの、その校舎はどこも十分な広さを持っていると感じました。

今回訪問させていただいた学校はすべて、十分な広さを持つ立派な校舎で、教育環境についても十分吟味しながら整備されているという印象を受けました。グラウンドについては今回訪問させていただいた学校のみならず、移動中に見ることのできた全ての学校が全天候型であったことに驚きました。さらには、それぞれの学校に十分な広さの会議室や講堂があったことからも、国や地方自治体が公教育に対していかに力を入れているか窺い知ることができました。

今回、学校を訪問させていただく中で、中国の教育が大胆に改革されていることを感じることができました。国の体制の違いということも大きいでしょうが、日本と比べてこの国の変革のスピードの速さには驚かされました。

訪問したそれぞれの学校では、ここ十数年で学校が大きく変貌したことを耳にすることができました。私たちを歓迎していただく際の様子などを見ても、学校の方針で集団全体を動かすことが比較的容易にできる現場であるのではないだろうかということを感じました。このことは裏を返せば、校長のリーダーシップが発揮しやすい体制なのだろうと思います。

今回の訪問では、その成果の方が目に飛び込んできたのですが、もしもその陰で一人ひとりの子どもや保護者の思いがおざなりにされているとしたら、将来その歪みが出てくるのではないかという心配も胸中をよぎりました。

今回のプログラムでは、交流を通して多くのことを感

じ、学ぶことができました。その中でも、最も強い印象を受けたことは、中国の人たちが私たちのことを心から歓迎してくださったということです。訪問させていただいた学校での、子どもたちや先生方、また教育行政に携わる人たち、さらには通訳として同行してくださった方々。それらの方々の親切さは、国や民族、言葉の違いを乗り越えて心に響きました。

国と国の間には様々な問題があることは事実ですが、だからこそ国民レベルでの交流が大切であるということを痛感しました。

通訳担当の呼和浩特市の職員との交流

行政としてできること

三田暢夫

今回の参加に当たり、課題として設定したのは次の三点である。

1.教育行政に関わる者として、他の国の教育状況を実際に見ることで、今後の様々な施策に生かしていくとともに、多摩市が進めているESDの交流先として連携できる学校や機関等について情報を得ること、

2.今後、外国籍の転入者に対してどのように関わっていくのか、また国際交流教育をいかにして進めるかを考えるための経験としたいということ、

3.指導主事として様々な経験を積むことで、今後の学校への指導・助言の一助としたいということである。

この課題を決め、成果を得るために訪中に参加したのだが、考えることが非常に多い体験となった。

中国教育部での説明に関して、国として教育をどのように捉え、どのように推進していくのかということが非常によくわかる説明であった。多少概念的ではあったが、教育格差の是正やそれに伴う様々な課題を必ず解決していくのだという姿勢やそれに対する予算の裏付けにより中国の断固とした意思を感じることができた。

その後、内蒙古自治区という中国教育部のお膝元を離れた場所でどのような状況が見られるのか興味深かったのだが、その取り組みの進み具合にとても驚かされた。国としての指針を決めてからわずか数年の間に外国語教育が推進されその成果を見ることができるほどに生徒に定着している状況や、特別支援教育の推進、農村部の児童に対する教育の推進や施設の充実には目を見張るものがあった。この速度で教育改革が進んでいくと、そう遠くない時期に日本は抜かれるのではないかと思うほどの急伸具合であり、今後日本がどのように進むべきか考える良い機会になった。

今後世界と向き合い生きていく子どもたちにとって「生きる力」としてどのような力を身につけさせていくことが必要なのか、そのために行政として何ができるのか今一度立ち止まり考える必要がある。

教育を通して育む「生きる力」

和久田恭生

日本では現在、児童生徒の『生きる力』の育成を目指して、確かな学力、豊かな心、健康と体力の育成に取り組んでいますが、中国ではそのことについてはどのように取り組まれているのかをまず知りたいと思っていました。

中国の教育事情については事前にいただいた資料に、中国では「資質教育」を推進されており、それは「すべての子どもに目を向け、その基本的な資質を全面的に伸ばすことを根本の主旨として、子どもの態

度・能力に重点を置きながら、徳・知・体において生々活発で、主体的に成長させることを基本的な特徴とする教育」であると書かれていました。さらに、「創造性の育成」を中心とした資質教育が推進されているとも書いてありました。

中国の「資質教育」と日本の「生きる力」の育成は同じことを目指しているのではないかと思い、実際に中国の学校を見せていただいて、そのことを次に確認したいと思いました。

今回の訪問で、5つの学校の様子を見せていただきました。そこで共通していたことは、子どもたちの表現力の豊かさでした。発表する力、演技する力、外国語を話す力の素晴らしさに驚きました。どのようにして表現力を育んでいるのかをこれからもっと知りたいと思っています。

次に、中国人の国民性や考え方について関心がありました。日本青少年研究所がまとめた調査では、日本の中高校生が学校や自宅、塾で一日に勉強する時間は平均8時間に対して、中国では約 14 時間と大きな差がありました。一方、日本の高校生の77%が学校の勉強を「きつい」と感じており、中国の 54%を大きく越えていました。さらに、「自分はダメな人間と思う」と言っている高校生は、日本が 66%で、中国は13%でした。どうしてこのような結果になっているのかを知りたいと思いました。このことについては、直ぐには分かることではないとは思いますが、中国では歴史や文化を大切にしていることや読書の大切さを教えていることはとても印象的でした。

国の方針に基づいて、学校と家庭が共通の認識を持って子どもたちの健やかな心と体の育成に取り組んでいるということが分かりました。

さらに、日本でも充実させるための取り組みが必要であると思いました。

「国際理解教育」の窓口として

渡邊荘太郎

「国際理解教育研究指定校（市委託）としての活動の在り方」をテーマに本プログラムに参加させていただき、自分の五感を通して中国の教育活動を知る機会を得た。

日本での予備知識をもとに教育部の方針を受け、多民族の国家にどのように浸透しているか興味が沸いた。

小学校、中学校等を見学させていただき、児童・生徒がいきいきと学習に取り組み、中国の文化や民族の文化の継承に力を注いでいると感じた。

見学した学校に共通していたことが、学習環境への経済的な支援があることと、教員数などの優遇措置がなされていたことであった。恐らくこのような先進的な学校が紹介されていることと思うが、恵まれた環境に感じた。

日本は、教育環境や人的なものについて今後努力をしていかなければならないところである。逆にこのような環境のなかで一律の学習環境を整えている日本は、これはこれですばらしことであるとも感じた。

外部からの訪問者に対して笑顔で迎え入れてくれた児童・生徒は、日中変わりなくかわいらしかった。

政府の考える教育の標準化において、2時間目が終わっての全校体操も遠く離れた呼和浩特市で実践されており、着実に浸透していることを感じた。また、芸術的な活動である音楽や美術などの表現活動では児童・生徒の個々人の個性が十分に発揮されており、また文化の継承といった点でも見応えがあった。

たくさんの贈り物を頂戴し、持ち帰ったものは本校でも紹介させいただきたいと考えている。

太平街小学における特別支援学校では、児童の自立支援という教育の指針について感銘を受けた。自分の力で生き抜く力を授けることは将来において大切なことであると思う。その一方で、学校の説明の中で幾つか疑問に感じることがあった。説明の中で、「入ることはできるが長く続けられるか」という点であった。通訳の方からの話では、中国では障がい者が産まれた場合に、その保護者は、子どもを表に出さず、家庭で育てることが多いそうだ。外に出すことでいじめにあったり、保護者が世間から責められたりするというのだ。ひとりの人間としての価値が損なわれてい

るように感じた。障がいの状態によって支援を要する状況も大きく変わることは十分理解できるが、先進校がある本校区においてこのような現状があるのであれば、農村部に行けば行くほど、この傾向は強くなることであろうと感じた。

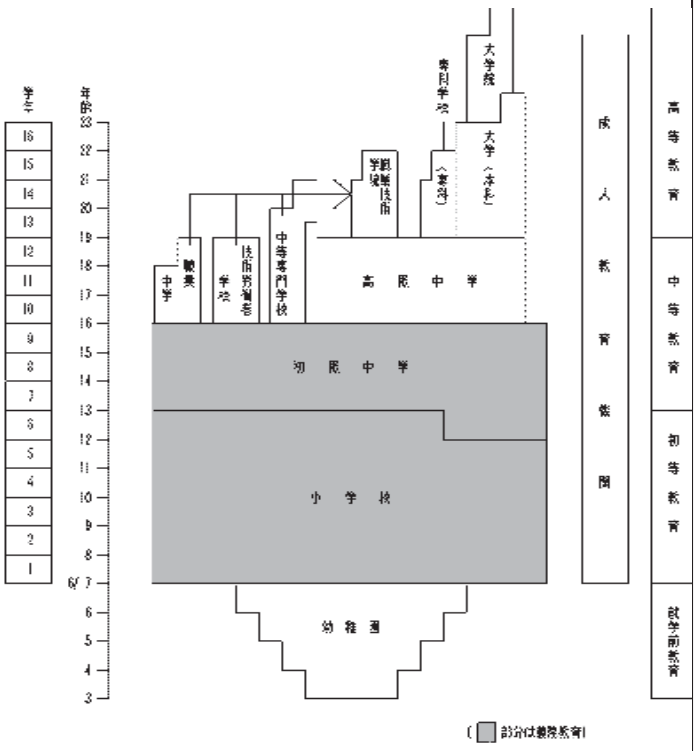
本支援学校では、交流活動が成されていないとのことで、自立活動の一つとして他者とのコミュニケーション能力を高める取り組みが必要と考えるところであった。

本プログラムとして、第十六中学での生徒主体のセレモニーが印象に残っており、このレベルまで生徒を鍛えることができれば、国際理解教育としてすばらしい研究となると感じた。

児童に凧を見せてもらう（山水小学）

《補足資料》

◆中国の教育系統図



出典：文部科学省　諸外国の教育動向 2011

6．成果と今後への活用

井川裕之

[最も有意義だった内容]

学校での見学です。特に、呼和浩特市回民区第十六中学では、英語や日本語の堪能な生徒が校内を案内してくれ、自由時間を与えられた生徒も近くに来たため、色々な生徒と話をすることができました。それにより、教育部での説明や各学校長の説明、そして授業中の様子といった面が、結果的に生徒にどのように反映しているのか感じ取ることができました。

教育方針を知り、教育内容を知った上で、教育の成果をこのような形で測定できたことは、大変貴重な経験となりました。

[成果]

入試や教員採用の方法を含め、生徒や教師という学校を形成する「人」の選び方と育て方について知りたいという関心を持って、今回のプログラムに参加しました。よって、中国での教員の採用の仕方に様々な幅があること、そして入試では学力の点数だけではなく幅広く生徒を見ていくという方針を掲げていることが分かったことは、設定した課題に対しての成果でした。また、生徒の生の声を聞けたことで、いまだ知識習得にかける時間と労力の負担が大きく残っているという現実も目の当たりにしました。しかしながら、芸術に力を入れていることも十分に感じられ、全人的な教育を目指していることが実現している部分も発見できたことも、大きな成果でした。

[今後への活用]

・本校の教員向けにプレゼンテーションを行います。
・絵画をツールとした交流からスタートし、児童相互の交流を進めていきたいと考えます。
・今回知り合った方々のお力添えを頂くことで受け入れをしてくれる学校が見つかれば、本校の休業期間と、相手校の授業期間がうまく重なる日程を探し、その期間に本校教員数名を連れての学校視察のプログラムを組みたいと考えています。
・こちらが中国へ訪問する際や中国側が来日する際など、中国の教育行政関係者と会う機会を作り、その度に、「日本語のできる小学6年生数名」の日本へのホームステイプログラムを中国教育部で設立してもらうよう提案したいと思っています。また、いつかそれが実現する際に、受け入れ校になれるよう、校内での広報活動を続けていきます。
・今回、北京師範大学付属実験中学で発見した「学校内の歴史博物館」を本校にも導入できるよう、研究を進めます。

井戸しのぶ

[最も有意義だった内容]

中国の児童・生徒の学習意欲の高さ、集団規律の徹底ぶりに大きな衝撃を受けました。また、国家を大切に思う気持ちや、祖父母や両親、教師を敬う気持ちが日本よりも強いように感じました。

どの学校でも1クラスの人数の多さには驚きましたが、授業は問題なくとてもスムーズに行われていました。「1つでも多く学びたい！吸収したい！」という子どもたちの熱い思いと「集団の中では好き勝手な言動を慎む」のが当たり前になっているからだと思いました。背筋を伸ばし、話している人に視線を向け、話を聴くことが出来たり、前後左右に居る人とのバランスを見ながら、自分の立つ場所を正確に決めたりしていて、正直驚きました。

日本の小学生は、並ぶのに時間がかかってしまっ

たり、並んでからもフラフラと動いてしまったり、しゃべってしまったりすることがあります。集団の場でも「個」が優先されてしまっているような格好になっているのかもしれません。幼いから出来ないという考えではなく、幼い頃からその発達段階に合わせて、きちんと集団規律を学ばせていく必要があると思いました。

体育や芸術（武道・舞踊・書道・篆刻・切り紙）などに力を入れている学校が多いのは、集中力や忍耐力、持久力などを養うのにも効果があるからではないかと思いました。また、そのような取り組みを何年にもわたって継続していくことで、それぞれの技術が向上し、得意なことを伸ばしていける環境作りができるのだと思いました。

[成果]

本事業では、私は2つの課題をもって参加した。

1.中国と日本の教育の共通点・相違点について

2.核家族化と子どもを取り巻く環境のメリット・デメリットについて

恥ずかしながら、本プログラムに参加が決まるまでは中国の教育については何も知らなかった。文部科学省の新井聡氏のオリエンテーション講義を受け、事前学習用のテキストを読んだりして、ぼんやりと形が見えてきたところでの訪問となった。やや不安もあったが、それは学校訪問を行った時に払拭された。「百聞は一見に如かず」とはこのことである。実際に各小中学校へ言ってみると、日本と中国の共通点・相違点ははっきりと認識することが出来た。

また、北京師範大学附属実験中学では、個人の質問を受け付けてくださる機会に恵まれた。生徒の中には通学に2時間もかかっている人がいることや、給食がないため、一度帰宅することなどが分かった。地下鉄や自転車での通学者もいるが、保護者による送迎の生徒も多いようだ。1日に4回の送迎は仕事をもつ保護者にとっては大きな負担だと思う。昼に2～3時間ほど休息時間が入るため、生徒は午後6～7時くらいまで学校にいるので、帰宅時間が遅いことも分かった。核家族であっても祖父母や親戚に家から学校への送迎を頼まなければならない状況もあることが分かった。

[今後への活用]

中国の文化、教育について学んだことや実体験してきたことを、学校や地域の教育活動に還元したい。具体的には、日本と中国の教育事情や文化の違いについて、児童や教職員、保護者、地域の方々に積極的に発信する。プレゼンテーションができる場の設定はすでに用意されているので、自分の言葉で話す。

また、今回の「熱烈歓迎」の恩返しをすべく、10 月の訪日に向けて準備を周到に整える。そうすることで日中両国の相互理解、友好促進の一助とする。10 月の交流を機に、継続的な学校間交流が進められるようにする。

中国教職員から切り絵の授業の説明を受ける （山水小学）

河辺哲也……

[最も有意義だった内容]

「最も有意義であった内容」ということだが、どれもすばらしい体験であった。「特に」といえば、新城区勝利街小学や回民区第十六中学などで直接見聞できた学校訪問と、故宮博物院の見学である。「有意義」という言葉を、「感動した」というように置き換えると、「呼和浩特市の方の熱い歓迎」である。

各教育機関と各関係者のきめ細かな配慮に感動した。人を迎えるというのは、大変なことである。たくさんの準備と打ち合わせ。そのような「面倒」なことを丁寧に準備されていた。

わたしたち日本人を迎えることは、「面倒なこと」がたくさんあったに違いない。大変であることは想像できる。そういったことをちらりとも見せず、中国の人の温かさ、人を迎える気持ちを、私は「肌」で感じた。このことが、私にとって最も有意義なことだった。

[成果]

1.中国の教育施策の現状と課題についての研修や学校・文化施設の訪問を通し、中国の文化や教育全般に対する理解を深める。

中国の子どもたちは、美祢市の子どもと比べたとき、「表現力が豊か」ということを最も感じた。表現することに積極的である。また、英語に堪能な生徒が多い。英語が、場面や状況に応じて「話せる」姿が、最も心に残った。英語の授業も「オールイングリッシュ」である。美祢市の子どもが、この中国の子どもたちと会った際に、「コミュニケーションを取ることができるか」と自問自答した。やはり「英語が使える子ども」を育てないと、子どもの世界は広がらないと痛感した。

2.教育現場での交流や意見交換を通して、中国での教育実践について学ぶ。

中国は、徹底した成果主義をとっていると感じた。競争原理を教育や経済の世界に取り込み、発展させていこうという施策が、学校の掲示等に表れていた。「成果を出す」という点では、一考するべき点であると感じた。

3.参加した日本の教職員の先生方との語り合い

他の市町の先生方、文部科学省の方等との出会いは、市の状況や、仕事上の未知の話をたくさん聞け、とても有意義だったし、楽しかった。参加された先生方の目的意識や、仕事に対する「思い」を聞けた。特に、役割分担で、「情報共有会」という同じ役割を担った佐々木雅一先生との出会いは大きかった。2回の話し合いは、彼が司会をし、私は、彼の司会ぶりを見るだけであった。しかし、「こういうふうに話し合いを持つと、目的に向かって楽しくなるんだ」という発見ばかりであった。そ

[今後への活用]

今回、参加させてもらった体験をどのように生かすか、市教委という立場を踏まえて、以下のように考えている。

1.美祢市長に今回のプログラムについて報告
2.教育長を含めた教育委員への報告会の開催
3.美祢市の教職員の先生方との報告会や懇談
4.美祢市の広報や教育委員会発行の広報誌に今回のプログラム体験を掲載

情報共有会副リーダー（左)とリーダー（右）

木屋村浩章……

[最も有意義だった内容]

見るもの、聞くこと、体験することなどプログラム内容のすべてが有意義であったが、視点を変えて1つあげるとすれば食文化について学べた点である。中華料理は日本でも馴染みのある料理であるが、実際の中国の料理はどんな食材を使用し、どんな味付けなのか、また地域によってどのように異なるのかなど、そこに住む人々の暮らしに密接に関係する部分について学ぶことができた。

訪問期間中に、北京、呼和浩特市のそれぞれの教育委員会主催で歓迎昼食会を開催していただいたり、自由時間に街中の店を訪れることにより、いろいろな場所で食文化を体験することができた。その結果、羊や鳥などを食材にした伝統的な郷土料理と言われるものから庶民的料理に至るまで、いろいろな種類の食べ物を食し、それらの食べ物をとおして生活の様子を伺い知ることができた。

外国を訪れる上で3つの大きな関心事は、ことば、食べ物、風習（生活習慣）だと考える。私自身中国語をまったく話すことができず残念であったが、買い物や食事の際に地元の人と何とかコミュニケーションを図ろうとしたことも有意義な体験であった。

[成果]

まず何よりも、中国を訪れて生活や教育事情について直接見聞きできたことが大きな成果であった。訪問するまでは、テレビニュースから得られるわずかな情報をもとに、中国に対する認識をしていた。今回の訪問により、すでに発達している部分、今まさに発展途中の部分、立ち後れている部分などが自分なりに把握することができた。学校訪問において、呼和浩特市回民区第十六中学での3人の生徒による歓迎セレモニーが見事であった。日本での受入れの際の参考になった。特に印象に残った部分は、3人の代表生徒が、出席者全員が理解できるように、中国語、英語、日本語で役割分担をしてスムーズな司会進行を行っていた点である。

外国語教育に関しては、中国では英語教育に力を注いでおり、小学校3年生から学んでいる。日本では小学校5年生から週1時間外国語活動を行っており、英語の音声に慣れることを大きな目標としているのに対し、中国では書く活動も行っているようであった。また、日本の他県からの参加者と所属校や自治体での国際交流に係る取り組みについて情報交換をするとともに、親交を深めることができたのも大きな収穫であった。

[今後への活用]

今回のプログラムについては、県教育委員会で作成している「教育旅行ホームページ」に3カ国語（日本語・英語・中国語）で掲載し、広く県内や海外に向けて情報を発信する予定である。また、10 月の「中国教職員招へいプログラム」で受入れる際、訪問校に対して十分な情報提供を行い、受入れ校、訪問者の両者にとって有益な内容にしていきたい。

2011 年 10 月の中国教職員訪問団員と徳島県教職員の再会

久保田勝己……

[最も有意義だった内容]

内蒙古博物院や故宮博物館の見学も中国の歴史や文化を知ることで有意義でしたが、最も有意義な内容は、それぞれの学校（5校）を訪問したことでした。実際の教育現場での様子や生徒の交流から中国の教育を「直接肌で感じる」ことができたことは、今の中国の教育を知る上で大変役に立ちました。

中国教育部への表敬訪問等では、「都市部と農村部の教育格差の解消」を繰り返し説明していまので、機会があれば農村部の学校や一般的な学校の様子も知りたいと思いました。

[成果]

特別支援教育については、特別支援学校を1校訪問することができ、その状況を実際に見学することができ、大変嬉しく思いました。指導方法等については、日本が進んでいると思われましたが、子どもたちが一生懸命調理実習等で頑張っている光景を見て、中国も日本も同じだと改めて感じました。課題としてあげていた「特別支援教育に係る教員養成や教員に対する専門性向上の施策」や「一般市民に対する特別支援教育に関する理解・啓発の仕方」等々については残念ながら疑問として残ったままですが、今後は文献研究等で深めたいと考えています。

中国全土の特別支援学校の校数は1000校程度で、日本の校数とほぼ同じです。人口から考えるとかなり少なく、今後中国は、2020年までに市や人口30万人以上で障がいのある児童が比較的多い県は、特別支援学校を1校もつことを基本的に実現すると「国家中長期教育改革・発展計画綱要（2010～2020年）」で示しています。特別支援教育について、これからの中国の取り組みを見守っていきたいと考えています。

[今後への活用]

・今回の中国訪問の成果を勤務校で発表し、中国についての興味関心を高めてもらう。

・自分の子どもが通っている地域の小学校、中学校等へも今回の中国訪問についての成果を伝え、中国についての興味関心を高めてもらい、中国教職員の訪問の際には受入れ校としての協力を依頼する。

・今秋、徳島県は中国教職員の受入れを予定しているが、日程が合えばホームビジットとしての受入れをし、家族としても中国への理解を深めていきたい。

熊谷久恵……

[最も有意義だった内容]

1.中国教育部、内蒙古自治区教育庁表敬訪問が有意義であった。国や地方の中枢を訪問し、教育方針を知り、教育の全体像を捉えることができたことは、その後の学校視察にも生かされている。

2.学校視察を通して、中国教育局の目指す「高いレベル」の教育を見ることができた。体育設備や特別教室の充実、ICT の活用、国際的視野を育む外国語活動等に感心させられた。また、どの学校現場でも、教員の熱意や児童生徒の学習意欲の高さを感じることができた。

3.情報交換会を通して、参加した先生方と意見の交換ができたことが有意義であった。日中、見学したことを深めたり、新しい視点を得ることができた。

[訪問前の課題]

1.気仙沼と中国の ESD の取り組みの違いについて、その特徴について、学校現場の実践を中心に探っていきたいと考える。

2.中国における防災教育の現状について、中国における防災管理や防災教育の実態と成果を学び、私たちが策定しようとしている防災教育の計画に生かしていきたい。

3.中国との交流学習の推進に向けて、今後、日中の絆を深め、発展させていくために日中の交流学習の可能性を探りたいと考えている。合わせて、交流学習を進める上で必要な ICT 環境や情報教育の現状についても視察したい。

4.高い学力を支える中国の教育の現状について、学習意欲を支える社会や教育局・教員の支援体制についても学びたいと考える。

5.中国における外国語（英語）教育について、実態（指導内容とその方法等）を今回の訪中で学び、日本

での指導に生かしていきたい。

[成果]

1.直接質問する機会は得られなかったが、書籍資料等から得た情報で体系的に行っている学校があると知った。今後も積極的に情報を得ていきたい。

2.内蒙古においては、洪水や台風等に備えた防災訓練が行われているという。あらゆる災害を想定したマニュアルを作成する際には、内蒙古における防災教育を参考にしたい。

3.現在、絵画と硬筆習字の作品交流を中心に中国の学校と交流学習を行っているが、交換する作品については、切り紙、篆刻等も視野に入れていきたい。今回の訪中の様子を自校の児童に知らせ、中国への興味関心を高めた上で、地元に住む中国人の方と交流する機会をもちたいと考える。

4.中国においても、児童生徒の睡眠時間確保が問題となっており、日本で行われている「早寝早起き朝ごはん」キャンペーンのようなことが行われていることを知り、親近感をもった。また、単に点数をとるための授業だけでなく、「徳育」も重視され、親孝行や礼儀、教師を大切にしようとする気持ちを育もうとしていること。加えて、自己の利益だけでなく、将来の社会貢献を視野において学習している生徒が多いこと等がまじめで熱心な学習態度に結びついていると考える。

5.外国人との交流や国際舞台で活躍することを視野において、教育がなされている。国際的な視野を育むために外国人を招いて、交流すること等も行っていた。

[今後への活用]

気仙沼市の研究員で防災教育計画を策定する際には、中国や東南アジアを意識し、洪水等にも対応できるものを作成していきたい。友好都市協定を結ぶ舟山市定海小学校とは、切り紙、習字等の作品交流を行う。今回の訪中で撮影した写真や動画をもとに、本校児童が中国への関心を高められるようなプレゼンテーションを行いたい。

生徒の作品を見学（北京師範大学附属実験中学）

紺野知子……

[最も有意義だった内容]

このプログラムすべてが有意義であったが、その中でも特に有意義であったと感じたのは「学校訪問」である。なかなか他国の学校事情を肌で感じることはできないため、今回このような機会を与えていただいたことに感謝している。全部で5校の学校訪問を行ったが、どの学校もそれぞれに特色があり素晴らしかった。

IT 機器の充実と利用、全天候型のグラウンド、鏡張りのダンス用教室、50m温水プール、卓球台の設置等、施設設備の整った環境の中で教育が行われていることが分かった。そしてそのすばらしい環境の中で、子どもたちが非常に熱心に学習に取り組む姿が見られた。よい環境の中で一生懸命に学べば子どもの力は伸びるし、可能性も広がると思う。先生方もよりよい指導を日々工夫されているのだろうと思った。

我が校の生徒にも学習に対する姿勢を見習わせたいと思ったし、私自身も教育のプロ意識をしっかりもって今後も指導にあたらなければならないと強く感じた。

訪問した学校の中でも直接生徒とふれあうことができた「新城区勝利街小学」「呼和浩特市回民区第十六中学」「呼和浩特市新城区山水小学」が特に印象に残っている。もう少し自分自身に英会話力があればもっともっとコミュニケーションを図ることができたのに…と思うと少し残念ではあるが、一緒に活動して笑顔になれたことは貴重な体験であった。

[訪問前に設定した課題と成果]

課題1.「中国における防災教育の実践について」

＜成果＞

訪問した地域は、地震はないものの嵐や洪水などの災害があるため、19 世紀から地方の状況に応じた防災教育が行われているとのことであった。「新城区山水小学校」の踊り場には、様々な災害に対しての防災を啓蒙する看板が設置してあったことが印象的だった。通訳さんに、「防災教育はどの程度行われているのか」「看板の内容の資料はないのか」等聞いてみたところ、「まだまだこれからの部分で、資料もない」とのことであった。残念に思いながらも、今後よりよい防災教育の在り方を探っていくという同じ立場で何か一緒にできることがあるのではないかと思うと、これからのつながりに可能性が見えてくる。

課題2.「地域遺産をとおしての中国との交流」

＜成果＞

各学校で伝統文化・芸能を披露してもらった。地域

遺産の継承活動が確実に行われていることを実感した。ただし、教育活動の中でどのような取り組みがなされているのか詳細に関しては解決することができなかった。しかし、今後交流を図ることでどのように行われているのか知ることができると思うので、ぜひとも交流を図りたいと考えている。

課題3.「高い学力を誇る中国の教育実践について」

＜成果＞

直接中国の先生方と指導方法について等の話をする機会はなかったが、生徒の提出したレポートから、各自が課題意識をもちきちんと学習内容をまとめる力をもっていることが伺えた。自由形式でまとめられるだけの力をつけるには日々の指導が大切である。それだけの授業をしているのだと思うと私も頑張らなくてはと強く感じた。生徒自身が学習内容のつながりを明確にし、自ら学ぶという意識を高められるよう、今後も教材研究・指導法の研究と改善に取り組んでよりよい授業提供をしていきたい。

[今後への活用]

1、2については、中国との交流を図ることで前に進めると思うので、まずはこちらから連絡をとり、学校や教員、生徒たちと交流を図りながら活動に取り組んでいきたいと考えている。

1.については「気仙沼市教育研究員」という立場もうまく活用しながら、基本的に学校・教員を中心に交流を深めていきたい。

2.については生徒会の生徒を中心とした生徒同士の交流で進めていきたいと思っている。

3.については、見てきたことを参考にしながら、課題の出し方を工夫するなどして生徒の学力向上につながるような指導に努めていきたいと思う。

佐々木雅一……

[最も有意義だった内容]

地域を超えて、同じ立場の教員と教育委員会の仲間が集まり共通体験をしたことだと感じる。

中国の教育の方向性を知り、現場の実践を見る、中国の教育関係者の献身的なサポートぶりや心からのもてなしを受け止める。そうした共通体験をベースに、移動中や食事、夜の時間などで、訪問中の出来事を語らい、受けた刺激や戻ってからの行動や課題などについて、たくさん話したことで、新たな気づきや発見が多くあった。また、訪問プログラムの内容だけでなく、日頃の各地域や各教員の実践などをじっくりと聞くことで、共感と刺激をたくさん得た。

結果として、今後の教育活動においても、全国にそのような共通体験を持った仲間がいるということは、新たな取り組みをする時の貴重な連携相手、相談相手となるだろう。

[成果]

世界最大の人口を擁し、GDP で日本を超えた中国という国が、今後どのような発展を目指すのか。環境を破壊し、莫大なエネルギーを消費し、国際的な協調よりも自らの都合を優先する道をとるか、または環境に配慮しながら、持続可能な開発の道を探り、世界との協調路線をとるのか。それは持続可能な社会を実現する上でとてもクリティカルな問題である。そして、その路線が後者へと進む上では、多くの先進国と同様に、持続可能性や国際性を視野に入れた次世代育成が教育現場で語られ、実践されはじめていることが期待される。その点について、教育現場を直接訪問し、自分の目や耳で感触を得ることが、私がこの交流プログラムに参加した大きな課題意識である。

今回の訪問で、中国政府教育部の中長期教育改革・発展計画を聞く限り、それは知識よりも、創造的で、課題解決力のある人を育て、社会的な価値観を育てることなどが重要視され、日本にとても近い方向を向いていることが理解できた。さらにその実現に向けて、大学の入試制度改革（知識から生かす力へ）、教育権限の地方移譲、学校移譲などがとられている点は日本の ESD 戦略よりも圧倒的に効力を伴った戦略をとろうとしていると感心させられた。また北京師範大学附属実験中学校のカリキュラムを聞く上でも、北京のエリート中高生たちが、積極的に国際理解教育を受け、模擬国連の活動や国際ボランティアの活動を授業の一環として取り組んでいることなど、直接担当する先生から聞けたことは、これまでの中国の ESD の印象を大きく変えた。

[今後への活用]

1.生徒や教員へ中国の現状を伝える

2.ESD の実践者へ、中国の教育方針や現場での取り組みを伝える

3.連絡先を聞いた十六中の生徒へ、青陵中の生徒

からメッセージを送る
4.英語の教員に相談し、授業として学校間でメッセージの交換が可能か検討する
5.美術部に相談し、作品の交換が可能か検討する
6.秋の受入れ時には教員間の交流を積極的にオーガナイズする
7.多摩市として生徒の国際交流プログラムを企画し、希望する生徒を中国へ連れて行く
8.同行した参加者や、過去の交流プログラムの参加者と国内でも継続的に交流する

佐藤尚美

[最も有意義だった内容]

新城区山水小学では、普段の授業の様子を見ることができた点が良かった。本校で外国からの訪問を受入れる際の課題でもあるが、どうしても見せるための授業となる場合が多い。この学校では、こどもの日で本来なら休日にもかかわらず、特別なことを見せるのではなく、目の体操から校庭での体操、そして授業と普段の学校の様子をうかがうことができた。また、防災・防犯に関する掲示が階段の踊り場に設置されていたのが印象的であった。この掲示は他の学校ではあまり見られなかったが、かなり詳しい内容がイラスト付きでわかりやすく説明されており、子どものうちから、防災・防犯に関する意識づけをする上では有効と感じられた。

[成果]

・中国における歴史教育について

歴史教育だけについて伺う機会がなかったが、少なくとも小学校では歴史教育を行っていないことから考えると、あまり歴史教育に関して重点を置いてないという印象を受けた。中国の教育における重点の一つは語学教育ではないか。

・中国の教育制度および中国人の上昇志向について

教育制度については、事前の資料などから、ほぼ日本とかわらないシステムだと感じられた。ただし、高等教育については、日本の方が進んであるようである。また教育の格差は中国の方が大きいようであるが、今回のプログラムでは、先進的な学校の訪問だったので、その点については詳しくはよくわからない。中国人の上昇志向については、様々な賞が設けられ、特に優秀な生徒に関しては、掲示板等で全校生徒に対して知らせるなどしており、競争意識を掻き立てられるようにしていることが印象的だった。

また生徒個人だけでなく、クラスごとにも競わせており、さらには優秀な教員に関して表彰が行われるなど、あらゆる場面で競わせようとしていると感じられた。またよい教育がよい将来を約束すると考えているようであり、そのために親も国家も子どもに対してお金をつぎ込み、よりよい教育を求める傾向にあるように感じられた。

[今後への活用]

・自分が勤務する学校のホームページへの掲載。
・教職員研修会での発表。
・PTA 広報誌への掲載。
・中1の地理での特別授業。

体育の授業見学。中国教職員（左）から説明を聞く。（北京師範大学附属実験中学）

清水由美子

[最も有意義だった内容]

「百聞は一見に如かず」ということわざにもあるように、5つの学校を訪問し、実際に自分の目で中国における教育の様子を直に見ることができたことである。

北京師範大学附属実験中学で1人の男子生徒から「日本の学生も漢字を学習しますか？」という質問を受けた。通訳の方を通して「小学校1年生から学習します。」と答えると日本語で「ありがとう」と返してくれ

た。初めて現地の生徒と話をすることができた、とてもうれしい瞬間であった。

また中国教育部や内蒙古自治区教育庁で直接お話を聞くことができたことも、中国の教育を理解する上で大変有意義であった。

[成果]

８日間のプログラムを通じて、いろいろなものを見、接し、感じ、学ぶことができた。ACCUから事前に送られた資料をはじめ、オリエンテーションでの講義、中国政府教育部や内蒙古自治区教育庁での説明、訪問校における特色ある取り組みの説明を通し、自分の中で中国の教育全般に対する理解が深まったと感じている。また文化については、歴史的施設や文化施設の訪問をはじめ、北京や呼和浩特で8日間を過ごす中でたくさんのものを感じ取ることができた。

活気や躍進といった中国の素晴らしさをはじめ、安心して渡ることができる横断歩道や煮沸しなくても飲むことができる水道水など、鈍感になってしまっていた日本の素晴らしさにも気付くことができた。中国の学校を訪問し、生徒が英語を使って話す力がついていることを強く感じることができた。いろいろな場面で英語を使って会話をするという活動が組み込まれているのかどうか、その辺をもう少し詳しく調べてみたいと思った。また、本校の生徒に、英語が話せる素晴らしさを伝え、学習意欲を高めていきたいと思う。

学校訪問では、それぞれの学校で、理念や特色が、校舎をはじめ教育活動全体に渡って打ち出されている様子や自信がうかがえた。その様子から、本校においても、生徒や教職員が誇りをもてる学校づくりだけでなく、日々取り組み、積み重ねてきた成果に対し、誇りを持つとともに、それをしっかり中国の先生方にも情報発信していくことができれば、両国の教育の向上につながるのではないかと感じた。その為には、広い視野を持つことが大切であるということにも気付くことができた。国内だけではなく、海外の教育についても関心を持ち、良いところを取り入れながら、これからの教育実践に取り組んでいきたいと思う。

最後に、中国では積極的に交流しようと意気込みながらも、自分の英語力の低さと自信の無さから、進んで積極的に交流できたとは言い難い。この点が今回の訪問における大きな反省点であると同時に、これからの課題であると気付くことができた。この反省点を今後の交流に生かしていきたいと思う。

[今後への活用]

今回のプログラムで自分が見たこと、感じたこと、学んだことを、プレゼンテーションを作成し、できるだけ早い段階で本校の生徒や教職員に伝える場を設けるとともに、学校便りを通して保護者や地域の方々にも伝えていきたい。また、校内に今回の訪問でいただいた記念品やお土産、撮影した写真や児童生徒の作品、手紙等を展示するコーナーを設置し、生徒が直接触れられるようにしたい。

今後の交流として、中国でお世話になった方々や手紙をくれた生徒さんにお礼の手紙を書くことから始めてみたい。そして個人的な交流から、学校としての交流に繋げていきたい。

達見かおる……

[最も有意義だった内容]

すべて有意義であったといえるが、観光では行くことのできない中国の教育行政機関や教育現場を訪れることができたことである。

教育行政のリーダー的立場の方々から直接現状や課題を聴けたこと。そこで挙げられた課題を克服し、理想に向かって邁進する学校現場を目の当たりにしたこと。特に内蒙古自治区で教育行政機関の先生方、学校現場の先生方、子ども達にこの上なく温かな歓迎を受けたことを忘れることはできない。

また、日本の教職員の先生方と交流したこと。情報共有会では進行係の先生方のご尽力で有意義な会であった。情報共有会だけでなく移動のバスの中や食事の場などで、各学校や生徒の現状を聴けたことである。

[成果]

職業観をどのように育んでいるかを知ることを課題のひとつとしていたが、私自身の考える職業観がそもそも目の前の「仕事」に終始していたのに対し、中国における教育の目標が国家レベルでグローバルな人材を基礎教育の段階から育てる、そのために語学教育に力を入れ、海外へどんどん留学させる…というよ

うに視点のスケール感の違いを実感させられた。今回訪れた学校が優良校ばかりだったので、特にそのように思ったのかもしれないが。

また美術教育の現状を知ることも課題にしていたが、呼和浩特市新城区山水小学での宿題の展示が、美術の宿題にかかわらず、どの科目の提出物も丁寧に美しく装丁されていることに感銘を受けた。国家を挙げて芸術と体育を重要視していると説明を受けたが、生徒のすべての活動にそれが浸透していることが感じられた。また教員の資質向上を促すシステムが確立している印象を受けた。

日本でも教職員間で授業評価を行ったり、生徒の授業評価はあるが、中国の各学校の説明を聞くと、教員が日々切磋琢磨して評価されているようであった。

[今後への活用]

本校は工業・水産系の高校なので、総合学習の時間は「課題研究」という科目を実施している。文字通り各自が課題を見つけ、研究し発表する時間として位置づけられている。総合デザインコースでは4人～6人の班に分かれ、私が指導する班では全国高校デザイン選手権（デザセン）に企画を提案し、全国大会出場を目指している。中国へ行く前から指導してはいるが、帰国して改めて生徒の提案した企画を検証してみると、提案そのものが個人的過ぎる気がしてならない。急にグローバルな視点を持て、といっても難しいとは思うが、自分を取り巻く世界をもっと広い視野で捉えられるよう、今回見たこと、聞いたことを生徒に伝え、発想する視野の拡大の一助になればと考えている。

東城徳幸

[最も有意義だった内容]

教育部における2000年代以降の諸政策と「国家中長期教育改革・発展計画綱要（2010～2020年）」の説明を聞いたことは、訪問前の事前学習も含めて、中国の教育政策に関する自分の認識を覆される経験であった。特に公平な教育の普及・発展と、「資質教育」や「創造性」を理念としている点に関しては、中国社会の現状分析としても課題設定としても正確で魅力的なものだと感じた。ただし、具体的な政策を細かく見ていくと、広域な国土と人間の多様さに対応しなくてはならないためか、理念的すぎるところや矛盾するところも少々見受けられた。それらが個々の教育現場でどう受けとめられ、具体化されていくのか、今後の中国での展開に期待し、注目していきたいと思う。

[成果]

教育の平準化や全人的な資質教育の推進などの教育改革発展計画の理念を、教育現場がどのようなかたちで受け止め、どのようなかたちで現実化しようとしているのかを自分なりに観察してみたいとの課題で、各種学校視察に臨んだ。

各学校がいわゆる入試に直結するような知識の習得を目指すのではなく、芸術や体育の分野での普及モデルとしての使命感を持ち、校長のリーダーシップと教員のチームワーク、生徒のモチベーションが噛みあいながら、高いレベルの教育実践が行われている様子が窺えた。

[今後への活用]

「日本の教育に学びたい」という謙虚な言葉を各所で耳にしたが、体育・芸術教育の普及モデルとなる各学校のモチベーションの高さには心底感心させられた。どうやってそのようなモチベーションの高さを形成していくのか、我々が学ぶべき番であろう。

今回は日程の都合や熱烈歓迎の文化的なスタイルの制限があり、普段、どのような指導を行っているのか、また教員個々の課題はどのようなものなのかについては残念ながら知る機会が少なかったが、今後交流を持続させそういった点についても学んでいきたいと思っている。

まずは、教員が生徒に今回の視察の様子を伝え、そのリアクションを中国の生徒に返し、交流の端緒をつかみたいと考えている。それから、教員研修等で今回の成果を伝え、教員同士の問題意識の共有をはかりたいと考えている。また、本校は広い地域から生徒を受入れており、地域を巻き込むということはなかなか難しいが、中国籍や中国語のできる生徒も少なからず在籍しており、そういった特性を生かし、交流の持続を狙いたい。

日本教職員の「書道」を真剣に見学する児童 （勝利街小学）

西嶋徹……

[最も有意義だった内容]

この内容が一番有意義であった、と結論づけることは困難である。今回のすべてのプログラムが、それぞれ意義を有しており、自分に刺激を与えてくれるものであった。特に、内蒙古自治区において体験したこと、目にしたもの、耳にしたことは、新鮮であり、驚きであり、ある意味、ショックでもあった。

まず、内蒙古自治区と呼和浩特市教育委員会の行政関係者と今回受入れていただいた各学校の先生方の心のこもった歓迎ぶりは、10 月に受入れる立場となる本市としても、学ぶべき点が多かった。聞くところによると、今回の受入れ決定を受け、数ヶ月前からその準備に取り組んでおられた、ということである。事実、今回訪問した全ての場所で、入念に準備をされてきただけの質の高さを感じることができた。

本市からは、昨年度 2011 年にも中国訪問団員として荒尾市教育委員会指導主事が参加しており、話を聞いていたのであるが、そのときは、学校訪問であっても、授業風景等については見ることができなかったということであった。しかし、今回の訪問では、特に内蒙古自治区の学校において、授業中の教室に入って、授業風景を見ることができたし、子どもたちと直接ふれあう機会もいただいた。子どもたちの目は生き生きとしており、先生の指示に素直に従い、集中して学習に取り組んでいた。日本の子どもであれば、恥ずかしがってとてもできないであろうと思われるような身体表現等についても、堂々と行うことができていた。

学校教育については、まだまだ日本の方が先を行っているであろうという思い込みをもっていたのであるが、建物や設備の面でも、子どもたちの学ぶ姿勢の面でも、今回訪問した学校の方が上回っていた。

冒頭に書いた「ショック」とは、このことである。数年後にはアメリカをも追い越すであろうという経済力を背景に、中国の教育力が急速に発展していることを肌で感じることができた訪中であった。

[成果]

経済発展を続ける中国の基礎教育システムの現状がどのようになっているのか、ということが一番関心のあるところであり、自分としての課題でもあった。東京でのオリエンテーション講義を受けて現地に入り、国家レベルや自治区レベルの幹部から、具体的な説明を直接聞き、また、そこから発せられる施策を受けて実働している学校現場を見学したことで、中国の教育改革が着実に進み、施設・設備の面では、日本を凌ぐ状況になっていること、先進的な学校で教育を受けている子どもたちは確かな力を付けていること等を実感することができた。

中国は、好調な経済やその政治体制の特徴もあって、政策決定から実働までを、一気に進めることができる。今回見学した北京や呼和浩特の学校は、その中でも先進的な学校であったと思うが、中国教育部が「国家中長期教育改革・発展計画綱要（2010～2020 年）」で「公平な教育」「平均的な発展」を掲げている以上、いずれ中国国内の多くの学校が今回見学した学校に近い姿になることが予想される。一方我が国は、経済状況も社会全体の状況も停滞期に入っており、勢いの違いは明白である。それでも、「生きる力」の育成という教育理念を実現させるために、我々教育関係者一人ひとりが危機感を持って、誠実に取り組んでいけば、教育の質的向上を図ることは可能であろう。

今回のプログラムに参加して、より広い視野で教育を見つめることの大切さを痛切に感じることができたことが、自分にとって大きな収穫であった。

[今後への活用]

今回の研修成果を、今後いかに生かしていくか、という事であるが、まずは、この 10 月に予定されている中国教職員訪問団の本市における交流が成功するように、受入れの準備を計画的に進めていきたい。現時点では、ホームビジット、小学校、中学校、特別支援学校への訪問、宮崎兄弟生家資料館の見学、本市の特色を生かせる何らかの体験活動等をとおして、児童生徒、教職員、市民との交流ができないかと考えているところである。計画の詳細は今後詰めていくが、中国からの訪問団が、今回我々が得ることができたような成果を挙げて帰国できるよう、できる限りのことはやらなければと考えている。また、本市は、孫文と縁の深い宮崎兄弟の出身地である関係から、中国からの視察団に訪れていただく機会がたびたびある。昨年は、辛亥革命百周年ということもあって特に多かったが、今年も日中国交正常化 40 周年にあたるので、その機会があると思う。今後、そのような機会を得たときにも、本市を訪れて良かったと相手方に感じていただけるよう、自分ができる協力を行っていきたい。

また、本市教職員に対して、中国が「国家中長期教育改革・発展計画綱要（2010～2020 年）」に基づき、急速な教育改革を進めていること、先進的な学校では既に成果を挙げていること等を伝え、本市においても、我が国の教育理念である「生きる力」の育成を目指し、真剣な取り組みを展開する必要性があるという危機意識を共有していきたい。

馬場晴美

[最も有意義だった内容]

今回の訪問で最も印象に残ったのが、呼和浩特市の訪問である。北京でも歓迎していただいたが、呼和浩特ではまさに“熱烈歓迎”であり、中国のおもてなし文化に驚いた。この文化は子どもにも浸透しており、勝利街小学のパフォーマンス、十六中学の歓迎会、山水小学の子どもの笑顔などにふれ、本当にうれしくなった。そしてそのような子どもたち、先生方、教育部の方々や通訳の方々はとても好意的であり、マスメディアで報道されるような「反日」とは表面的で、しかも一部のことなのだ、ということに改めて確信を持てた。このように実際に子どもたちと触れ合うことは、社会科教員の私としてはとても勉強になった。また教員や生徒の国際社会への関心の高さにも接することができ、有意義であった。

授業の見学を直接自分で見てくることができ、本当に学ぶ点が多かった。

[成果]

中国の生徒がなぜ積極的かを学びたい、という点が課題であった。実際に学校を訪問し、多くの生徒が真剣に授業に取り組み、発言をしていた。英語や音楽、美術の授業でも生徒が発言をしていた。また教員も生徒の発言を積極的に促し、それを評価していた。例えば、英語の授業でも映像を見せるだけでなく、「場面はどのような様子か」「何が映っていたか」などを逐一聞いていくスタイルであった。

音楽の授業でも教員自らがリズムに合わせて踊っており、生徒の活動を引き出していた。これらの授業が積極性を育成する一因であると確信した。しかし、その他にも教育部のお話で伺った、都市の農村の格差の問題も積極性を引き出していると思う。その理由は、都市で生活していても学校に通うことができる生徒は都市戸籍の子のみであり、学校に通っている生徒はある程度環境が恵まれている、という点である。そのため、日本の生徒よりも積極的なのではないか、という要因も考察できた。

また（当初挙げていた課題ではないが）初めて知って驚いたのが、中国の小学校では社会科がないことである。中学に入り、テーマ史として歴史学習をするということであり、大変参考になった。

[今後への活用]

上述した、授業での積極性の育成はすぐに実践できると感じる。例えば、私自身の社会科の授業では教員側からの一方的な講義が多くなりがちであるが、中国の実践のように発言を促す機会を増やすことは出来る。また様々な事象に対し、私自身がまず意見を明確に提示することで、生徒の意見・発言を引き出すことができると思うので、実践していきたい。また私のみでなく、まずは学校で共有（すでに生徒と管理職には報告済みです）していきたい。

東長典

[最も有意義だった内容]

呼和浩特市の小・中学校の訪問が最も有意義であった。新城区勝利街小学と回民区第十六中学は、外国人の訪問を日ごろの学習成果を披露する場と位置付けている様子で、児童生徒のパフォーマンスをライブで見せてくださった。ここぞというときにあれだけの表現力を発揮できるのは、日ごろの鍛錬のたまものであり、子どもに着実に力を付ける学校教育が展開されていることがうかがわれた。

小学校児童の演技の完成度の高さにしても、中学・高校生徒の流ちょうな英語や力強いパフォーマンスにしても、日本の公立学校は太刀打ちできそうになく、考えさせられた。オーストラリアのメルボルンのキューハイスクールに約一週間滞在したり、同校生徒が総社市を訪れた際にホストファミリーをしたりしたことがあるが、呼和浩特の子どものエネルギーや表現力の豊かさは、オーストラリアの子どもをも凌駕していると思われる。

回民区太平街小学と新城区山水小学は、特別支援を要する子どもや農村部の子どもに対する教育の向上を命題にし、先生方が高い志と情熱を持って子どもと向き合っている様子がうかがわれた。私たち外国人訪問客と出会ったときの、子どもたちの屈託のない素朴な反応に胸の中がホッと温かくなり、来てよかったと心底思った。

各校の教育理念に沿って、立派な施設設備やICT環境の整備がなされているが、校長先生方は、それでもなお自然科学の設備が足りない、楽器が足りな

い、日本の特別支援教育や環境教育についてもっと学びたいなどと決して現状に甘んじることがなく、このような姿勢も見習いたいと感じた。

今の世の中で大切にすべきことは、呼和浩特の歴史（過去～現在）が物語ることと何ら変わりない。横軸には、異質なもの同士の出会い、交流、理解、協力、支え合い、融和、融合等々。縦軸としては、世代間の歴史・文化・学問の継承、環境づくり・環境保全や世界平和のシステム継承のための学校教育等々。

混迷を極める現代社会をたくましく生き抜き、発展させていくことができるよう、次代を担う子どもたちをしっかりと育成するのが私たち大人世代の責務だと改めて痛感した。

[成果]

呼和浩特市の各訪問校が、非常に明確なビジョンと向上心を持って子どもたちの教育を営んでいることが分かった。国家の期待や地域住民の期待が相当大きい中で、ある学校は芸術・文化、ある学校は読書、ある学校は体育に重点を置くなど、横並び意識ではなく自立的に物事を発想し研究を重ねることによって自分の学校らしい成果を挙げているように思えた。

広大な中国では地域による経済格差や学校間格差が深刻であり、それにどのように対処しているのかを知ることが自分の課題の一つであったが、他と同じ姿を求め同じことをして格差を埋めるのではなく、自校の特色をとことん伸ばすことによって社会発展に有為な多ジャンルの人材を育てることも、その学校の存在意義だと気付かされた。

[今後への活用]

経済の急成長下にあって教育予算も潤沢であろう呼和浩特とは、施設設備の充実度や保護者・地域からの期待度・信頼度等、学校を取り巻く環境はかなり異なるが、教育委員会や各学校が目指す方向を明確にし、真の特色づくりに励むことによって学校適応を促進するとともに、学力向上等の保護者・地域のニーズに応えられるようにしたい。そのためには、例えば学校評価の結果を予算に反映するシステムづくりが必要かもしれないし、真の特色づくりについて研修する機会も必要かもしれない。研修の場では、本市から中国に渡った教職員数名が講師となり、中国の学校づくりの事例を紹介することが考えられる。それに加えて、平成 25 年度にも中国政府日本教職員招へいプログラムの受入れをすることにより、彼らのものの見方や考え方などから各校が刺激を受け、真の特色づくりが促進されるきっかけをつくりたい。

お遊戯の授業見学（山水小学）

平松高志……

[最も有意義だった内容]

中国で見たことや交流したことはすべてが教員としての自分の成長に大きく役立ったと思います。その中でも、直接児童・生徒の活動を見たり、直接話しかけたりしたことや、先生方の話を聞いたことがよかったです。

事前の研修や中国教育部の説明などから制度的なことの概要はわかっても、細かなニュアンスはやはり実際の学校を見ないとわからない点が多いと思いました。

呼和浩特では中国側で手配した数名の通訳の方々がホテルに同宿してくださったため、食事の時間にも、積極的に中国についての話ができ、その時間も大変貴重な時間となりました。また、情報共有会で私たち訪問団のメンバー同士が目標や成果を共有できたことも大変有意義でした。

[成果]

中国で見たことや交流したことはすべてが教員としての自分の成長に大きく役立つと思う。その中でも、事前にもった疑問の1つは国土の広い中国でどのように教育制度を構築しているかという点である。教育行政については中国教育部が方針を決め、地方自治体がそれをさらに具体化し、学校が特色ある教育を実施するという点で日本と似ていると感じた。しかし、設備面の充実が図られていることから、必要な予算や改革は、ある面日本よりも強力に推し進められていると感じた。一方、学校ごとに特色が強く存在することや、教員採用が各学校や自治体に任されていることなどから、日本よりも特色を打ちだしやすい制度かもしれないという感想をもった。

疑問の2つ目は教育課程である。日本と似ているところも多いが、体育や芸術の時間のもちかたや、小学校が教科担任制であることや、英語の早期教育などは日本にない特色だと感じた。英語などより専門的

な教育を初等教育から行える反面、教科担任制は日本の雇用形態では柔軟な教育課程改定を妨げる面もあると予想され、長短両面があると感じた。また、外国語教育については小学校の授業の内容も大変すばらしく、早期の学習効果が感じられた。

また、生徒や先生方、通訳の方々と交流したことは大変心に残った。連絡先を交換した方もあり、今後継続して連絡がとれればと思った。

[今後への活用]

今回学んだことは、教職員の研修会や生徒への国際理解教育の中で紹介していきたいと思う。また、地域への情報発信として PTA の懇談会など、身近なところから紹介していきたい。

今年度は中国教職員の受入れ予定は無いので、昨年度受入れた際に交流した教員や生徒を中心に、生徒会に投げかけ、交流についても模索していきたい。

益﨑慎司……

[最も有意義だった内容]

今回のプログラムを通じて最も有意義だったのは、中国の子どもたち、教職員、行政担当者、そして通訳していただいた方々などと直接ふれあうことができたことです。その国を知るためには、その国の人を知ることだということを確信しました。

外国を訪れることそのものは、今の時代ではたやすくできることです。しかし、教育という共通の物差しを互いに並べて比較しながら、見聞したり論じたりすることは、私が想像していたよりはるかに有益なことでした。また、昭君墓、故宮博物館などの文化・歴史遺産を見る機会をいただいたことも大変ありがたいことでした。

中国の悠久の歴史のほんの一端を垣間見ただけなのでしょうが、それでも私自身を圧倒するに足るものでした。それから、プログラム期間中に二度実施された、情報共有会の成果も大きかったです。

見たこと感じたことを互いに共有することで、違う視点で捉え直すことができたり、互いに言葉に出して語ることで、それに触発され新たなアイディアや思いが湧き上がってきたりしました。

担当の先生方の工夫にも敬服したと同時に、今後その手法についても参考とさせていただくつもりです。

[成果]

中国に存在する教育の格差。都市と農村、貧富による差、地域や民族によるもの、これらの格差を今後の教育の課題として、国として取り組みを進めている現状についてある程度理解することができました。また、この国は、教育だけにとどまらず改革を推し進める際に、大胆にやってのけるパワーを持っていると感じました。国としての体制に違いがあるものの、これほどにドラスティックな変革ができるということが中国の強みであることは間違いないと確信しました。翻って、私たちも教育課程が改訂された際など、その趣旨に沿って、ものの考え方から切り替えるだけの柔軟性と、変化に対する順応性を持つことができているのか、自省の念を禁じ得ませんでした。

今回の中国訪問を終えて強く感じていることは、外に目を向けることの大切さです。それは、私たち教師にとっては当然のことながら、これからの社会を担っていく子どもたちにこそ有益なことだということを感じました。日本が内向きな社会になってきたと言われていた言葉に、少なからぬ共感を覚えるようになりました。また、今回交流のあった中国の方々との触れあいを通して、互いの違いを乗り越えて共通の価値を見いだすことの素晴らしさを学ぶことができました。特に、中国の方から受けた「歓迎の心」は今後決して忘れることはないと思います。また、同様に、今回一緒に参加された先生方との交流も、これからの宝となりました。

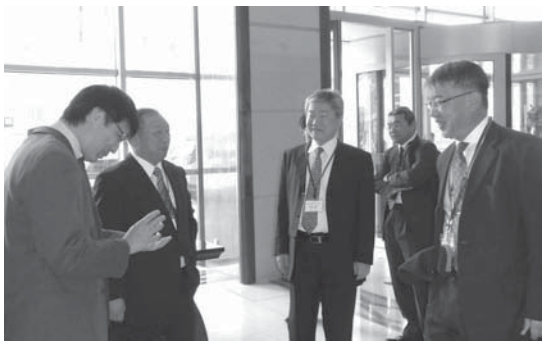
[今後への活用]

荒尾市ではこの夏、市制70周年を記念して国際交流事業が計画されています。市内から中学生 15 名と教職員が上海に派遣されることになっています。これに際して、募集時に関心のある生徒に対して私の体験を伝え、その意義について知らせていくことで、応募を促します。

派遣者が決定されましたら、私自身が中国訪問を通して得たもの、感じたこと、考えたこと、そして中国の方々から受けた歓迎の様子などを詳しく話をする中で、上海訪問についてのイメージを膨らませてくれ

るように努めます。また、彼らの訪問後には、お互いに感じたことや学んだことを出し合う場を設定して、交流を総括する機会を持ちたいと考えています。私自身が今回のプログラム中の情報共有会で経験したことを、子どもたちにも同様に経験してもらいたいと思っています。

10 月に予定されている中国からの訪問団の来校に際しては、受入れの際のプログラムについて、今回経験させていただいた「訪問する者の立場として知りたかったこと」という視点で考えていきたいと思っています。



日本教職員同士の交流も、今後の宝となった。

三田暢夫……

[最も有意義だった内容]

今回の訪中に関して、ほとんどすべての経験が有意義であるとは思うが、特に有意義であったのは学校訪問である。特に内蒙古自治区という農村部に近い地域での学校訪問を行うことで、都心部だけでなく中国国内でどのくらい国としての教育の推進が行われているのかを知る良いバロメータになった。

農村部に近い地域における学校訪問で、外国語教育がどのようになされているのか、通常の小学校の教育風景はどうなのかを知ることができ、中国が国として近代的な教育の推進を全力で行っているということを読み取ることができた。

また、学校訪問において、様々な学校施設や教員の配置を見ることで教育に対してどのくらいお金がかかっているのかを知ることができたことも、非常に有意義であった。

[成果]

今回の参加に当たり、課題として設定したのは次の三点である。

1.教育行政に関わる者として、他の国の教育状況を実際に見ることで、今後の様々な施策に生かしていくとともに、多摩市が進めている ESD の交流先として連携できる学校や機関等について情報を得ること

2.今後、外国籍の転入者に対してどのように関わっていくのか、また国際交流教育をいかにして進めるかを考えるための経験とすること

3.指導主事として様々な経験を積むことで、今後の学校への指導・助言の一助とすること

これらの課題に対して今回の成果は、非常に大きなものがあった。

一点目に関しては、中国の多くの学校が交流に対して前向きであるということが分かったことである。特に今回訪問した呼和浩特第十六中学に関しては、英語でのコミュニケーションが可能であること、施設的にも整っていること、様々な海外との交流を行っていること等の条件が整っており魅力的な連携先であると考える。また、内蒙古自治区の教育委員会も連携することに前向きであり、連携への推進が非常に行いやすい。今後は多摩市内の中学校に今回の体験を紹介しながら連携に関する提案を行っていきたいと考える。

二点目に関しては、中国の現状及び一般的な子どもや保護者の考え方、国で推進している政策を知ることにより、中国から転入してくる家庭の背景にあるものを知ることができた。今後の転入に関する対応の際に生かしていきたいと考える。

三点目に関しては、この体験自体が非常に有意義であった。上記もしたが、海外で教育に対してどのように考え、どのように取り組んでいるかを知ることで、今後の世界情勢や大きな流れを知ることができた。特に中国の学校における英語教育の推進を知ることで国として世界を視野に入れた国際的なビジネスの発展を考えていることが分かり、その経済的な発展を支える教育を行っていることが顕著に表れているように感じた。

[今後への活用]

今回の成果を生かすためには、二つの取り組みが必要と考える。

一つ目は、今回の訪問で見聞し感じた内容を、できる限り積極的に喧伝していくことである。この交流を通して感じた中国の教育の推進は前述したように、非常に急伸しており、中国が国として何を考え、どのような人材を育てようとしているのかがよくわかるものであった。この状況は訪問し現状を見聞した者にしか話すことができない内容である。この内容を各小・中学校や様々な折に喧伝していくことで、それぞれの学校の教育が進む方向について一石を投じることができると考える。

二つ目は、中国の学校とのつながりをもつようにしていくことである。喧伝していき一石を投じることで児童・生徒を取り巻く環境に間接的に影響を与えていくだけでなく、交流を実施していくことで直接児童・生徒の意識に関与することができる。中国の学校につながることで、多摩市の児童・生徒の意識がより外に向かっていけるようにするとともに、今後国際社会に関与していく人材の育成を推進していきたい。そのためには他の文化に触れることで大きな経験が得られる。その経験は確実に児童・生徒の生きる力に結びつくものである。そこでまずは学校同士の交流をテレビ会議システムを活用するなどして具体的に結び付けていきたい。

和久田恭生……

[最も有意義だった内容]

今回のプログラムのすべてが有意義であったと思う。訪問団団員の一人ひとりがそれぞれの役割を十分に果たして、中国訪問を終えることができたと思う。期間中に2回行われた情報共有会では、工夫された方法で進められ、自分自身とそれぞれが考えていることを確認し合うことができたと思う。また、今回の訪問では、通訳の方だけでなく日本語で会話ができる教育関係者が数名おられたことが、私たちの疑問を解決し、状況の説明をよく理解することに繋がったと思う。

私が最も強く印象に残ったことは、呼和浩特市回民区第十六中学への訪問である。生徒たちの表現力の育成について考えさせられた。武術演舞、民族舞踊、英会話、馬頭琴演奏、日本語による「昴」合唱などの数々の場面で自信に満ちたハイレベルの表現力が発揮され、一連の発表は生徒主体で淀みなく流れるような展開であった。このような表現力は、一体どのようにして育まれるのだろうか。生徒の表情は豊かで、意欲に溢れていた。生徒の能力をこれほどまで高め、鍛える指導は、どのように行われているのかをこれからも知りたいと思っている。生徒は多くの可能性を持っているが、それを伸ばすのは教師の力量に負うところが大きい。

今回、教師の指導力については、私自身は十分には知ることができなかったが、今後は機会を捉えて把握したいと思っている。

最後に、今回の内蒙古自治区教育庁関係者による歓迎ぶりは、私の想像を遥かに超え、思いも及ばないほど盛大であった。御馳走の食べ方にも古くからの文化が大切にされ、それが今も受け継がれていた。

実際に中国へ行かせていただいたお陰で、中国の教育の素晴らしいところを自分の目で見ることができた。

[成果]

中国に行くことが決まってからは、より中国のことに関心を持つようになった。まず、池上彰の著書『そうだったのか！ 中国』を読んでみると、これまで自分が知らなかったことが沢山あった。また、ACCU から送られてきた中国の教育に関する資料に目を通して、教育制度や近年の重点的な取り組みの概要を知ることができた。これまでは日本国内で行われている教育のことにしか目を向けていなかったので、今回の訪問を通して少し視野が広くなったと思う。自分自身で設定していた参加するにあたっての抱負や目標に対しては、「総合所見」と「最も有意義であった内容」で記載したとおりである。

日本と中国で共通した考え方が多かったという印象である。しかし、特別支援教育については異なる部分が少なくないと思った。日本の人口の 10 倍である中国でありながら、特別支援学校の設置基準は「人口 30 万人を超える都市」となっている。日本とほぼ同数の特別支援学校しか設置されておらず、児童生徒数は日本の約3倍にしか過ぎない。訪問した太平街小学の附属特殊教育学校では、自分の身の回りのことができない児童生徒は入学できず、20 名の児童生徒に対して5名の教員が指導にあたっているということであった。

[今後への活用]

まずは、今年 10 月に来校予定の中国教職員訪問団の受入れに生かすことができると考えている。中国を実際に訪問し、その教育の状況を見ることができたため、それに基づいた質問ができ、会話することで交流が深まると思う。

身近なところでは、帰国後に学校の職員朝会でこれまで4回、中国訪問に関する話を行った。さらに機会があれば、研修等で話をしていきたいと思う。

渡邊荘太郎……

[最も有意義だった内容]

呼和浩特市新城区山水小学

6月1日は、「こどもの日」だったので、児童がいない中での学校訪問だと考えていたが、午前中までとはいえ児童が通常に登校しており、日中両国のご尽力に感謝するところであった。

小学校の施設は5年前まで農村地帯だったことを感じさせないすばらしいものであった。校庭に草木が植えられた経緯から先生方の熱意を感じることができた。児童が、目の体操や全校体操をしている姿をみて、標準化されたカリキュラムが、ここ内蒙古自治区でも徹底されていることを感じた。

学校では、中休みの児童と一緒に遊ぶ機会があり、長縄跳びをさせていただいた。日本人が突如入ってきたことで、一瞬戸惑いの表情も見せたが、日本でも中国でも遊ぶという目的で取り組むとうち解けるのが早いと感じた。私が、長縄をしているときにあがる児童の歓声が嬉しく楽しかった。また、休み時間の生徒の活動に、教師が一緒になって活動していたことに先生方の熱心さや純粋さを感じた。

充実した休み時間の後に、整然と教室に戻る姿からは、日頃からの躾がいきとどいていることを感じた。教室では、習字と切り絵が行われている教室に案内され集中した取り組みを見ることができた。音楽の授業では、活動を伴う活動がありいきいきとした取り組みであった。

これまで、いくつかの学校を見てきたが、暖かみと教師の児童に対する情熱を感じた学校の一つであった。

日本のカリキュラムとの違いで、教科担任制であることに驚きがあった。本指導方法の長所・短所はいうまでもなく、また地域や児童のようすによっても賛否が分かれるところであろうが、本カリキュラムにおいて専門性の高い学習ができることであろう。

[成果]

訪問前に「国際理解教育において、生徒に何を身に付けさせるか」という課題を設定した。

長崎市は、国際交流を推進している。現段階では、教育現場と教育委員会の連携が十分ではない点がある。また市との連携も一つの課題である。今後は、行政機関と学校現場の調整を推し進め、共通理解が図れるようにはたらきかけることが大切であると感じた。

5月 28 日の北京師範大学附属実験中学での意見交換では、語学はコミュニケーションにおける道具であることがわかった。また、母国や他国の文化の知識と教養を身につけておくことがコミュニケーションを円滑にすることの重要性も学んだ。これは本校の研究の骨子を作ったときの方針と合致しており、自信をもって研究が進められると感じた。

学校現場では、時数についての縛りが大きく、また長崎独特のカリキュラム編成において、北京師範大学附属実験中学のような先進的な取り組みは難しいものの国際理解教育の本質的なものは、おおいに取り入れていけると思った。

アポイントなしに突如生徒の前に現れたわれわれ日本人教育関係者に対して、全く臆することなく、授業に集中できたり、学校長の指示によりダンスを披露することとなった彼らの演技に敬服するとともに、国際人としての教養と心の豊かさを実感した。この寛容な心の育成にアプローチしたい。

[今後への活用]

本校が、研究指定校となっているため自分の感じた、二つの視点で臨みたいと思った。その二つは、「自国の文化の大切さ」「外国語を学ぶ大切さ」である。

今回のプログラムでも自国の文化を継承するものとして様々な演技を見させていただいた。芸術の域に達したものを見ることができたと感じた。代々受け継がれた文化を愛し、堂々と披露できる態度に感心させられた。

研究のねらいとしても、母国を愛するところまでは至らないとしても、地域について学び、誇りをもって生活ができる心情について学習を深めていきたい。「外国語の大切さ」は、外国語を意思伝達の道具として活用することで、視野が無限に広がる点を再確認したい。

中国教職員との意見交換会（北京師範大学附属実験中学）

◆資料 1.

中国政府日本教職員招へいプログラム

（2012 年 5 月 27 日－6 月 3 日： 中国／北京市、内蒙古自治区フフホト市）

実 施 要 項

1. 背景

国際連合大学は公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）を委託機関として、「国際教育交流事業」のひとつである中国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。2002 年より開始されたこのプログラムにより、これまで約 1,200 名の教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日中両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年約 10 名の日本の教職員を中国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が中国政府に評価され、日中国交正常化 35 周年を記念する 2007 年からは参加人数を倍増し、中国政府教育部による招へいプログラムとして実施され、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2. 目的

(1) 中国の教育制度および教育課題への理解を深め、成果を学校・地域の教育活動に還元すること
(2) 教育現場での交流・意見交換を通し、日中教職員間の持続的な相互交流を育み、日中両国の教育の質を高めること
(3) 中国の文化全般への理解を深めること
(4) 日中両国の相互理解と友好を促進すること

3. 活動内容

(1) 中国の教育政策の現状と課題についての研修
(2) 中国の教職員および児童生徒との、教育現場での交流
(3) 学校および教育・文化施設の視察

4. 日程

事前オリエンテーション： 2012 年 5 月 26 日（土）
プログラム実施期間： 2012 年 5 月 27 日（日）から 6 月 3 日（日）（8 日間）

日付	日程	訪問先	活動
5 月 26 日（土）	前日（午後）	東京	事前オリエンテーション
5 月 27 日（日）	派遣第 1 日目	北京市	羽田空港出発（羽田発） 北京首都国際空港到着
5 月 28 日（月） ｜ 6 月 2 日（土）	派遣第 2 日目 ｜ 派遣第 7 日目	北京市 内蒙古自治区 北京市	中国教育部表敬訪問 訪問先自治体の教育委員会表敬訪問 学校訪問 教育・文化施設等見学 これまでの「中国教職員招へいプログラム」参加者との懇談
6 月 3 日（日）	派遣第 8 日目		北京出発 （羽田、関西、福岡へ） 日本の各地へ到着

注：訪問先、活動内容については変更の可能性があります。スケジュールの詳細は追って通知します。

5. 参加者

下記の教職員、随行員、計 25 名程度の参加とする。

(1) 2011-2012 年中国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会が推薦する教職員
(2) 上記プログラムの東京近郊受入れ校の教職員
(3) 2012-2013 年中国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会が推薦する教職員
(4) ユネスコスクール、ユネスコスクールに加盟申請中の学校、ユネスコスクール加盟に関心のある学校のうちのいずれかに該当する教職員
(5) 国際連合大学、文部科学省、ACCU の職員

6. 参加資格

(1) 日本国民であること。
(2) 所属する学校等から推薦を受けた、初等中等教育教職員（教育行政職員を含む）であること。特に、在職 5 年～15 年程度の教員が望ましい。
(3) 将来にわたり中国との具体的な教育交流の推進に寄与できること。特に、中国との学校/教員/児童生徒/地域間の各交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
(4) 健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
(5) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。

7. 応募手続

関係各自治体の教育委員会、または学校は、参加者を選定し、所定の派遣候補者データシートを揃え、所定の期日までに ACCU へ推薦して下さい。 ＊提出された文書は返却されません。

8. 評価と報告

参加者は、プログラム終了後、所定の報告用紙により ACCU に報告書を提出する。

9. 渡航費等諸経費

（1）中国政府が下記について負担する。

- 中国国内の移動に要する交通費
- 中国滞在中の宿泊
- 中国滞在中の食事 ＊中国政府から日当は支払われませんが、中国滞在中の食事が手配されます。
- プログラムの運営に必要な経費（通訳等）

（2） ACCU が下記について負担する。

- 日本（往路：羽田空港、復路：羽田・関西・福岡空港のうち最寄り空港）と指定された中国の国際空港間のエコノミークラス航空券
- 日本国内交通費：オリエンテーション日の会場までの交通費および帰国日の到着空港からの交通費の定額（ACCU の規定に準ずる）
- オリエンテーション当日（5 月 26 日）の宿泊が必要な参加者について、日当の定額および宿泊
- 帰国日（6 月 3 日）の日当の定額（ACCU の規定に準ずる）

  注 1：オリエンテーション当日、開始までに到着可能な交通手段がない場合に限り、ACCU が前日の宿泊（手配と経費負担）および日当を負担します。

  注 2：帰国当日中に居住地に到着可能な交通手段がない場合に限り、ACCU が当日の宿泊および日当を負担します。

(3) 各参加者の負担

- 海外旅行保険料：プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において加入しておくこと。
- 上記（1）、（2）以外の諸経費

⑷ 旅券と査証について

- 旅券（パスポート）：入国時に 1 ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- 査証（ビザ）：一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

10. 通訳

プログラム期間中は、日本語‐中国語間の通訳を配置する。

11. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU） 人物交流課
〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館
TEL: 03-3269-4498/4435 FAX: 03-3269-4510
E-mail: sasaki@accu.or.jp, n-toyama@accu.or.jp

◆資料２.

国際連合大学 2011-2012 年国際教育交流事業

中国政府日本教職員招へいプログラム

（2012 年 5 月 27 日－6 月 3 日：中国　北京市、内蒙古自治区呼和浩特市）

日　程

月　日	地名	現地時間	便名	予　定　　＜宿泊地＞
5 月 26 日 (土)	各地		各自	各地より大森へ（会場：大森東急イン）
	大森	14:20		受付開始
		14:30-17:30		オリエンテーション
		18:00-20:00		参加者懇談会
		20:00		解散
				＜都内　大森東急イン＞
5 月 27 日 (日)	北京	10:20	CA182	大森東急イン　5Fロビー前集合　※2
		10:30		ホテル出発。貸し切りバスにて羽田空港へ
		13:50		空路、羽田空港（国際線旅客ターミナル）より北京へ
		16:30		北京首都国際航空(T3)到着
		19:00		ホテルチェックイン、夕飯
				＜宿泊：北京市　西西友誼酒店＞
5 月 28 日 (月)	北京	08:00		朝食
		09:00		ホテルを出発
		9:30-11:30		教育部表敬訪問（教育部 201 会議室）
		11:40-13:00		教育部主催昼食会
		13:40-16:30		北京師範大学付属実験中学訪問
		17:00		ホテル到着
		18:00		夕食
		19:00		第一回情報共有会（場所：ホテル会議室）
				＜宿泊：北京市　西西友誼酒店＞
5 月 29 日 (火)	北京	07:00	CA1111	朝食
		07:30		ホテルチェックアウト、北京首都国際空港（T3）へ出発
	呼和浩特	10:45		空路、北京首都国際空港より呼和浩特へ移動
		12:10		呼和浩特白塔空港到着
		12:50		昼食（場所：維力斯大酒店　ビュッフェ式）
		13:30		バスで昭君博物院へ移動
		14:00-17:00		昭君墓を見学
		18:00		ホテルチェックイン、夕食（場所：維力斯大酒店）
				＜宿泊：呼和浩特市　維力斯大酒店＞
5 月 30 日 (水)	呼和浩特	07:00		朝食
		08:30		集合（場所：ホテルロビー）、ホテルを出発
		09:00-10:00		内モンゴル教育庁表敬訪問
		10:00-11:30		内モンゴル博物院見学
		12:00-13:30		昼食会（内モンゴル教育庁主催、維力斯大酒店）
		14:10		集合、出発（場所：ホテルロビー）
		14:30-17:00		新城区勝利街小学（優良小学校）訪問
		17:30		ホテル到着
		18:00		夕食（場所：維力斯大酒店）
				＜宿泊：呼和浩特市　維力斯大酒店＞
5 月 31日 (木)	呼和浩特	07:00		朝食
		08:30-10:00		回民区第十六中学訪問（優良中学校）
		10:30-12:00		回民区太平街小学訪問（特別支援学校）
		12:00-14:00		昼食会（呼和浩特市教育局主催、場所：西貝莜面村）
		14:30-17:00		玉泉区大召エリア見学（アルタン・ハン広場など）
		17:30		ホテル到着
		18:00		夕食（場所：維力斯大酒店）
				＜宿泊：呼和浩特市　維力斯大酒店＞

6月1日 (金)	呼和 浩特 北京	07:00	CA116	朝食
		08:30-11:30		新城区山水小学訪問(市郊外小学校)
		12:00-13:00		昼食(場所:調整中)
		13:10		ホテルチェックアウト、呼和浩特白塔空港へ移動
		15:00		空路、呼和浩特白塔空港より北京へ移動
		16:15		首都国際空港(T3)到着
		18:00		ホテルチェックイン、夕食
		19:00		第二回情報共有会(場所:ホテル会議室)
＜宿泊:北京市　西西友誼酒店＞				
6月2日 (土)	北京	08:30		朝食、ホテルを出発
		09:00-11:30		故宮博物院見学
		12:00-13:00		昼食(場所:調整中)
		14:00-17:00		自由行動
		17:30		ホテル到着
		18:00		夕食
＜宿泊:北京市　西西友誼酒店＞				
6月3日 (日)	北京	05:00		ホテルチェックアウト、ホテル発、バスで移動
		06:30		北京首都国際航空到着
		8:30-12:50	CA181	空路、北京首都国際空港より羽田空港へ
		8:55-14:10	CA953	空路、北京首都国際空港より福岡空港へ
	各地		各自	各地へ移動、帰宅

◆資料3.

1.参加者リスト(20名)

1	井川　裕之	IGAWA Hiroyuki	慶應義塾幼稚舎	教諭	東京都
2	井戸　しのぶ	IDO Shinobu	東京都多摩市立豊ヶ丘小学校	主幹教諭	東京都
3	河辺　哲也	KAWABE Tetsuya	美祢市教育委員会	学校教育課 指導係長	山口県
4	木屋村　浩章	KIYAMURA Hiroaki	徳島県教育委員会	学校政策課学力向上推進室　指導主事	徳島県
5	久保田　勝己(副団長)	KUBOTA Katsumi	徳島県立ひのみね支援学校	教頭	徳島県
6	熊谷　久恵	KUMAGAI　Hisae	気仙沼市立九条小学校	教諭	宮城県
7	紺野　知子	KONNO Tomoko	気仙沼市立津谷中学校	教諭	宮城県
8	佐々木　雅一	SASAKI Masakazu	東京都多摩市立青陵中学校	教諭	東京都
9	佐藤　尚美	SATO Naomi	聖徳学園中学・高等学校	教諭	東京都
10	清水　由美子	SHIMIZU Yumiko	美祢市立厚保中学校	教諭	山口県
11	達見　かおる	TATSUMI Kaoru	徳島県立徳島科学技術高等学校	教諭	徳島県
12	東城　徳幸	TOJO Noriyuki	筑波大学附属駒場中高等学校	教諭	東京都
13	西嶋　徹	NISHIJIMA Toru	熊本県荒尾市教育委員会	教育振興課指導主事	熊本県
14	馬場　晴美	BABA Harumi	私立市川高等学校	教諭	千葉県
15	東　長典(副団長)	HIGASHI Hisanori	総社市教育委員会	学校教育課　主幹	岡山県
16	平松　高志	HIRAMATSU Takashi	総社市立総社東中学校	教諭	岡山県
17	益﨑　慎司	MASUZAKI Shinji	荒尾市立荒尾海陽中学校	教頭	熊本県
18	三田　暢夫	MITA Nobuo	多摩市教育委員会	指導主事	東京都
19	和久田　恭生(団長)	WAKUDA Yasuo	熊本県立荒尾支援学校	校長	熊本県
20	渡邉　荘太郎	WATANABE Sotaro	長崎市立梅香崎中学校	教諭	長崎県

2.主催者代表 (1名)

21	秋葉 正嗣	AKIBA Masashi	国際連合大学	大学院事務局長	東京都

3.文部科学省同行 (2名)

22	井上　賢一	INOUE　Kenichi	文部科学省	初等中等教育局教職員課　課長補佐	東京都
23	岩村　沙綾香	IWAMURA Sayaka	文部科学省	大臣官房国際課 国際協力政策室人物交流係　主任	東京都

4.事務局同行(公益財団法人ユネスコ・アジア・文化センター) (2名)

24	佐々木　万里子	SASAKI Mariko	公益財団法人　ユネスコ・アジア文化センター	人物交流課　課長	東京都
25	外山　紀子	TOYAMA Noriko	公益財団法人　ユネスコ・アジア文化センター	人物交流課	東京都

5. オリエンテーション参加者

	新井　聡	ARAI Satoru	文部科学省	生涯学習政策局 調査企画課	東京都
	鎌塚房夫	KAMATSUKA Fusao	板橋区立第六小学校	主幹教諭	東京都
	丹羽美由紀	NIWA Miyuki	筑波大学附属坂戸高等学校	教諭	埼玉県
	島津　正數	Shimazu Masakazu	公益財団法人　ユネスコ・アジア文化センター	事務局長	東京都

5.大使館

	白剛	BAI　Gang	中華人民共和国駐日本国大使館	公使参事官	東京都
	柳澤　好治	YANAGISAWA Koji	在中国日本大使館　広報センター	一等書記官	北京市

6. 中国側協力者

◆北京市

劉宝利 （LIU Baoli）	（中国教育部　国際協力交流司　司長）
向明灿（XIANG Mingcan）	（中国教育部　発展企画総合処　処長）
王鉄輝 （WANG Tiehui）	（中国教育部　国際協力交流司 ）
葵暁東 （CAI Xiaodong）	（北京師範大学附属実験中学　校長）

◆内蒙古自治区呼和浩特（フフホト）市

朱炳文（ZHU Bingwen）	（内蒙古自治区教育庁　副庁長）
王利生（WANG Lisheng）	（内蒙古自治区教育庁　基教処　処長）
朱広元 （ZHU　Guangyuan）	（内蒙古自治区教育庁　対外協力交流処　処長）
李剛 （LI　Gang　）	（内蒙古自治区教育庁　対外協力交流処）
云恒 （YUN Heng）	（内蒙古自治区教育庁　副局長）
王新（WANG Xin）	（呼和浩特市教育局　副調研員，呼和浩特市教育学会　会長　）
王淑珍（WANG Shuzhen）	（呼和浩特市新城区勝利街小学　校長）
張秉焕 （ZHANG Binghuan）	（呼和浩特市回民区太平街小学　校長）
王雅萍 （WANG Yaping）	（呼和浩特市新城区山水小学　校長）
李義平（LI Yiping）	（呼和浩特市回民区第十六中学　校長）

◆通訳協力者（呼和浩特市）

王磊 （WANG Lei）
周硯舒 （ZHOU Yanshu）
ハスントイヤー（Hasen）
張麗芳（ZHANG Lifang）

●国際連合大学 2011-2012 年国際教育交流事業●
中国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告書

2012年9月
編集・発行

国際連合大学[UNU]

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]

〒162-8484
東京都新宿区袋町6番地　日本出版会館
電話　(03) 3269-4498
Email　exchange@accu.or.jp
URL　http://www.accu.or.jp

Printed in Japan by Hokuetsu Printing Inc. [200]
ⓒ2012 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)